

年報

令和元年度（2019年度）



Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学



## 2019年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学

理事長・学長 村嶋幸代

2019年度の年報をお届けできることを嬉しく思います。

中国・武漢から広がった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、多大な影響を及ぼしています。2020年1月16日に国内で初の感染者を確認し、30日には、WHOのテドロス事務局長が、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」だと宣言。2月1日には、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号から香港で下船した乗客が罹患していたと発表されました。2月27日には、安倍総理が小・中・高等学校に一斉休校を呼びかけ、3月3日には大分県で初めての患者が発見され、同11日にはWHOが「パンデミックとみなせる」と発表しました。

このような事態を受け、本学でも、3月18日に予定していた卒業式・修了式・学位記授与式の中止を決定しました。苦渋の決断でした。また、多くの大学等で卒業式ができない事態となりました。

このような状況下でも、学生・院生たちは国家試験に全員が合格し、元気に本学を巣立っていきました。関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

2019年度の年度末がそのような状態でしたので、年報としてまとまるのは感慨深いです。

本年度、年報の記載に関しては、新しい試みがなされています。

- ① 2019年度トピックスとして、グラビアページを付しました。
- ② 本学には、附属組織（附属図書館、看護研究交流センター、研修・実習センター（南大分キャンパス））がありますので、独立の章にして記載しました。
- ③ 全体を、教育－研究－社会貢献－学務という順序で構造化しました。
- ④ 従来、記載されていなかった「中期目標・中期計画」を入れました。

年報は、自己点検・評価委員会の所掌事項です。本委員会は、PDCAサイクルを回しながら、全学の改善・改革を進める重要な委員会です。本年度、スタイルが変更された年報を評価にも活かしながら、「大分県における看護学の拠点となる」という本学の使命発揮に向けて、更に、改善・改革に取り組んでいきたいと思っております。

2019年度の年報をご一読頂き、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 看護師・助産師・保健師国家試験に全員合格

一昨年に続き、2019年度も看護師・助産師・保健師国家試験に全員合格しました。



国家試験壮行会

# 2019年度 大分県立看護科学大学 トピックス

### 地元企業と医療用除菌水の研究開発

鳥繁産業（大分県津久見市）と除菌効果のある微酸性電解水の医療現場での使用に向け共同研究を実施しています。

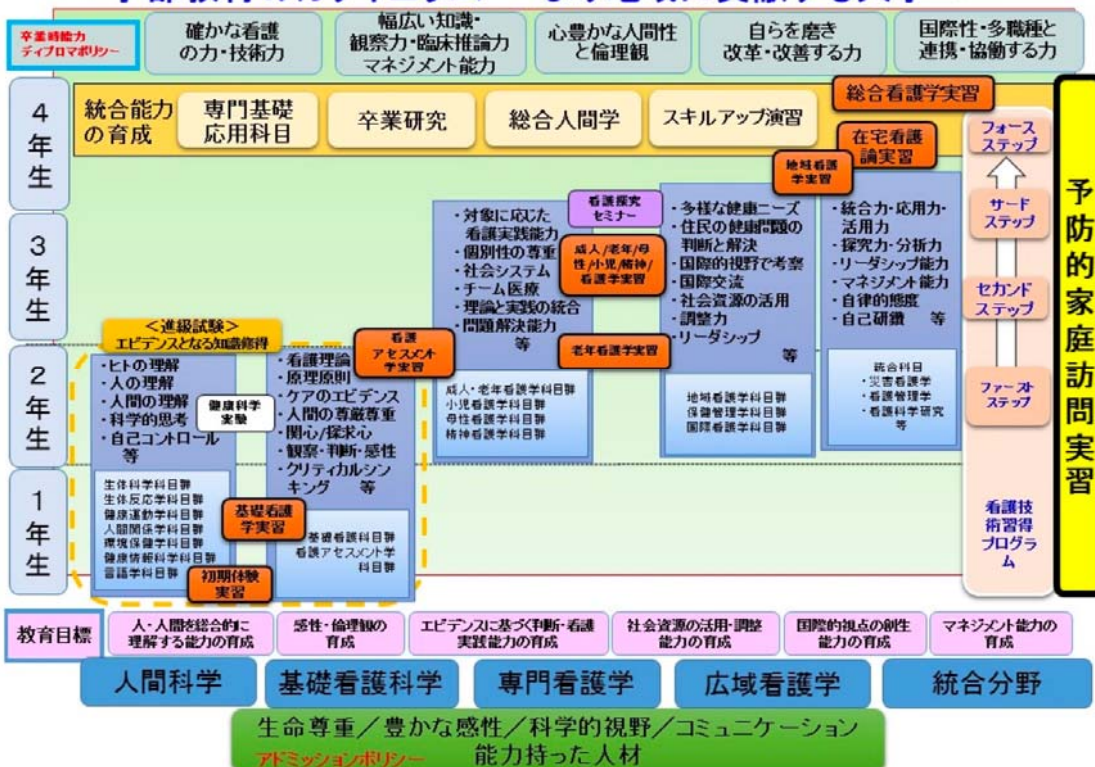


### 第21回看護国際フォーラムを開催

別府ビーコンプラザ国際会議場で10月26日（土）に「のぞむ最期を支えるケア：アドバンスケアプランニング（ACP）について考える」というテーマで開催しました。寺嶋吉保先生（徳島厚生連阿南医療センター病院）、タク・H・ソソヒ先生（ソウル大学）、和泉成子先生（オレゴン健康科学大学）を講師に迎え、200名以上が参加しました。



## 学部教育のカリキュラム —より地域に貢献する大学へ—



保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正に伴う令和四年度のカリキュラム改正に向け、カリキュラム検討タスクグループを設置し、全学を上げて検討を進めました。

### カリキュラム改正に向けた取り組み

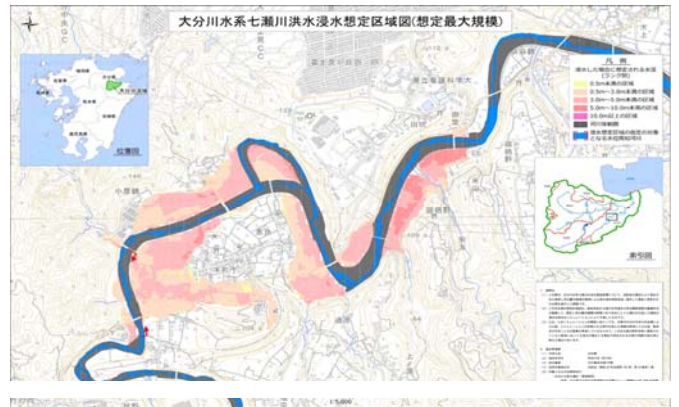
## 国際交流協定を締結

インドネシアのムハマディア大学 (UMY) の看護学科及び韓国の仁荷大学校医科看護学部の2つの大学から国際交流協定 (Memorandum of Understanding: MOU) 締結のオフナーがあり、両大学とMOUを締結しました。



## 防災・業務継続計画 (BCP) の策定

本学の業務方法書第12条に基づき、事故、災害その他の緊急事態に適切に対処し、業務を継続することを目的として、防災・業務継続計画 (BCP) を策定しました。



## 新型コロナ時代へ突入

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、卒業式・修了式を中止しました。また、危機管理対策本部を立ち上げ、入学式の実施と4月からのオンライン授業を決定しました。

図1 「危機管理対策本部」の組織図 (令和2年6月1日現在)



## 未来応援基金

学生の学業の継続や、地域連携の更なる充実、国際化・グローバル化への対応等、学生・大学院生の活動を支援し、その充実を図ることを目的として、「未来応援基金」を設立しました。寄附の累計額は3,771,000円となりました。



## 大分県版中小規模病院等看護管理者支援事業

目的: 中小規模病院等の看護管理向上  
地域連携の推進と質の高い地域医療を目指す

契機: 平成29年度厚生労働省  
看護職員確保対策特別事業で豊肥地域  
→30年度: 医療介護確保基金を得て、  
豊肥+南部地区  
→令和元年、南部+北部に拡大



地域の多様な施設の看護管理の向上を目的に、地域連携の推進と質の高い医療の提供に繋げることを目指して取り組んでいます。令和元年度からは県の南部地域と北部地域に拡大しています。

## 中小規模病院等看護管理支援



## 目次

1. 学内行事	1
2. 入学試験等	4
3. 学生の状況と進路	11
4. 授業等	15
5. 研究室活動	96
6. 研究助成・事業助成等	116
7. 研究業績	120
8. 社会貢献	137
9. 報道	154
10. 学務	155
11. 附属組織	188
12. 設備等	197
13. 中期目標・計画	198
14. 名簿	211

# 1 学内行事

## 1-1 学年暦

前期		後期	
<b>4月</b>		<b>10月</b>	
8	入学式	1	後期授業開始
9	全学オリエンテーション	1～9	後期履修登録
10,11	新入生オリエンテーション	26	看護国際フォーラム
10	2～4年次生授業開始		
10～17	前期履修登録		
11	健康診断	<b>11月</b>	
12	1年次生授業開始	23	特別入試(推薦・社会人)
17～	予防的家庭訪問実習開始	28	卒業研究要旨提出締切(4年次生)
<b>5月</b>		<b>12月</b>	
7～6/7	在宅看護論実習(4年次生)	3	卒業研究論文提出締切(4年次生)
13～6/7	地域看護学実習(4年次生)	4,5	卒業研究発表会
15	キャンパススクリーンデー	6～20	看護アセスメント学実習(2年次生)
18,19	若葉祭	24	冬期休業開始
<b>6月</b>		<b>1月</b>	
12	学生大会	7	冬期休業終了
19	開学記念日	14～27	基礎看護学実習(1年次生)
17～7/5	総合看護学実習(4年次生)	17	大学入試センター試験準備 (2,3,4年次生休講)
<b>7月</b>		18,19	大学入試センター試験
8～12	初期体験実習(1年次生)	<b>2月</b>	
17	大学院特別選抜	16	看護師国家試験
20	オープンキャンパス	25	一般入試(前期)
21	夏期休業開始	26	進級試験(2年次生)
22～8/1	小児看護学(保育所)実習(3年次生)	28	後期授業終了
<b>8月</b>		<b>3月</b>	
24	大学院入学試験	1	春期休業開始
<b>9月</b>		12	一般選抜試験(後期)
5	夏期休業終了	卒業証書・学位記授与式は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止	
6～11/29	老年看護学実習, 成人看護学実習 I・II, 小児看護学実習, 母性看護学実習, 精神看護学実習(3年次生)		
14	公開講座		



## 1-2 オープンキャンパス

オープンキャンパスは、7月20日（日）午前・午後の2回開催した。事前に、大分合同新聞など新聞社5社に記事を掲載、大分県オープンキャンパスガイドや生活情報誌などで広報した。当日は480名（生徒327名、保護者153名、昨年比プラス96名）と多くの参加者があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や1年次生の合格体験発表、3年次生、4年次生からの在校生メッセージの発表などが好評であった。また、模擬授業2講座や、体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当することにより、高校生や保護者が在在生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。今年度より午前・午後の2回開催と、HPからの事前申し込み（先着250名ずつ）に変更したことで、会場内の混雑緩和が図れ、参加者の増加にも繋がった。次年度も、午前と午後の2回開催する。参加者より大学紹介のDVDを希望する意見があったことから、大学紹介に関するDVD作成を今後の課題とする。

## 1-3 看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催で第21回看護国際フォーラムを令和元年10月26日に、別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。テーマを「のぞむ最期を支えるケアーアドバンス・ケア・プランニングについて考える」とし、国内から1名、韓国から1名、米国から1名の講師を招聘した。参加者は208名と大盛況であり、参加者アンケートの結果では講演内容について94%、討論内容について97%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

## 1-4 国際交流

### 1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

7月15日から19日までの5日間、蔚山大学からの交流派遣である学部生6名と同行教員2名を本学に受け入れた。来年度の相互交流の受入体制が検討課題として挙がり、見直しを行った。

### 2) 本学学生の派遣

本学からは8月19日から23日までの5日間、学部交流派遣として学部生6名を同行教員2名と共に蔚山大学に派遣する予定であったが、韓国の社会情勢を踏まえても交流を推進することの意義を確認したが、両校で協議した結果、学生の安全性を最優先に考え、今年度の派遣事業は中止とした。

## 1-5 若葉祭

令和元年最初の若葉祭のテーマは「一新紀元 (いっしんきげん)」となり、5月18日19日と両日とも雨の中、メインステージを講堂に移して開催された。イベント内容は縮小することもなく、ソーラン節に始まり、富士見が丘長寿会によるパフォーマンス、ファッションショー、軽音ライブ、ミスナースコンテスト、お笑いライブなどで盛況だった。計約350名の方にご来場いただいた。

## 1-6 公開講座

公開講座は、9月14日(土) 午後にJ:COM ホルトホール大分 302-303 会議室で開催した。今年度のテーマは「人生100歳を住み慣れた地域で健康に暮らすためにー地域包括ケアのしくみを知ろうー」と題して、大分県東部保健所所長、大分県厚生連鶴見病院看護部長、訪問看護ステーション管理者、本学保健管理学教授の4名の講師が、それぞれの立場からの取り組みについて講演した。参加者は88名であった。受講者は看護職が多かったものの、一般市民や高校生からの質問や意見交換が活発に行われた。終了後のアンケートでは「大変良い」と「良い」が90%と高い評価が得られた。告知のチラシは県下の病院や施設、保健所への配布や、6月の大分県看護協会総会などで早期に配布し広報した。さらに市報など地域広報に加え、マスコミや行政機関・病院等にも参加を呼びかけた。

## 1-7 アニュアルミーティング

アニュアルミーティングの目的は、教員相互の研究を知る機会とスキル向上の機会を持つことが目的で、全教員(助教以上)が3年に1度以上の発表をすることになっている。また、特定研究費(学内競争的研究費、海外国内研修旅費等)取得者の報告が義務付けられている。

昨年度までは、2グループ45分ずつの交代による発表が行われていたが、今年度は新型コロナウイルス対策を加味した体制で実施することとなった。参加者が密にならないように、ポスター掲示場所が離れるように配置し、4グループ30分ずつの交代で実施することとした。12月に発表予定者に連絡し、1月に演題登録、2月下旬に要旨〆切とした。発表ポスターは、当日を含めて3日程度掲示するものとした。

今年度の開催は、3月16日(月)14:00~16:00に実施された。発表は23演題(内1名2題)、参加者は発表者21名(1名は都合で欠席)含め51名であった。発表の要旨集は、図書館に所蔵された。また、実施後、今回の運用等について全教員にメールで意見を求めたが、4グループ制に変更したことなどを含めて、運用方法等に、特に改善や修正などの意見はなかった。

## 2 入学試験等

### 2-1 学部入試

令和2年度入学試験の選抜区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表の通りである。

#### 選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員				
			一般入試		特別入試		
			前期日程	後期日程	推薦	社会人	私費外国人留学生
看護学部	看護学科	80人	40人	10人	30人	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 社会人の「若干名」は推薦の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の40人に含める。

#### 入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者			
					計	県内(率)	男性(率)	
特別	推薦	112	112	30	3.7	30	30(100.0)	1(3.3)
	社会人	0	0	0	—	0	—	—
	計	112	112	30	3.7	30	30(100.0)	1(3.3)
一般	前期	122	118	46	2.6	38	22(57.9)	2(5.3)
	後期	267	94	15	6.3	12	4(33.3)	1(8.3)
	計	389	212	61	3.5	50	26(52.0)	3(6.0)
合計	501	324	91	3.6	80	56(70.0)	4(5.0)	

#### 試験教科等

区分	教科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接 令和元年 11月23日(土・祝)	令和元年 11月1日(金)～11月7日(木)
	社会人		
一般	前期	令和2年 2月25日(火)	令和2年 1月27日(月)～2月5日(水)
	後期	令和2年 3月12日(木)	

## 2-1-1 特別入試

### ① 推薦入試

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
推薦	200	段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	200

### ② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
社会人	200	40 得点が配点の 50%以下の場合、総合点にかかわらず不合格とする	240

## 2-1-2 前期入試

令和 2 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、試験を実施した。

教科名	科目名	教科・科目数
国語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 6 科目
数学	『数学Ⅰ・数学Ⅱ』、『数学Ⅲ・数学Ⅳ』	
理科	「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から 2 科目を選択	
外国語	『英語』（リスニングを含む)	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

日程	試験区分	国語 <sup>1)</sup>	数学	理科	外国語	総合問題 <sup>2)</sup>	面接	合計
前期 日程 試験	大学入試 センター 試験	100 <sup>3)</sup>	100 <sup>4)</sup>	100 <sup>5)</sup>	200 <sup>6)</sup>	—	—	500
	個別試験	—	—	—	—	200	※	200
	計	100	100	100	200	200	—	700

注 1) 「総合問題」は一般教養及び論理的思考力を総合的に評価する問題とする。

注 2) 「国語」については、「近代以降の文章」（2 問 100 点）の得点のみを用いる。

注 3) 「数学」の配点は、1 科目を 50 点に換算し計 100 点とする。

注 4) 「理科」の配点は、1 科目を 50 点に換算し計 100 点とする。

注 5) 「外国語」の配点は、筆記試験 200 点とリスニングテスト 50 点の合計に 0.8 を乗じる。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

前期入試においては、新型コロナウイルス感染症の流行への対応として、マスクや消毒など予防対策に配慮して試験を実施した。

### 2-1-3 後期入試

令和 2 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、試験を実施した。

教科名	科 目 名		教科・科目数
国 語	『国語』（近代以降の文章）		3 教科 3 科目 を選択 または 3 教科 4 科目 を選択
地 理 歴 史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、 政治・経済』から 1 科目を選択		
数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
理 科	「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学 基礎」から 2 科目を選択 または 「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から 1 科目 を選択		
外国語	『英語』（リスニングを含む)		
			4 教科 4 科目 または 4 教科 5 科目

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

日程	試験区分	国語 <sup>1)</sup>	地理歴史 公民	数学	理科	外国語	総合問題 <sup>注1)</sup>	面接	合計
後期	大学入試 センター試験	(100 <sup>※注2)</sup> )	(100)	(100)	(100)	200 <sup>※注3)</sup>	—	—	500
日程	個別試験	—	—	—	—	—	200	※	200
試験	計	300 <sup>注4)</sup>					200	—	700

注 1) 「総合問題」は一般教養及び論理的思考力を総合的に評価する問題とする。

注 2) 「国語」については、「近代以降の文章」（2 問 100 点）の得点のみを用いる。

注 3) 「外国語」の配点は、筆記試験 200 点とリスニングテスト 50 点の合計に 0.8 を乗じる。

注 4) 「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」のうち高得点の上位 3 教科を合否判定に用いる。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

後期入試においては、新型コロナウイルス感染症の流行状況に対応して、前期以上に予防対策に配慮して試験を実施した。

## 2-2 大学院博士課程（前期）

### 2-2-1 特別選抜

#### 概要

修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく広域看護学コースおよび助産学コースに特別選抜を設定して実施している。

#### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	実践者 養成	広域看護学コース	2名以内
				助産学コース	3名以内

#### 試験の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
修士課程	3	3	3	1.0	3	3 (100.0)	0 (0.0)

#### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
小論文 面接	令和元年 7月17日(水)	令和元年 5月27日(月)～6月7日(金)

### 2-2-2 一般選抜

#### 概要

大学卒業者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。大卒者でないものは就業経験により出願前に資格認定を行っている。

#### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者 養成	NPコース	10名 (うち5名は 地域枠)
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	10名
				看護管理・ リカレントコース	2名
		健康科学専攻		2名	

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和元年 8月24日(土)	令和元年 7月29日(月)～8月2日(金)

試験の概略

(単位:人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	49	49	26	1.9	24	12 (50.0)	2 (8.3)
健康科学専攻	1	1	0	—	0	0 (0.0)	0 (0.0)

(二次募集)

概要

8月に実施した試験の結果、合格者が定員を下回ったコース・専攻を中心に12月に再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域	募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成	1名
			実践者養成	NPコース
		健康科学専攻		2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和元年 12月14日(土)	令和元年 11月25日(月)～11月29日(金)

試験の概略

(看護学専攻)

(単位:人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	2	2	2	1.0	2	1 (50.0)	0 (0.0)
健康科学専攻	2	2	2	1.0	2	1 (50.0)	0 (0.0)

## 2-3 大学院博士課程（後期）

### 2-3-1 進学審査

#### 概要

本学大学院博士課程（前期）を令和2年3月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表及び出願書類を総合的に評価して審査した。

#### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻 健康科学専攻	若干名

#### 審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
特別研究	令和元年 8月21日（水）	令和元年 7月11日（木）～7月19日（金）

#### 審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	1	1	1	1.0	1	1 (100.0)	1(100.0)
健康科学専攻	1	1	1	1.0	1	1 (100.0)	0( 0.0)



## 2-3-2 一般選抜

### 概要

修士の学位を有する者等を対象に募集した。

### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名
		健康科学専攻	2名

### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	令和元年 8月24日（土）	令和元年 7月29日（月）～8月2日（金）

### 審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 （倍）	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	2	2	0	—	0	0（0.0）	0（0.0）
健康科学専攻	1	1	1	0.5	1	1（0.0）	0（0.0）

### （二次募集）

#### 概要

8月に実施した試験の結果、合格者がいなかった看護学専攻にて12月に再度募集を行ったが、志願者はいなかった。

#### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	1名

### 審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	令和元年 12月14日（土）	令和元年 11月25日（月）～11月29日（金）

### 審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 （倍）	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	0	0	0	—	0	0（0.0）	0（0.0）

### 3 学生の状況と進路

#### 3-1 在学生の状況（平成31年5月1日現在）

学生総数 428名（学部生334名、院生94名）

（単位：人）

学 生 数	学 生 数				
	計	県 内	県 外	男	女
1 年 次 生	86	57	29	6	80
2 年 次 生	85	60	25	6	79
3 年 次 生	83	50	33	9	74
4 年 次 生	80	49	31	5	75
計	334	216	118	26	308
割合 (%)	100.0	64.7	35.3	7.8	92.2
大学院博士前期（1年次生）	40	30	10	5	35
大学院博士前期（2年次生）	29	22	7	6	23
大学院博士後期（1年次生）	3	2	1	0	3
大学院博士後期（2年次生）	8	7	1	3	5
大学院博士後期（3年次生）	14	8	6	3	11
計	94	69	25	17	77
合 計	428	285	143	43	385

#### 3-2 奨学金・授業料減免

##### ■日本学生支援機構奨学金実績

	貸与		給付
	一種	二種	
学部	108	72	7
大学院	13	0	0
合計	121	72	7

##### ■その他奨学金実績

- ・ 壽崎育英財団奨学金 学部生6名 大学院生1名
- ・ 公益財団法人山口県ひとづくり財団 学部生1名

##### ■大分県立看護科学大学授業料減免制度実績

	学部	大学院	計
全額免除	22	3	25
半額免除	20	2	22
不承認	14	0	14
合計	56	5	61

授業料免除額計 19,288,800円

### 3-3 卒業生・修了生の進路

#### 3-3-1 学部卒業生

令和2年4月1日現在

#### 1 卒業生の状況（79名）

出身地別	県内	49名	62.0%
	県外	30名	38.0%
進路希望別	就職	68名	86.1%
	進学	11名	13.9%

#### 2 進路決定状況

就職	決定	68名	100.0%
	未定	0名	0.0%
進学	決定	11名	100.0%
	未定	0名	0.0%

#### 3 就職先内訳

##### (1) 地域別

大分県内	34名 (県内出身者32名+県外出身者2名)	50.0%
大分県外	34名 (県内出身者9名+県外出身者25名)	50.0%
計	68名	100.0%

##### (2) 就職先

独立行政法人等	24名	35.3%
都道府県	11名	16.2%
市町村	7名	10.3%
民間	26名	38.2%
その他	0名	0.0%
計	68名	100.0%

大分県内	大分大学医学部附属病院(10)、大分県立病院(8)、大分赤十字病院(4)、大分県厚生連鶴見病院(2)、国立病院機構西別府病院(2)、中津市民病院、井野辺病院、湯布院病院、南海医療センター、大分県立中津北高等学校、杵築市立護江小学校、豊後高田市立香々地小学校、中津市立東中津中学校
大分県外	虎の門病院(3)、福岡和白病院(3)、神戸市立医療センター中央市民病院(2)、九州医療センター(2)、誠愛リハビリテーション病院(2)、長崎原爆病院(2)、井の頭病院、横浜市立大学附属市民総合医療センター、静岡県立総合病院、京都大学医学部附属病院、神戸大学医学部附属病院、九州大学病院、久留米大学病院、JCHO九州病院、福岡赤十字病院、浜の町病院、福岡記念病院、高木病院、小倉記念病院、小倉リハビリテーション病院、済生会熊本病院、JCHO佐賀中部病院、大村市立大村市民病院、佐世保中央病院、宮崎東病院、愛媛県教育委員会

#### 4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院 9名（広域看護学コース5名、助産学コース4名）  
 岡山県立大学大学院 保健福祉学研究科看護学専攻 1名  
 福岡県立大学大学院看護学研究科助産実践形成コース 1名

### 3-3-2 大学院博士課程（前期）修了生

令和2年4月1日現在

#### 1 修了生の状況（修了生20名）

出身地別	県内	9名	45.0%
	県外	11名	55.0%

#### 2 進路決定状況

就職	決定	18名	100.0%
	未定	0名	0.0%
進学	決定	2名	100.0%
	未定	0名	0.0%

#### 3 就職先内訳

##### (1) 地域別

大分県内	10名	55.6%
大分県外	8名	44.4%
計	18名	100.0%

##### (2) 就職先

独立行政法人等	2名	11.1%
都道府県	4名	22.2%
市町村	3名	16.7%
民間	9名	50.0%
大学の	0名	0.0%
その他	0名	0.0%
計	18名	100.0%

大分県内	大分県立病院(2)、大分市(2)、大分県、佐伯市、大分大学医学部附属病院、津久見中央病院、みえ病院、すがのウィメンズクリニック
大分県外	武蔵野赤十字病院、昭和大学江東豊洲病院、東京はくと医療生活協同組合生協浮間診療所、大津赤十字病院、有限会社たんぼ訪問看護ステーションアソシオール、壱岐病院、佐世保中央病院、鹿児島大学病院

※既に就職している施設名も併せて記載。

#### 4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院 博士課程後期2名（看護学専攻1名、健康科学専攻1名）

### 3-3-3 大学院博士課程（後期）修了生

令和2年4月1日現在

#### 1 修了生の状況（修了生1名）

出身地別	県内	0名	0.0%
	県外	1名	100.0%

#### 2 進路決定状況

就職	決定	1名	100.0%
	未定	0名	0.0%

進学	決定	0名	0.0%
	未定	0名	0.0%

#### 3 就職先内訳

##### (1) 地域別

大分県内	1名	100.0%
大分県外	0名	0.0%
計	1名	100.0%

##### (2) 就職先

独立行政法人等	0名	0.0%
都道府県	0名	0.0%
市町村	0名	0.0%
民間	0名	0.0%
大学の学	1名	100.0%
その他	0名	0.0%
計	1名	100.0%

就職先	大分県立看護科学大学
-----	------------

※既に就職している施設名を記載。

## 4 授業等

### 4-1 学部

#### 人のこころの仕組み

1 年次前期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する存在として人間の機能の特徴、2年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的知識について、講義時間内の小実験・動画視聴、ペアによる話し合い活動を通して、修得する機会を提供した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、学生間の交流を心掛けた。時間外学習の機会として、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求め、次回授業時に返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できる環境を構築した。

#### コミュニケーション論

1 年次前期

関根剛

本講義は、1年次生を対象にコミュニケーションの基礎となる、行動観察や自己理解、プレゼンテーションなどの講義を行った。講義内容は、従来通り、情報の「受信」「理解」「発信」という構造で解説を行ない、プロセスレコード理解につながるよう配慮して行った。また、講義終了後、質問・感想を提出させて学生の講義の理解を確認するとともに、次回、質問に回答して講義理解を深めたりしている。また、構成的エンカウンターグループにより体験的にコミュニケーションの重要さと自己理解の機会を持たせた。さらに、「受信」として行動観察、「理解」として文化、「発信」としてプレゼンテーション、手話、「受信-理解-発信」を総合的に理解するためにプロセスレコードの講義を行った。講義展開においては、討議や演習を多く取り入れた。

昨年度は、授業中のアクティブラーニングとして、クリッカーを用いた即時フィードバックを行ったが、登録作業に時間がかかる問題があった。そこで、今年は、別の方法として、毎回、小テストとミニレポートを課して、授業理解の確認と思考の深化を図った。小テストはマークシートによる処理を行っている。評価は、試験及びレポートにて行った。

## 英語 I –A1

1 年次前期

宮内信治

英語の音声については、発音記号と発声法を確認し、練習させてその定着を図った。講読では、20 世紀のエッセイ、文学、哲学を題材にした英語名文集をテキストとして用いた。併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源 CD を活用してスムーズな音読の習得を目指して練習させた。学んだ英文を帳面に書写し、機会講義までに音読暗唱できるようにすることを課題とした。講義後半で、易しい英語で書かれここに書籍を自ら選択して読む多読を実施した。英語を通して世界に通じる教養を体得できた。今後、基本文法の説明をより丁寧に行うことで英文解釈の精度を向上させ、同時に多読量の増加を図りたい。

## 英語 I –B1

1 年次前期

Gerald T. Shirley, Yume Takano

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

## 環境保健学概論

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

環境保健学概論は環境保健の基本的な考え方や、環境中に存在する様々な有害因子と健康影響との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。健康影響として環境保健上注目されるがんを中心に取り上げ、環境との関係について最新のトピクスと関係づけて講義を行うことで、環境リスクという概念の理解を助けるような講義となるように努めた。

## 健康情報学

1 年次前期

佐伯圭一郎

保健統計学、疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、「健康情報処理演習」において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図っている。

これまでの課題である科目に関する興味関心が低く、授業への満足度が低いという傾向には、授業における看護と係わる具体例の追加や内容の精選を継続している。また、小テストや筆記試験については、解答例や解説を公開することとした結果、筆記試験による評価、特に再受験扱いの受験者についてはこれまでよりも向上が見られた。

## 健康情報処理演習

1 年次

品川佳満、佐伯圭一郎、渡邊弘己

看護職に必要な ICT（情報通信技術）のスキルや知識について教授した。各種アプリケーションの操作、データ管理、画像処理、データベースの利用等については、実際にコンピュータを使った演習により技術の習得を図った。情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報モラルに関すること、看護師が医療現場で扱う病院情報システムについては、講義形式で教授した。また、「健康情報学」、「生物統計学」で学んだ講義内容の理解を深めるために保健統計・疫学・統計データの分析を演習に組み込んだ。統計処理で利用するソフトウェアの演習については、前年度から時間を増やしたことで、各ソフトウェアでできる処理については伝えることができた。今後は、学生自身が実際にデータ解析を行うことを考慮し、各データ解析ソフトウェアとその演習内容についてベストな組み合わせを考えていく必要がある。

## 生体構造論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

現状においては、人体の構造（解剖学）について、1 年次生は意味づけをしないで丸暗記する傾向にあり、短期記憶にとどまっていた。そのため、**active learning** の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室・アセスメント看護学研究室の協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の構造（解剖学）事例シートを通して人体の構造（解剖学）に関する議論を通して教授した。



## 生体機能論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

現状においては、人体の機能（生理学）について、1 年次生は、莫大な量进行处理すると感じていたため、理解すべきところを単純暗記に切り替えて学習する傾向にあった。そのため、**active learning** の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室・アセスメント看護学研究室内の協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の機能（生理学）に関する議論を通して教授した。

## 健康運動ボランティア演習（救急法含む）

1 年次

稲垣敦、吉川加奈子

教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に 29 のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が 3 つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。また、救命救急法の講義と実技を受け、日常の救急場面に対応できる知識と技術を身につけた。次年度は、新型コロナウイルス感染予防対策を充分にとって進める。

## 自然科学の基礎

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、岩崎香子、定金香里、渡邊弘己、佐伯圭一郎、恵谷玲央、吉田成一

自然科学の基礎は看護学を専攻する学生の基礎教養として生物、物理、化学、数学の基本的事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶと同時に自然科学の考え方を理解できるように努めた。講義の終わりに確認の小テストを行い、学生の理解度を把握しながら講義を進めた。

## 大学ナビ講座

1 年次前期

藤内美保、安部眞佐子、甲斐倫明、影山隆之、関根剛、濱中良志、村嶋幸代、吉村匠平、石本田鶴子、坂田善廣

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学とはなにか学ぶこと考えるこ

と」「アルバイトリテラシー」「メモ・ノートの取り方」「大学カリキュラムの方針・考え方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「伝える技術 1：文を書く、レポートを書く」「伝える技術 2：話す、プレゼンする」「伝える技術 3：質問する、議論する」「メディアリテラシー：新聞・報道、インターネット活用」の 10 回の内容とした。早めに知りたい内容が多かったという学生の意見と入学直後の 4 月 5 月が過密な時間割になっているという意見を反映し、一部は 6 月 7 月に開講した。最終レポートでは、学生の感想は大学での学習や生活に役立つ内容とおおむね好評で、欠席者もなかった。

次年度は、学生の健康維持やメンタルヘルスなどの内容を増やし、90 分間の使い方を工夫するなどの改善を行う予定である。

## 看護学概論

1 年次前期

伊東朋子

看護学の本質を理解し、看護学の豊さや奥深さをイメージし、各領域の専門看護学への興味と関心を高めることを目的とした。看護学を履修する学生が最初に学習する専門科目であり、看護学の土台をなしている。看護学全体の基本的内容が網羅された科目であり、それを概括的に 10 コマで理解させた。毎回看護に関連したミニレポートを課し、講義の理解確認と日常生活の中で考えていることを記載させた。

## 生活援助論

1 年次前期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、伊東朋子、川野美佐子、三ヶ田暢美

対象者の安全、安楽に配慮した技術展開ができることを目指して授業展開した。今年度は、学生同士で援助方法を検討できる時間をできるだけ多く確保できるように事前課題を課し、授業開始時に小テスト、解説及び補足説明の時間を導入し、基礎知識の理解と定着を図った。演習では、援助対象の状況を提示することで、事前学習等で得られた知識や考えを活かして、学生間で考えながら課題を解決するように展開した。技術修得のための支援として、演習時間内の直接指導、個人学習のための動画提示、希望に応じて課外での指導を実施した。技術試験では、これまで手順通りに展開することに気をとられて、対象への声かけや説明が不足する傾向であったことから、事前に試験事例を提示することで、各グループで対象に応じた展開方法を考えさせ、自分たちの考えに基づいた展開ができるように練習をする行動につなげることができた。今後の課題として、事前課題、小テストの導入の授業形態の効果を検討していく必要がある。

## 初期体験実習

### 1 年次前期

伊東朋子、秦さと子、石丸智子、田中佳子、川野美佐子、丸山加菜、足立綾、佐藤栄治、徳丸由布子、内倉佑介、矢幡明子、山田貴子、吉川加奈子、石田佳代子、藤内美保

令和元年7月8日～7月12日に実施した初期体験実習 **Early Exposure** は看護とは何かを考え、自ら、看護の力を身につけようとする自立性を育むことを目的としている。早い時期に学外に出て、看護の現場を体験することで、その後の学習の動機付けとキャリアパスを視野に入れた自分の将来像に多様性をもたせることにも力点を置いている。3日間の臨床実習と学生の希望進路の1つでもある助産師や保健師、養護教諭の外部講師による講話から構成されている。実習中、体調を悪くする学生もなく、実習の目標は達成させることができた。実習施設が市外地にある施設では移動のための時間や交通費等の問題もあり、新カリキュラム実施に向けて、当該実習のあり方、目的、目標、通学方法や実習施設の検討を行う必要がある。

## 健康論

### 1 年次前期

福田広美、平野互

健康の概念と健康に対する考え方や意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本 21 などの取り組みを交えながら講義を行った。今後は、学生同士が健康について考え、様々な人々への働きかけを行えるよう事例を通して学習する内容を考慮していく必要がある。

## 予防的家庭訪問実習（1 年次）

### 1 年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。各チーム担当教員と学生に対するオリエンテーション（4月15日）で、本実習の理念・目的について時間を取って説明し、その後チーム間で前年度の活動について情報交換する機会を設けた。1年次生は2～4年次生とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した（4月17日以降）。1年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。学生は一人当たり年4回以上訪問することとした。訪問日程が偏らないよう留意することと、訪問前に学生が話し合っ

準備をすること、学生に責任のない事情で予定が変更になり 4 回訪問できない場合は代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補うことをオリエンテーションで確認した。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを年間 5 回配信し、諸連絡や他チームの情報紹介に用いた。学生の年度末レポートからは、本実習を通じて地域の高齢者や他学年とのつながりを感じ、実習の目的をほぼ達成できた様子がうかがえた。学生レポートを検討したところ、訪問時に上級生が協力者へ話しかけたり血圧を測定したりする様子を間近で見られることは、1 年次生にとって大きな刺激になっており、学年縦割り編成の効用と考えられた。また、1 年次の学内演習で学んだことを実践してみる機会になっていることもうかがえた。なお、協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気がかりな場合、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取る見守りネットワークの運用を開始したが、幸い必要となるケースはなかった。2022 年度カリキュラムでの本実習の位置づけについても地域交流チームで検討し、基本的には現状のまま存続することが有意義との結論になった。

## 言語表現法

1 年次前期

松田美香

人と人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために有効な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に、講義を行った。単位認定者数 63 名であった。

## 韓国語

1 年次前期

朴貞蘭

ハングル文字と発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 67 名であった。

## 哲学入門

1 年次前期

西英久

医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本的問いを考察する講義を行った。単位認定者数は 59 名であった。

## 法学入門(日本国憲法)

1 年次

二宮孝富

日本国憲法について、歴史的意義・基本原理をふまえ、特に人権に関する諸問題を学び、市民としての基本的な法的素養を身につけることを目的に、講義を行った。単位認定者数は 70 名であった。

## スポーツ救護

1 年次前期

稲垣敦

受講者は、本学講堂で開催された大分県スポーツ学会主催の第 10 期スポーツ救護講習会を 2 日間 (6/22-23) 受講した。講義の内容は、健康スポーツ学総論、スポーツ救護・小処置、スポーツ救命救急講習、スポーツ頭部外傷、スポーツ栄養学、スポーツ薬学、スポーツと内科疾患、スポーツ歯科学、スポーツと運動器疾患・テーピング、スポーツ熱中症 (講義・事例検討)、小児救急概論、スポーツ障害・スポーツ外傷等であった。認定試験に合格した者は、スポーツ救護士のライセンスを取得し、看護師免許を取得後、学会に届け出ることでスポーツ救護ナースのライセンスを取得する。次年度は、新型コロナウイルス感染予防対策を充分にとって進める。

## 人間関係学

1 年次後期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解 (類型論、特性論) と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。自他を状況論的に理解するために求められる態度としてカウンセリングマインドについて学習する機会を提供した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、学生間の交流を心掛けた。時間外学習の機会として、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求め、次回授業時に返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できる環境を構築した。

## カウンセリング論

1 年次後期

関根剛

本講義は看護に必要なカウンセリング理論およびコミュニケーションスキルを解説し、ロールプレイによりスキル修得を目標として行った。カウンセリング理論は、認知行動療法、精神分析、来談者中心療法の代表的な3つのアプローチについて解説し、DVD教材による視聴覚的理解を促進した。また、危機介入として、患者のPTSDおよび医療者の惨事ストレスについて解説した。基本的に、カウンセリング理論を看護現場にどう応用できるかについて触れて看護と遊離しないよう配慮した。コミュニケーションスキルは、解説3回とロールプレイ3回を実施した。ロールプレイは、学生4人をグループとして話し手、聞き手、観察者として役割を担当させるほか、討議課題を与えるなど、学生自身が講義に積極的に関与できるような内容を心がけた。

ロールプレイ課題は、昨年度、それまでの順序を入れ替え、各課題の目標を明確にしたが、今年は更に解説文を修正して課題理解が明確になるようにした。また、昨年度、行ったクリッカーを用いたアクティブラーニング方法は登録作業に時間がかかるため、小テストとミニレポート、前回の質問への回答時間などを設けることとした。評価は、試験及びロールプレイのレポートにて行った。

## 英語 I –A2

1 年次後期

宮内信治

前期と同じ教科書のうち、未習のテキストを用いて日本語訳を介した文法理解、テキスト音読と書写、課題としての音読暗唱を行った。また、教科書にないテキストとして、シェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使って同様の演習を行った。日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を通して、いわゆる「国際人」といわれる人に求められる思考の一端に触れさせた。講義後半では、前期と同様、多読活動を行った。今後、教授した古典的作品に関連した名著への興味関心を喚起すべく関連文献の紹介を進め、そうした作品に多読を通して触れていくよう指導していきたい。

## 英語 I –B2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These

activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 生物統計学

1 年次後期

渡邊弘己、佐伯圭一郎

看護研究を遂行する上で必要となる記述統計学、推測統計学の基礎について講義を行った。単なる統計手法の暗記ではなく、なぜそうなるかという理論部分も重要視した。次年度以降は、統計学に対する興味関心を向上させるため、統計学における基本的な考え方を重視しつつ、具体例を多く紹介することで、統計学をより身近に感じられるように努める。

## 生体代謝論

1 年次後期

安部眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体構造論と生体機能論がより深く理解できるように、低分子から高分子へと物質の基本的な性質と代謝をあつかった。酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達、遺伝子発現へとすすみ、エネルギー代謝を生化学での細胞内の反応として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食サイクルの臓器での代謝に力点をおいて講義した。栄養学では、食品の特性の理解、食事バランスガイドのなりたち、食事摂取基準について説明した。出欠確認と共に前回の講義の正誤問題を作成し、解答を学生と一緒に考えるというスタイルをとった。講義をした部分より問題の答え合わせの時間のほうが学習しているという実感をもつ学生が多いようで、さらなる講義のスタイルの変更を考える必要があると思われた。本試験も記述式をやめて、語群選択、正誤問題としたところ解答しやすいようであった。

## 生体反応学概論

1 年次後期

市瀬孝道

生体反応学概論では例年同様に病理学総論の講義を行った。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。講義内容は次に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、

代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。講義の工夫としては、先ず学生が病気の基本的事項を理解し易い内容の教科書(カラーで学べる病理学)を選択し、また付録のテスト問題を使って復習ができるようにした。教科書を分かりやすく整理したプリントとパワーポイントも使って進めた。これらの資料を Nekobus サーバに上げて学生が何時でも使用できるようにした。

## 生体反応学各論

1 年次後期

市瀬孝道

生体反応学各論では、例年同様に系統別に発生する疾病(病理学各論)について講義を行い、病理学総論から各論へと、疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義資料は Nekobus サーバに上げて学生が何時でも使用できるようにした。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器疾患、皮膚・感覚器疾患。

## 微生物免疫論

1 年次後期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

講義内容を、着実に習得すべき内容に整理したが、講義後の復習を適切に行わないことに起因する、理解度が低い学生が存在しており、試験直前ではなく、各回講義後の復習が重要であることを周知する必要がある。

試験の平均点、最高点は、昨年と同程度であったが、最低点は低下していた。得点のばらつきが大きくなり、学修内容を理解できずに講義が進行している状況の学生が生じたことが考えられる。理解できない分野に関して学生からの積極的な質問を受け付ける体制が必要であると言える。

なお、履修者(再受験該当者を含む)85名中、73名が単位を取得し、昨年度より単位取得率が低下した(また、1名は、試験を受験しなかった)。



## 健康運動

1 年次後期

稲垣敦、中島麗理

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、学生がしたことのないような多くのレクリエーション、ニュースポーツ、すなわち、フライングディスク、アルティメット、ユニバーサルホッケー、インディアカ、ソフトバレーボール、リングテニス、フットサル、3 オン 3、バドミントン、ドッジボール、ヨガ等を行なった。行動変容理論を活用し、運動強度や運動量の確保にも配慮した。次年度は、新型コロナウイルス感染予防対策を充分にとって進める。

## 看護理論入門

1 年次後期

伊東朋子、秦さと子、石丸智子、田中佳子、三ヶ田暢美

看護理論は看護という事象を記述し、説明することで看護援助の方向性を決定するために活用されるべきであり、看護理論入門は 2 段階(基礎看護学)実習とも関連した科目で、よりよい看護を行うために看護理論があることをわかりやすく理解させるために、12 名の主な理論家について学習をすすめた。昨年度より実施している 2 段階(基礎看護学)実習での記録様式を学生に考えさせる目的で形式を指定せずに、フリーペーパーとしたので、特に 2 段階(基礎看護学)実習前に、事例をもとに記録様式を考えさせる時間を取り、学習内容を発表させながら、それを中心に授業展開し、2 段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、実際の臨床現場における看護理論の考え方を強調した。グループワークによる学習内容ではあったが、発表会の内容からみても、2 段階(基礎看護学)実習への学習効果が期待できた。

## 基礎看護学実習

1 年次後期

伊東朋子、秦さと子、石丸智子、田中佳子、三ヶ田暢美、藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、徳丸由布子、永松いずみ、姫野綾、佐藤栄治、光根美保、足立綾、吉川加奈子、堀裕子

令和 2 年 1 月 14 日～1 月 27 日に実施した。1 年次前期の初期体験実習では同行実習により看護の役割や具体的な看護実践について見学、体験させたが、基礎看護学実習は入院患者 1 名を受け持つ本格的な実習として、初めての学習となる。そのため初期体験実習でも学習への動機づけを目的にしていたが、本実習でも再度、実習に対する動機づけをさせ、自己の看護師像を形成させながら学習意欲を高めるように目的を位置づけた。学生の構成メンバー、担当教員との関係性を十分に検討し、実習配置を決定した。冬季という実習時期のため、インフルエンザ予防や体調管理についても指導した。インフルエンザに 1 名も罹患することもなく終了し、目的は達成できていた。

## 看護疾病病態論Ⅰ

1 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子

各系統別の重要な疾患に関する疾患の概念、症状・検査・治療などについて解剖生理学に立ち戻って理解することを目標にしている。消化器疾患、呼吸器・感染症疾患、循環器疾患、血液・造血器疾患に関する系統別の講義を行った。提示資料は、病態やメカニズムが理解できるよう、なるべく画像を多く取り入れたパワーポイント資料としている。内容の精選を行い、ポイントを絞り、基本的知識の獲得ができるようにしている。また、学生が主体的な学びができるよう病態探究演習を 2 コマ設定し、事例等を提示して、病態やメカニズムを論理的に考えることとした。前年度は、グループディスカッションを行ったが、今年度は個人個人がしっかりと自分のペースで理解できることとした。次年度は、病態探究演習の教員のファシリテート等のあり方について検討する必要がある。試験は、範囲が広いため 2 回に分けて筆記試験を行い、作問については、知識の断片化や暗記偏重にならないように過去問を使用せず、新たに問題を作り、教員間で出題内容や難易度などが適切か確認しており、次年度も同様の方法で継続したい。

## 看護疾病病態論Ⅱ

1 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

各系統別の重要な疾患に関する疾患の概念、症状・検査・治療などについて解剖生理学に立ち戻って理解することを目標にしている。脳・神経疾患、内分泌・代謝疾患、腎・泌尿器疾患、運動器疾患、感覚器系の眼・耳鼻咽喉・皮膚疾患、生殖器疾患を行った。提示資料は、病態やメカニズムが理解できるよう、なるべく画像を多く取り入れたパワーポイント資料としている。内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、学生が主体的な学びができるよう基本的知識の獲得と自ら調べ学習する病態探究演習を 2 コマ行っている。病態探究演習においては、前年度、基礎看護学実習で経験し学んだことから具体的な学習課題を学生が設定し、グループメンバー全員で徹底的に調べたり討論したりして、課題に関する理解を深め、発表会を行ったが、課題として、学生間でのディスカッションが活発に行われなかったことや発表会での共有方法で課題があった。また、本科目以外に限らずグループワークのあり方について個人ワークも必要という学生の意見も反映し、今年度は個人個人でしっかりと自分のペースで理解を深める方法で行った。試験は、範囲が広いため 2 回に分けて筆記試験を行い、作問については、知識の断片化や暗記偏重にならないように過去問を使用せず、新たに問題を作り、教員間で出題内容や難易度などが適切か確認しており、次年度も同様の方法で継続したい。次年度は、本科目と関係の深い生体反応学研究室の講義の進度を考慮し、授業の内容と順序性を検討する。

## 社会学入門

1 年次後期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は 6 名であった。

## 文化人類学入門

1 年次後期

足立恵理

医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を通して、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるように講義を行った。単位認定者数は 67 名であった。

## 教職概論

1 年次後期

伊東朋子、吉村匠平、関根剛、赤星琴美、麻生良太、堀本フカエ、横山秀樹

専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。

## 行動療法と発達心理

2 年次前期

吉村匠平、関根剛

行動療法については、昨年までは学習心理学などの理論的な背景を交えながらの構成を行っていたが、より実務的に理解できるよう、多理論統合モデルを用いて戦略的に考える視点を中心の構成に変えている。評価は試験および行動改善プログラムのレポートによって行なった（行動療法）。

発達心理については、言語発達、運動発達について、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進める形をとり、長い時間をかけて進化した結果として現在の人間の姿があることについて考える機会を提供した。講義後半では、広汎性発達障害を中心に、障害をスペクトラムという視点で

とらえることの重要性、サポートの視座などについて、演習形式を取りながら講義を進めた。  
評価はそれぞれの評価を 50%ずつとして評価とした。

## 英語Ⅱ－A1

2 年次前期

宮内信治

原書 *Word Power Made Easy* を用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格描写、医療職者などを表わす語彙を学び、その派生語についても習得させた。各講義の次週に単語小テストを行い、学習確認と評価に活用した。期間内に、教員が指示した教科書内の原文について音読暗唱の課題を与え、評価した。また、英語で執筆された原著の緒言を文法解析させ、和文翻訳させた。課題内容を次回の講義時に解説し、解釈の修正と文法理解を促した。1 年次に引き続き、多読活動に取り組みさせた。今後、語彙増強により獲得した語彙を英語文献講読や多読を通して意識させ、定着を強化したい。

## 英語Ⅰ－B1

2 年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 環境保健学詳論

2 年次前期

小嶋光明、甲斐倫明

環境保健学詳論は生活の中で遭遇する身近な環境因子（物理的因子、化学的因子、生物的因子）が及ぼす健康影響についての基礎知識を講義している。熱中症、インフルエンザ、PM2.5 などの身近な健康影響を例にして、その予防策を学生に発表してもらうことにより、問題の把握、予防や管理のあり方を考えることができるよう配慮した講義を行った。

## 生体薬物反応論 I

2 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 I は薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、一部学生にとっては、既修得科目の知識と本講義内容の医薬品に関する知識を統合することが難しいためか、学習範囲が広いと感じ、理解度が低くなると思われる学生が今年も散見された。

試験の平均点は、昨年に引き続き上昇し 70 点台となった。これは、半数以上の受講者が学修内容を比較的十分理解できていることになると整理できる。また、最高点は昨年と同程度であった一方、最低点は低下していた。今後、最低点の向上を期待し、平均点、最高点についても例年通りの水準以上になるよう、履修者が意欲的に学習に取り組み、理解を深めることができる講義内容にするとともに知識の定着のため、復習を促したい。特に処方内容を理解するために、講義で使用した処方箋に関する復習を徹底したい。

なお、履修者（再受験該当者を含む）96 名中、86 名が単位を取得した（なお、単位未取得者のうち 1 名は、試験時間中における不適切な行動をした可能性が否定できなかったことによる受験辞退による単位未取得であった）。単位取得率は例年通りであった。

## 健康運動学

2 年次前期

稲垣敦

ボディメカニクスの導入として人間固有ともいえる二足歩行を取り上げ、その後も生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、運動の重要性や健康との関連性を講義した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義し、運動療法についても概説した。さらに、厚生労働省「健康づくりのための身体活動量基準 2013」等に準拠したエネルギー消費量の計算や身体活動量の測定も体験した。次年度は、新型コロナウイルス感染予防対策を充分にとって進める。

## 医療技術論

2 年次前期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、伊東朋子、川野美佐子、三ヶ田暢美

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。今年度は、学生同士で援助方法を検討できる時

間をできるだけ多く確保できるように事前課題を課し、授業開始時に小テスト、解説及び補足説明の時間を導入し基礎知識の理解と定着を図った。演習では、対象と医療職者の安全確保の重要性を実感できるようなシミュレーターを選択や独自で作成するなど教材の工夫を行った。技術修得のための支援として、演習時間内の直接指導、個人学習のための動画提示、希望に応じて課外の指導を実施した。技術試験では、事前に試験事例を提示することで、学生間で技術展開方法について検討する時間が必然的に生じ、苦手な「清潔区域」「汚染区域」について、お互いに理解し合う姿勢につながった。今後の課題として、事前課題、小テストの導入の授業形態の効果を検討していく必要がある。

## ヘルスアセスメント

### 2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察およびアセスメントに主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメント能力が身につくことが目標である。講義と学内実習は、講義の知識で学んだことを復習し、翌週の学内実習で知識と連動させ技術を修得するようにした。また、新たに「フィジカルアセスメント事例演習」を試みた。この演習の目的は、身体面について必要な情報を考え、収集し、アセスメントし、学んだ知識を応用し、技術を強化することであった。呼吸器系の事例患者の症状が増悪した場面を設定してシミュレーションを行った。学生には、解剖生理や病態生理の学習に加え、そこから患者に行うべき看護を考えるために必要な情報の選定、また、情報を得るための手段などを行動レベルで考えてもらった。さらに、グループで発表してもらうことで、新たな視点も考えるように取り組んだ。学生からは、“自分が患者を受け持ったときにどのような過程でアセスメントすればいいのかがわかった”などの肯定的な意見も複数あったが、記録の具体的な書き方に戸惑う意見（わからない、難しかった、きつかったなど）などが多く次年度の課題となった。したがって、アセスメントの目的や根拠を学生に具体的に説明することと、記載例を一部示すことなどが課題である。試験は、筆記試験と実技試験を実施した。

## 看護アセスメント概論

### 2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

看護過程の展開の基礎的能力を身につけることを目標にし、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について教授した。工夫していることは理論と事例の具体的な像を連結させ、学生が 1 人で看護過程を展開できるよう事例による個人ワークも取り入れている。実習経験が少ない学生のレディネスを考慮し疾患事例のイメージがもてるよう

DVD を視聴させ、映像として対象者をとらえることができるように工夫している。個人ワークにより看護過程の記録一式について記録をさせ、学生個々に教員が丁寧にコメントしてフィードバックした。評価については、学習到達するための各々の視点を細かく示したルーブリック評価を活用している。記録した内容について、教員間で評価の不公平、偏りがないように行い、学生の記録の到達度を確認して評価した。次年度も、個々の看護過程展開能力がアップするよう継続検討していきたい。

## 看護アセスメント演習

2 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

看護過程の基本的知識を活用するために、5 名～6 名からなるグループで、ディスカッションしながら事例による看護過程を展開させた。看護過程を展開するために作成された事例の DVD を視聴させた。診断名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を選定した。中間発表会と全体発表会をグループに分けて行った。どこでもシートに付箋を貼りメカニズムを深め病態関連図を完成させるグループディスカッションは、前年度の課題として挙げていた「病態の理解、症状のメカニズムの理解のさらなる強化」という点において効果があった。次年度も、グループダイナミクスがさらに活性となるよう継続していきたい。一方で、アセスメントシートを記載する時間がとれず希薄な内容にとどまったグループがあり、次年度の課題として改善する。

## 予防的家庭訪問実習（2 年次）

2 年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習の進め方に前年度から変更は少ないため、年度初めのオリエンテーションは簡略化した。2 年次生は他学年とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した（4 月 17 日以降）。2 年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持するために必要な条件を考えることを主眼とした。学生は一人当たり年 4 回以上訪問することとした。訪問日程が偏らないよう留意することと、訪問前に学生が話し合っただけで十分準備をすること、学生に責任のない事情で予定が変更になり 4 回訪問できない場合は代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補うことを年度初めに確認した。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを年間 5 回配信し、諸連絡や他チームの情報紹介に用いた。学生の訪問記録を見ると、看護アセスメント学の講義で学んだことを応用して協力者の健康と生活をアセスメントしていることがうかがえた。また、地域の高齢者の健康を把握するだけでなく、協力者を通して地域について考察する様子もうかがえ、実習の目的をほぼ達

成できていた。なお、協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気がかりな場合、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取る見守りネットワークの運用を開始したが、幸い必要となるケースはなかった。2022年度カリキュラムでの本実習の位置づけについても地域交流チームで検討し、基本的には現状のまま存続することが有意義との結論になった。

## 成人看護学概論

2年次前期

小野美喜、森加苗愛

成人期に生じる多様な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を、発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や中範囲理論を教授した。中範囲理論の講義では、事例を取り入れて講義を展開し、看護実践における理論が何かをイメージし易いように工夫した。また、小テストや学生の実習体験を活かした小グループディスカッションを適宜実施し、学生の思考を深めて発言できる講義につなげた。学生の参加は積極的である。今看護に興味関心をもち、更に学生の思考力や主体性を伸ばすことを支援する工夫を行っていくことが課題である。

## 老年看護学概論

2年次前期

小野美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。また、高齢者の機能低下とQOLに関する意見交換を実施し、学生の参加度が高められた。引き続き来年度も継続していきたい。

## 成人看護援助論

2年次前期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

成人期にある対象の特性をふまえ、系統的に特徴のある健康障害について、急性期、慢性期、回復期、終末期の看護援助方法を教授した。教授方法は、各教員がハンドアウト資料と教科書を用い、グループワークや学内実習をとおしてがん患者へのケアや周手術期看護を実践的に学ぶことができるようにした。また、学生が臨床の看護実践内容をリアルに学ぶことができるよう、講師と



して急性・重症患者看護専門看護師を招聘し講義を行った。退院指導の講義では、グループに分かれて事例を設定し、実際に退院に向けた看護問題のアセスメント、看護計画、指導媒体を作成し、ロールプレイにより発表・全体討論を行った。ロールプレイにより、よりリアルな退院指導がイメージ・実践でき、また他者の事例見学を行うことで自らの今後の課題が把握できたと考える。学内実習としては、血糖値測定・インスリン注射をグループに分かれ行った。糖尿病患者の事例を提示し、血糖値測定やインスリン注射時について技術のみではない看護実践を体験し、注意点を学ぶことができた。

今後も、更にグループディスカッション等を組み込み、学生が主体的に学び、発言できる講義・学内実習内容となるように工夫をしていく。

## 小児看護学概論

2 年次前期

高野政子、草野淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長発達を理解することを目的としている。小児看護の基礎として、小児保健や教育・福祉・保育の概念と、小児医療の動向を講義して、小児看護の役割と重要性について教授した。今日における小児看護の重要性の理解を促すために、まず小児医療の変遷と小児看護の特殊性をスライドや DVD を使用してイメージ化すること、自分の中の子ども観を認識するための課題レポートを課した。また、小児看護において重要な家族と親子関係に着目できるように講義を組み立てた。特に重要な概念として小児の成長と発達については形態・機能的発達、7)小児看護で用いる理論などを講義した。講義は 10 コマで行うことができずに予備を使ったので次年度は、10 コマに集約するカリキュラムに集約し変更する。

## 母性看護学概論

2 年次前期

林猪都子、梅野貴恵、永松いずみ

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。今年度は看護過程の演習につなげるために「母性看護に必要な看護技術」の内容を追加した。リプロダクティブヘルスケアはグループワークを取り入れて、自主学習を進め、発表会で学びを共有した。

## 社会保障システム論

2年次

平野互

在宅医療をはじめ福祉・介護と保健・医療の統合が重要視される今日の看護職にとって、社会保障の制度と社会資源に関する理解は不可欠である。講義時間数が限られているため、今後の講義の展開に備えて、社会保障の全体像が把握できるよう講義内容を整理し、特に他の講義で触れることの少ない福祉を中心に講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで医療・保健システム、福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者を対象とする個別的な保健・福祉政策について講義した。

出席者の受講態度は良好であり、出席者が固定される傾向は続いたが、期末試験の成績は比較的良好であった。科目の性格上、知識の伝授を主目的とせざるをえず、演習を取り入れた双方向授業などの工夫の余地が少ないため、学習意欲の向上という従前からの課題は残る。

## 音楽とところ

2年次前期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの3つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は30名であった。

## 美術とところ

2年次前期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は14名であった。

## 保健ボランティア

2年次

藤内美保

保健医療に関するボランティアを体験し、その経験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探し、参加手続きをとり、体験し、参加レポートを記載するなど、自主性や行動力の向上につながっている。保健・医療関連の学会運営のボランティア、健康づくり支援の活動、福祉関連の活動など、様々な場で幅広く活動していた。看護の知識や技術が活かせるような活動を推進する必要がある。課題レポートは、ボランティア受け入れ団体など必要事項を遺漏なく記載するフォーマットに改正する予定である。

## 養護概論 I

2年次前期

赤星琴美、小野治子、堀本フカエ

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などについて教授した。具体的には、養護についての本質や基本的概念、職業倫理、養護教諭の沿革と健康課題の変遷、保健室経営と学校保健活動などについて、既存の資料や図書館におかれている本・資料などを用いてディスカッションを行い学びを深めた。さらに、養護教諭の職務と果たすべき役割、子どもを取り巻く環境（新々に課題を抱えた子ども、慢性疾患をもつ子どもとその解決の支援について、現職の養護教諭を講師として招き、学びを深めた。

## 教育学概論

2年次前期

鈴木篤

教育に関する本質的理念について、これまでに受講者が有してきた経験や理解を問い直すことを通して、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

## 生徒指導

2年次前期

長谷川祐介、吉村匠平、関根剛

教師として生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

## 教育相談

2年次前期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解を構築させた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

## 英語Ⅱ－A2

2年次後期

宮内信治

前期に引き続き原書 **Word Power Made Easy** を教科書として用い、英語語彙増強学習を行った。医療職者を含む実践者や科学者を表わす語彙とその派生語を学習した。毎週単語小テストを行い、教科書原文を用いた音読暗唱を課題にして、それぞれ評価した。前期で講読した原著の本体を用いて文法解析させ、和文翻訳させた。課題内容を次回の講義時に解説し、解釈の修正と文法理解を促した。今後、講義資料として使用する原著を最新のものに變更し、現在の最新情報、知識を学生に提示して、日本を含む世界の看護界の動向への興味関心を喚起していきたい。

## 英語Ⅱ－B2

2年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English,

and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 放射線健康科学

2 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

放射線健康科学は現代医療に必要不可欠な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物・健康影響、その防護についての基本的な事項を講義している。また、医療での放射線利用についても紹介し、放射線問題の重要性を理解できるように配慮した。さらに、同時期に実施している健康科学実験（自然放射線の測定、診療用 X 線装置の散乱線の測定を通して放射線の量的な理解）と合わせて、医療における放射線利用に対する基礎知識がより深く理解できるように努めた。

## 健康運動学演習

2 年次後期

稲垣敦

学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標を定め、前期の健康運動学で学んだ知識を活用して自分に合った運動メニューを作成して 15 週間実施した。また、この最初と最後に自分の目標に合った評価指標を選んで計測し、前後の値を比較して効果判定を行い、考察した。さらに、授業のはじめに、運動継続のための行動変容理論の短い講義を行った。次年度は、新型コロナウイルス感染予防対策を充分にとって進める。

## 健康科学実験

2 年次後期

濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子、市瀬孝道、吉田成一、定金香里、甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 11 テーマからなる実験を行った。1) 人体解剖学実習 (担当者: 濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子)、2) 組織学実習 (担当者: 濱中良志)、3) 血液検査 (担当者: 定金香里)、4) 基礎微生物学実習 (担当者: 吉田成一)、5) ラットの解剖 (担当者: 市瀬孝道、吉田成一、定金香里)、6) 測定誤差と変動 (担当者: 甲斐倫明)、7) 放射線 (担当者: 恵谷玲央)、8) 染色体異常 (担当者: 小嶋光明)、

9) 呼吸循環器系持久力 (担当者: 稲垣敦)、10) 心電図 (担当者: 岩崎香子)、11) 食物栄養学実習 (担当者: 安部眞佐子)

## 看護アセスメント学実習

2 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

病院実習において 1 名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。目的の変更はないが、実習要項の目的・目標の表現や記録用紙について検討し見直した。実習目的について、看護過程のアセスメントまでにするか、看護計画までにするかといった議論もあるが、何のためにアセスメントしているのかを考えた場合に看護計画立案までは必要であることを確認し目的の変更はしないことにした。実習施設は、県立病院 8 病棟、大分赤十字病院 7 病棟、大分大学医学部附属病院 4 病棟の計 19 病棟に 6~7 名の学生を配置した。臨地実習時間は、調べる、思考する、記録する時間がもう少し必要であるという担当教員の意見を考慮し、15 時までの臨地実習時間とした。今年度は看護アセスメント演習の方法を工夫したことにより、実習の成果も認められた。インフルエンザによる欠席やインシデント・アクシデントなどトラブルなく実習ができた。

次年度は、卒業論文発表会の翌日からの実習開始日について検討し、担当教員の負担感を軽減する。また、今年度、実習施設指導者より本学の実習に関する意見を聴取した。日々の実習目標やその日の学びの伝え方、ケア実施の時の学生の積極性などの意見を真摯に受け止め改善していく。

## 老年看護援助論

2 年次後期

小野美喜、甲斐博美、佐藤栄治、堀裕子、森加苗愛

老年期の身体、心理、社会的機能の特性をふまえ、老年期に代表的な障害や疾病をもつ高齢者およびその家族への看護援助方法を各教員がハンドアウト資料と教科書を用いて教授した。特に認知症や加齢による合併症を持つ患者、及び緩和ケア対象患者の生活の質や症状マネジメントについてグループワークを行い、ディスカッションを通して学べるようにした。また、高齢者の胃瘻造設など看護援助に関わる倫理的問題について全体討議を行った。今後も学生が自分で考え発言できる機会を設けるように工夫をしていく。また、更に実践的な学びを支援できるよう臨床家を導入した内容教授を計画していく。

## 母性看護援助論 I

2 年次後期

林猪都子

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。知識の定着を図るために、毎回、講義開始前に前回の講義内容について小テストを実施した。学生の小テストへの取り組みは良好で、事前学習をして取り組んでいた。

## 精神看護学概論

2 年次後期

影山隆之

健康を心理－社会的側面から理解するために、健康日本 21、精神力動論、心理社会的発達論、ストレス論、及び国際生活機能分類などの考え方や、主な精神症状・精神疾患、アディクション、自殺予防などのトピックを紹介するとともに、歴史と法制の概要を講義した。前年度の試みをさらに徹底させてパワーポイントを全廃し、ハンドアウトを事前配布し、授業前にその内容に目を通す（特に発問について考えてくる）ことを求め、授業内でディスカッションをした。授業中にはできるだけ動画や自験例を紹介した。出席確認を兼ねたリアクションペーパーに質問や感想を記載させ、次回授業前に「質問とこれへの回答」を pdf ファイルで学生に公開した。これにより理解不十分な点を補うとともに、次回授業の時間を節約した。学生による授業評価やリアクションペーパーの記載を見る限り、この方式は好評であり、精神看護への関心を高め、理解を深め、スティグマを低下させる効果があったと考えられる。次年度はハンドアウトの内容をさらにブラッシュアップする予定である。

## 地域看護学概論

2 年次後期

川崎涼子、赤星琴美、小野治子、佐藤愛、鈴木由美、藤内修二、村嶋幸代

地域における個人・家族、集団への看護活動を行う意義、看護師に求められる役割について考えることのできる素地を養うため、地域看護の歴史と最新の情報を交えた講義を行った。地域看護の基本的知識として、地域住民が主体的に活動することを支える看護職の発展と今後の展望については地域看護分野の先駆的研究者として村嶋学長による講義を行った。公衆衛生意義、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーションについては、研究と大分県における豊富な実践活動のある藤内修二氏による講義を行った。地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）などについて講義を行った。また、大分県の地域看護活動の実際について学生が豊かなイメージをもてるよう、地域で活動する市の保健師を招いて実際の活動事例を教授し

た。学生が地域で活動する看護職を具体的にイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

## 家族看護学概論

2年次後期

川崎涼子、赤星琴美、小野治子、佐藤愛

個人への看護を中心に学んできた学生に対し、家族単位で看護の対象となることの意義を理解できるように講義を組み立てた。家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。家族看護の概念や家族の機能や構造といった基礎的な知識のほか、家族看護に関連する重要な理論（家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論）については時間を十分にとって教授した。また、家族看護過程の演習では、グループワークを行い、発表では学生同士が活発な意見交換を行い、家族看護の視野が広がるよう工夫した。家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。

## 国際看護学概論

2年次後期

桑野紀子、丸山加菜

講義では、①世界の人々を看護の対象としてとらえ、世界の保健医療に関する課題について学び、その背景や対策について考察すること、②日本国内の在留外国人や訪日外国人への健康支援に関して、対象者の文化社会的多様性に配慮する看護について学ぶことを目的に講義を構成した。JICA デスクから講師を招聘し、SDGsに関する参加型のワークショップを行った。また、海外での看護実践について、担当教員の JICA 体験談や、赤十字赤新月社の活動について外部講師の体験談を組み込む等工夫した。

授業アンケート結果については良好な結果が得られ、学生の理解度を測る筆記試験でも全体として平均点は高かったが、理解不足による誤答が多い分野（内容）もあったため、興味を持って理解を深めてもらえるよう教授方法を更に工夫する必要がある。



## 看護管理学概論 I

2 年次後期

福田広美、平野互、稗田朋子

看護管理の概念および看護管理を取り巻く社会背景を理解し、看護職として看護のマネジメントについて主体的に学ぶことをねらいとした。学生が、看護管理について理解を深め、組織的な看護の必要性を理解し、看護の対象となる人々に効率的かつ質の高い看護を提供するための看護管理に関する基礎的な知識を学ぶことができるよう講義を行った。今後は、学生自身が様々な看護の場においてマネジメントを行えるよう事例を取り入れながら学習を行う必要がある。

## 看護の倫理

2 年次後期

平野互、小野美喜

看護職に必要な医療倫理・生命倫理の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「意思決定の倫理」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」・「End of life に関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」の 9 回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。講義に「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストとする事例演習を組み込んだほか、講義終了前にミニレポートを課して講義内容の整理と質疑、出席管理を行い、ミニレポートと期末の課題レポートにより成績評価を行った。

出席者は多かったが、学生に予習の習慣がないこともあって、事例演習が双方向的な議論の場になりにくいことが課題である。

## 第 1 段階看護技術演習

2 年次後期

森加苗愛

本科目は、4 段階のステップからなる看護技術修得プログラムの第 1 段階の位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を 1 人で実施できる能力を身につけることである。第 1 段階看護技術演習では、学生が実技演習前に主体的に準備し学ぶことができるようにワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考することができるようにした。また、事例は 1 事例で 2 つの課題に取り組むこととし、グループメンバーが同じ事例を共有して討議できる内容とした。評価は 3~4 人でグループを組み、公平に選出した 1 名が実践してグループ評価とした。また、<技術項目>だけではなく<全体的取り組み>を鑑みて評価を行い、合否判定を行うこ

ととした。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できた。昨年、1名グループ代表者1名の実践によりグループ評価となることや、教員により評価の厳しさが異なるとの意見があがったため、学生や教員に対する評価方法や評価項目に対するオリエンテーションを丁寧に実施したところ、今年は評価に対する意見は見られなかった。

今後も事例内容の検討や評価方法について検討を行っていく。

## 学校教育心理学

2年次後期

藤田文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけから入り、発達、知能、パーソナリティ、学習などの個々の生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

## 教育課程論

2年次後期

今井航

将来教員として授業を計画する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基礎力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）及び「学習指導要領とは何か」といった2点の問いを持って、授業を進めた。

## 生体薬物反応論Ⅱ

3年次前期

吉田成一

生体薬物反応論Ⅱは疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）に関する講義である。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床上使用する医薬品全般について講義した。

2年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。しかし、アレルギー性疾患治療薬、造血薬については、理解度が低く、次年度の課題である。

昨年と比較すると、平均点、最高点、最低点のいずれも低下した。

履修者（再受験該当者を含む）90名中、86名が単位を取得した。単位取得率は上昇したが、3

年次配当科目の本講義科目の単位未修得は4年次における履修が必要となり、4年次において、単位が修得できないと、本講義科目により卒業が不可となる。昨年度に引き続き、本年度においても3年次で単位未修得者が生じたことから、今後、履修者全員が3年次において単位修得できるよう期待したい。

## 成人・老年看護学演習

### 3年次前期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした。発達段階（成人期、老年期）における特徴を踏まえた上で、様々な健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、臨床現場における看護援助の実践がイメージできるよう演習を行った。成人看護学演習では、胃がん周手術期の患者事例を用いて看護過程を展開した。術直後の患者観察や看護援助、術前の情報を基に立案した看護計画を術中・術後の患者の状況に応じて評価修正ができるよう指導した。老年看護学演習では、認知症をもつ高齢者に焦点を当て、グループディスカッションなどを通し学生間の学びの共有を図った。高齢者の特性を踏まえたアセスメントができるような工夫が課題である。

## 老年看護学実習

### 3年次前期

小野美喜、内倉佑介、佐藤栄治、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子、三ヶ田暢子、光根美保、森加苗愛、吉川加奈子

施設に入所している高齢者の生活の援助・支援を通して、対象を理解し、強みを捉え、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設6施設、介護老人福祉施設6施設の合計12施設において1週間の実習を行った。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたケアへの参加とリクリエーションの企画や実施などができた。目標到達をしているが、さらに多職種連携の中でケアを行っていくことが課題であり、工夫をしていきたい。

## 成人看護学実習Ⅰ

3年次

小野美喜、内倉佑介、佐藤栄治、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子、三ヶ田暢子、光根美保、森加苗愛、吉川加奈子

成人看護学実習Ⅰは、第4段階の専門看護学実習として、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とした。実習施設は、大分県立病院 8 病棟および大分赤十字病院 5 病棟とし、各病棟に 3～4 人ずつ学生を配置して 8 週間の実習（学生 1 人 2 週間の臨地実習）を実施した。

教員の指導体制は常駐型としながらも、学生が自律して看護スタッフとの連携を図ることができるよう指導を行った。学生が対象への看護を思考できる実践型の実習を目指して記録媒体等の工夫を行った。実習指導者の協力のもと、目標達成ができたと評価する。今後も引き続きチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

## 成人看護学実習Ⅱ

3年次後期

小野美喜、内倉佑介、佐藤栄治、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子、三ヶ田暢子、光根美保、森加苗愛、吉川加奈子

成人看護学実習Ⅱは、第4段階の専門看護学実習として、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、慢性期・終末期の健康段階にある対象に、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。

実習施設は、今年度は大分県立病院 8 病棟および大分赤十字病院 5 病棟とし、各病棟に 3 人ずつ学生を配置して 8 週間の実習（学生 1 人 2 週間の臨地実習）を実施した。

対象者が複雑な疾患背景をもち、病態アセスメントに時間を要することが昨年の課題であった。今年度は成人看護学実習Ⅰと同様に学生が対象への看護を思考できる実践型の実習を目指して記録媒体等の工夫を行った。実習指導者の協力のもと、目標達成ができたと評価する。今後も引き続きチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

## 予防的家庭訪問実習（3年次）

3年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習の進め方に前年度から変更は少ないため、年度初めのオリエンテーションは簡略化した。

3年次生は他学年とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した(4月17日以降)。3年次生は特に、協力者の健康維持のために大切なことを協力者と共に考え、可能な支援は実施することを主眼とした。学生は一人当たり年4回以上訪問することとした。訪問日程が偏らないよう留意することと、訪問前に学生が話し合って十分準備をすること、学生に責任のない事情で予定が変更になり4回訪問できない場合は代替学習(協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等)で補うことを年度初めに確認した。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを年間5回配信し、諸連絡や他チームの情報紹介に用いた。学生のレポートを見ると、地域の高齢者の健康維持条件について考察するだけでなく、協力者を取り巻く環境(家族、地域など)にも目を向けた記述が多く、実習の目的をほぼ達成できた様子がうかがえた。なお、協力者(高齢者)の健康・生活上の変化が気がかりな場合、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取る見守りネットワークの運用を開始したが、幸い必要となるケースはなかった。2022年度カリキュラムでの本実習の位置づけについても地域交流チームで検討し、基本的には現状のまま存続することが有意義との結論になった。

## 小児看護援助論

3年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健および、小児看護における援助技術や、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。授業は、看護過程の展開を個人とグループで作業を行い、グループワークで看護過程を完成して、事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。次年度は、専門看護学の4領域の演習期間が重複して、そのことが学生に負担感があると授業評価で明らかになったので、負担感のない効果的な方法を4領域で検討し、改善に努める。

## 小児看護学演習

3年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

本科目は、前半に小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を4事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。次年度は、アクティブラーニングとしていた調べ学習の負担があるという授業評価であったので、教員が講義する方法に変更する。学生は積極的な参加を求められる事例展開とディベートを通して互いの発表に意見交換する方法は継続する。また、小児看

護技術演習は、1)バイタルサイン測定、2)静脈点滴の固定、3) 経管栄養と吸痰など、25名程のグループに分けてローテーションする方法で実施した。次年度も継続できると考えている。

## 小児看護学実習

3年次後期

高野政子、草野淳子、足立綾、石丸智子、谷村優香

小児看護学実習は、大分県立病院に1グループ学生8~9人で6グループ(合計53人)、別府発達医療センターに学生4~5人で6グループ(合計25人)配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。1人の学生が1人の患児を受け持ち、小児看護を実施できた。また、学生は一人3日間の保育所実習を7月末から8月第1週までに実施した。幼児と出会うことが少ない学生には初めて子どもとコミュニケーションを学ぶこと、健康な子どもを理解して、病児と家族への関わりがスムーズに実施できることなど重要な効果がある。保育所実習では各グループで手洗い指導を最終日に行う課題を取り入れ、良く工夫して実施できたと保育所長会で成果が報告された。冬期のコロナ感染予防に活かされた。病院では7日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習中の技術の経験は、患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度に差があるが、全員が単位を取得できた。学生の個別性にあわせて積極的に実習を行うように指導することが課題と考える。

## 母性看護援助論Ⅱ

3年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

分娩期の異常と看護、産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。胎児機能不全、分娩期多量出血、産科処置、産褥期の生理と経過、産褥期の看護、新生児の生理と看護について実施した。産褥期・新生児の看護は母性看護学実習で大きな柱となり、産褥期は日々の退行性変化や進行性変化がみられる。講義内容が理解できるように3名の教員で分担して実施した。

## 母性看護学演習

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子、樋口幸、姫野綾

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義は、母性看護技術演習とウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の展開である。看護技術演習は、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常 2 事例、異常 3 事例をグループワークで学習内容の共有を図り看護過程を展開した。

## 母性看護学実習

3 年次

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子、安部真紀、姫野綾

母性看護学実習施設は 3 施設であり、実習期間は 1 グループ 2 週間（延べ 12 週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生 4～5 名配置（合計 29 名）、大分県立病院は学生 5 名配置（男子学生 6 名）（合計 30 名）、アルメイダ病院は学生 4 名配置（男子学生 3 名）（合計 24 名）、担当教員は各施設 1 名配置した。実習は学生 1 名につき妊婦または褥婦を 1 名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して生命の尊厳や自己を振り返る実習を期待して指導を行った。帰学日は記録のまとめや看護技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。

## 精神看護援助論

3 年次前期

杉本圭以子、後藤成人

精神看護の目標と役割を考えられるよう科目を通して、視聴覚教材、事例を多用し講義した。各精神疾患の病態・治療・看護の学習はアクティブラーニングの手法を取り入れ、自己の予習をもとにグループでの話し合いで学びを深める時間を設けた。精神科看護における治療環境、安全管理、権利擁護をはじめ、地域生活を支える支援についても視聴覚教材を用いて理解を深めた。また、援助技法として社会生活技能訓練（SST）を学生自身が実際に体験し、患者への対応の実際として DVD の事例をもとに学生が考える時間をとることで理解を深めた。

## 精神看護学演習

3 年次前期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

学生に事例検討させるための紙上事例教材をブラッシュアップし、学生に個人で取り組ませ、全体シェアリングで振り返りを行った。臨床で遭遇しやすい事例・状況を取り上げ、動画教材やロールプレイによって、学生にイメージしやすい演習を行った。精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの実際（現状）を、実習施設等から招いた外部講師による講演によって伝えた。各自が実習を行う障害福祉サービス事業所を訪ね、実際の地域生活の支援について見学し、実習での学びにつなげる時間を設けた。教材や講師は、学生に概ね好評のようである。講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続してよいと考えられる。

## 精神看護学実習

3 年次後期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人、稗田朋子、丸山加菜

前年度同様、実習期間のうち 6 日間は大分下郡病院、大分丘の上病院（実習前半のみ）、衛藤病院（実習後半のみ）に分かれて病棟実習を行い、2～3 日は 4 つの障がい福祉サービス事業所に分散して実習を行った。前年度の事業所中 1 箇所は学生が十分な指導を受けにくい環境になってきたので、新しい事業所（サマン春日）を開拓した。病棟実習で、学生は受け持ち患者について、全人的な理解とアセスメント、及び患者が受けている看護の理解について指導を受けた。病棟・病院内カンファレンスの意義と参加の仕方、退院支援、多職種連携の実際などについて意識付けを強化した。事業所では、利用者と共に各種プログラムに参加しながら、精神障がいを持ちながら社会で生活できるための条件や当事者ニーズのアセスメントなどについて、指導を受けた。実習最終日に学内で両者の学びを統合する最終カンファレンスを行った。全体として運営は予定通りできたが、次年度は COVID-19 の影響で臨地の状況が変わる可能性があり、それへの対応が課題である。

## 第 2 段階看護技術演習

3 年次前期

森加苗愛

本科目は、4 つのステップからなる看護技術修得プログラムの第 2 段階の位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を 1 人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることである。第 2 段階看護技術演習では、昨年度から演習全体の構造を見直し、第 1 段階からの流れを考慮して学生が効果的な学びができる様配慮を行ってきた。実技演習前に、学生が主体的に学ぶことができるようワークノートを準備し、技術の根拠



や手順を自ら思考することができるようにした。また事例は 2 事例準備し、持続点滴療法中の患者の寝衣交換やカテーテル管理等、基礎的看護技術の実践能力を身につけることができる内容とした。評価は 3～4 人でグループを組み、公平に選出した 1 名が実践してグループ評価とした。評価内容は<技術項目>だけではなく<全体的取り組み>を鑑みて合否判定を行った。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できた。第 2 段階看護技術演習では、グループで協力し合い演習を行っていた。

本科目の内容を見直しつつ 2 年目となったが、概ね目標は達成できている。今後も評価を重ねて事例内容や評価方法を更に洗練させていく。

## 在宅看護論

3 年次

福田広美、平野互、稗田朋子、吉川加奈子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。3 年次が、これまでの実習で得た学びをもとに、在宅看護の学びを深められるよう、在宅療養者の事例を示しながら教授した。今後は、在宅における多様な事例を取り入れながら、多様な場や多職種連携による看護についても学習を行えるようにする必要がある。

## 教育方法論

3 年次前期

佐伯圭一郎、生田淳一、麻生良太

教師による指示や発問、それに対する子どもの考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授や理論の実際を概説した。加えて、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

## 道徳教育と特別活動

3 年次前期

鈴木篤

道徳教育および特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

## 環境疫学・生物学演習

3 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

環境疫学・生物学演習は健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みを講義している。疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を演習・事例を通して理解できるように努めた。演習時間内に課題レポートを作成させて提出するやり方は、学生が主体的に問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。

## 看護探求セミナー(学部)

3 年次後期

小野美喜、影山孝之、高野政子、林猪都子

第 4 段階実習を履修した 3 年次生名に対し、実習での受け持ち患者 1 名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケース・スタディのまとめを行った。各教員が学生を担当し、テーマ決定からケースレポート作成までの過程を指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポート作成する過程の中で、看護実践と理論や他意見を参考に多角的に学ぶ機会とすることができた。実習期間中の科目展開であり、教員の指導時間の確保が課題であり、次カリキュラム改正の際に見直すこととする。

## 健康支援論演習

3 年次後期

福田広美、平野互、稗田朋子、吉川加奈子

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。後半は健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークを行った。今後は、講義とグループワークの構成を活かしながら事例を見直し、学生の理解を深められるようにする必要がある。

## 地域生活支援論

3 年次後期

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、佐藤愛、鈴木由美

地域で生活している人びとの健康課題の特性を理解し、地域看護活動の展開方法について講義と演習を行った。地域看護の実践者として市保健師を招き、実際の看護活動について事例を用いて教授した。母子保健活動や成人・高齢者保健活動、障害者保健活動、難病保健活動などの基本的な知識のほか、コミュニティ・アセスメントの手法を用いて地域を理解する演習を設け、看護職が「地域志向のケア」の視野が広がるよう工夫した。

## 国際看護比較論

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

世界の疾病構造の変化や国際保健／国際看護の主要概念について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学びぶことを目的として講義内容を組み立てた。また、昨年から海外に渡航する日本人の健康支援について、渡航医療に関する内容を講義に組み込んだが、今年度は学生自身が海外渡航をする際の留意点も含めて講義した。

データや事例を用いて講義を進めたことで、学生の興味を維持しながら講義を進められたと考える。世界の状況は刻々と変化するため、基本的な知識と共に、データから考察する力をつけられるよう、学生が自ら考える能動的な学習場面を増やしていく必要がある。

## 国際看護学演習

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

講義と演習の内容がつながり、相乗効果が得られるよう配慮した。講義で学んだ知識を実践に結びつけてイメージできるように、1) 外国人患者の看護、2) 海外に渡航する日本人の健康支援、3) 或るの国の健康課題とその背景、および対策について国際機関ホームページ等を情報源として調べ考察する、グループワーク／個人ワークを中心に組み立てた。文化・社会的背景が多様な外国人患者の看護については、外部講師を招聘し、ディスカッションやワークショップを交えた授業を行った後、グループワークによるケーススタディを行った。また、世界の保健医療について複眼的な視点を得ることを目的として、グローバル社会の矛盾と健康格差を描いた映画鑑賞も組み込んだ。

講義の後に関連テーマの演習に取り組むことで興味を喚起できたと考える。学生は海外の健康課

題等について国際機関のホームページ等から英語で最新の情報を得る方法を獲得し、比較を通して見えた日本の医療や看護の特徴についてグループメンバーとディスカッションすることができた。全体発表会等の場でも質疑やディスカッションがより活発化されるよう更に工夫が必要である。

## 災害看護論

### 3年次後期

石田佳代子、石丸智子、川崎涼子、佐藤弥生、松久美、福田広美、吉川加奈子

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、地域における災害時保健活動、在宅療養患者に対する災害看護活動、災害時のボランティア活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とし、災害および災害看護の基礎的知識の習得に重点を置いた。演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使って机上訓練を行った。本科目の評価はレポートによって行った。レポート課題の一つに、令和元年台風第 19 号に伴う被害状況等を取り上げ、事実に基づく状況の理解と看護の視点からの考察を行うように指導したことで、学生は災害時における看護のあり方や自身の責務などについて考えをより深めることができたと考える。

令和の災害医療の重要課題の一つに「気象災害」がある。わが国でも毎年のように洪水、台風などの気象災害が発生している。災害時に備えて、看護職者として優先されるニーズを判断する能力や、その根拠をなす様々な基礎的知識を身につけておく必要がある。授業時間内に解説できる内容は限られるが、学生が視野を広げ、知見を広げられるように取り組みたいと思う。

## 看護科学研究

### 3年次後期

佐伯圭一郎、足立綾、石田佳代子、市瀬孝道、岩崎香子、小野治子、影山隆之、品川佳満、山田貴子、渡邊弘己

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目的としてオムニバス形式の講義・演習を行った。看護研究の意義、研究テーマの設定から文献収集、研究計画書の作成といった過程のすすめ方、研究デザインの決定やデータ解析技法の知識と実践、論文の作成と発表という範囲をカバーしている。各回を担当する教員の経験を踏まえた学生にとって興味深い内容であるが、内容の重複や時間的配分など全体としての調整を行えば更に効果的だと考えられる。

## 英語Ⅲ

3 年次後期

Gerald T. Shirley、宮内信治

講読担当 語源学の知見を基に医療や看護に関連する語彙を習得させた。また、論文構成を確認したうえで、実際に発表された英語の原著論文を読解させた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れさせることができた。

## 学校保健学

3 年次後期

赤星琴美、小野治子、堀本フカエ、伊東朋子

学校保健とは児童生徒への健康の保持増進を図ること、集団教育として健康や安全への配慮を行うことなど、学校における保健管理と保健教育を目的に実施されるべきであり、そのことより、この科目では児童・生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導等を取り上げ、学校保健の重要性について理解させた。具体的には、学習指導要領と教育課程について理解させ、学校保健の意義や内容、保健室経営や学校保健計画が立案できるように組み合わせた。養護教諭としての現場経験が豊富で、大学教育の経験もある外部講師に講義を依頼し、グループワークなども多く組み込むことで、グループダイナミクスの効果も期待して展開した。

## 教育制度論

3 年次後期

今井航

世界主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

## 養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美

事前指導では、実習生としての遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や

要項をもとに整理した。また、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定した。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。

## 養護実習 I

3 年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美、伊東朋子、草野淳子

2 月の 5 日間、大分市立王子中学校、植田中学校、東植田小学校、賀来小中学校、戸次中学校、長浜小学校、南大分小学校、荏隈小学校、八幡小学校、舞鶴小学校、植田小学校、植田東中学校、植田西中学校、中津市立大幡小学校、日田市立光岡小学校、大明中学校で、学校体験を中心とする実習を行った。今年度は 1 校 1 名の実習となった。

## 応用生体機能反応論

4 年次

濱中良志、市瀬孝道、吉田成一

現状において、4 年次生は、1 年次に学習した生体構造論（解剖学）・生体機能論（生理学）を 2 年次以降に学習した疾患へのアセスメントの教科とは独立した教科ととらえていた。そのため、生体構造・機能論がどのように代表的疾患の病態生理へ関与しているのか説明しながら、4 年次生に生体構造・機能論を教授した。主に、消化器系・循環器系・呼吸器系・神経系に焦点を当てた。

## 地域看護学実習

4 年次前期

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、桑野紀子、佐藤愛、稗田朋子、平野互、福田広美、丸山加菜、矢幡明子、吉川加奈子

大分県下全域の保健所（保健部支所含む）10 か所、市町村保健センター及び支所 13 か所、合計 23 か所の施設に、それぞれ 2～4 名の学生を配置し 2 週間の実習を行った。地域で生活する人々を理解すること、地域で行われる看護活動の多様さ、多職種との連携の必要性について学んだ。実習指導体制では、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。また、金曜日を帰学日とし、学内で教員と学生間で学びを深めた。実習終了後、在宅看護論実習と合同でまとめ会を開催し、実習成果を学生間で共有した。

## 予防的家庭訪問実習（4年次）

4年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習の進め方に前年度から変更は少ないため、年度初めのオリエンテーションは簡略化した。4年次生は他学年とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した（4月17日以降）。4年次生は特に、協力者個人の生活のみならず、地域の健康課題にも目を向けて考察・提案することを主眼とした。学生は一人当たり年4回以上訪問することとした。訪問日程が偏らないよう留意することと、訪問前に学生が話し合っただけで十分準備をすること、学生に責任のない事情で予定が変更になり4回訪問できない場合は代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補うことを年度初めに確認した。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを年間5回配信し、諸連絡や他チームの情報紹介に用いた。学生のレポートを読むと、地域の高齢者の健康維持に必要なことを提案・実践するだけでなく、地域の交通・買い物・医療等の事情にも目を向けて考察しており、さらに協力者と自分たちとの関係の中で自らの看護観を培っている様子が見え、実習の目的はほぼ達成できていた。なお、協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気になりな場合、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取る見守りネットワークの運用を開始したが、幸い必要となるケースはなかった。2022年度カリキュラムでの本実習の位置づけについても地域交流チームで検討し、基本的には現状のまま存続することが有意義との結論になった。

## 看護管理学概論Ⅱ 政策等含む

4年次前期

福田広美、伊東朋子、吉川加奈子

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解できるようにした。今後は、看護管理および看護政策について事例を通して理解を深められるようにする必要がある。

### 第3段階看護技術演習

4年次前期

森加苗愛

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムの第3段階の位置づけにある演習である。本演習の目的は、これまでに学んだ基礎看護技術を、e-ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に看護実践能力を高めることである。第3段階看護技術演習では、学生が主体的・計画的にかつ繰り返し学習する環境の提供として e-ラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができた。

本科目では、e-ラーニングシステムを通して学んだ技術はシステム内の試験を受け 100 点を取ることによって修得したことになる。今年度も特にトラブルなく全員が修得できた。

今後は 2022 新カリキュラムに向け、e-ラーニング内のコンテンツを見直していくことが課題である。

### 在宅看護論実習

4年次前期

福田広美、平野互、稗田朋子、吉川加奈子、赤星琴美、川崎涼子、小野治子、佐藤愛、矢幡明子、桑野紀子、丸山加菜、山田貴子、内倉佑介

在宅看護論実習は、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケアマネジメントを通じた訪問看護の実際について、他職種との連携・協働を含めて理解を深めることができた。学生は、事例を受け持ち、看護過程を展開するなかで在宅看護の実践を行った。また、学生は、受け持ち事例以外の症例についても学びを深め、多様な在宅の場で療養生活を送る人々とその家族の看護について考える機会となった。実習最終日には、学生が、在宅看護論実習と地域看護学実習の学びを統合し、地域における看護について学生間の討論を通して、学びを深めた。今後は、学生が実習による学びを振り返り、在宅看護についての理解を深められるよう実習施設と連携しながら教育を行う必要がある。

### 総合看護学実習

4年次前期

看護系教員全員

本実習は 4 年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的



に取り組む点である。今年度は、4年次生 79 名が県内 39 施設において、6 月下旬から約 3 週間の実習を行った。学生は担当教員や臨地指導者の指導・助言のもとに実習目標を概ね達成することができた。

## 卒業研究

4 年次

藤内美保

卒業研究は、研究テーマにおける課題解決や仮説を検証するため、研究計画から論文作成及び研究発表に至る経験を 1 人 1 テーマで研究に取り組み、将来の研究活動の基盤を形成することを目的としている。4 年次生 78 名が卒業研究論文作成、12 月 4 日・5 日に講堂で開催した発表会に参加しプレゼンテーションを行った。卒論関連のスケジュールは、3 年次の 12 月に、卒業研究に関するオリエンテーションを行い、さらに各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行っている研究テーマやこれまでの卒業研究などを紹介した。その後、学生の希望を考慮し各研究室に配属され、それぞれの研究室において教員の指導のもと、卒業研究のテーマを 3 月末日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき担当教員の指導のもとに研究に取り組んだ。実験研究や調査研究、文献研究など多彩なテーマや方法で興味深いものが多い。今年度の工夫として、教育研究委員会メンバーが卒論発表 SG となって取り組んだことは、要旨のペーパーレス化を図り、Web 上で閲覧できるようにしたことでカラー版の要旨を活用できた。また昨年度改善した座長の見直しの提案、教員の質問方法の見直し、照明の効率化など様々効果的・効率的な運営を継続した。卒論の優秀賞の審査方法についても検討し、2 日間発表会に参加する審議会メンバーが 5 段階評価で審査することとした。評価方法は、今年度から担当教員によるルーブリック評価を導入した。1 年間直接指導した教員の評価にしたこと、またルーブリック評価により、学生自身がどのような視点で学習すべきかを示すことで学生が主体的に取り組むことに繋がると考える。次年度は、原著講読のルーブリック評価の導入を検討する。

## 原著講読

4 年次

藤内美保

原著講読は、卒業研究を進めるにあたり、専門領域における英語論文などの文献を正確に読み英語能力を身に付けることを目的としている。4 年次生 79 名は、各研究室に所属し、卒業研究と並行して計画的に進めている。次年度は S 評価が導入される学年となるため、評価方法を変更し、卒業研究と同様に直接指導する担当教員が評価すること、また原著講読のためにどのような学習目標を達成するかについての視点を示したルーブリック評価の導入に向けて進めた。昨年度、全研究室の教員に原著講読の実施状況の実態調査を踏まえた学習目標を作成する。

次年度は、原著講読のルーブリック評価の導入にむけて、全教員と情報共有し円滑な運営ができるように進めていくとともに、評価結果を共有する予定である。

## 養護実習Ⅱ

4年次前期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美、伊東朋子、草野淳子

大分市立植田南中学校、植田中学校、東大分小学校、佐賀関小学校、西ノ台小学校、豊府小学校で、学校安全・保健活動を中心とする実習を行った。

## 教職実践演習（養護教諭）

4年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美

学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。大分県立新生支援学校や県内更生施設でのフィールドワークを実施した。学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と実施、投影的な自己理解促進の手段としてのフォトコラージュ体験などを行った。

## 看護スキルアップ演習

4年次後期

森加苗愛

本演習では、今年度は事例内容を見直して洗練させた。事例数は各専門看護学領域 5 事例として 10 の課題に取り組んだ。看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとして事例のロールプレイを行い、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開されるように運営した。学生は、自主的に演習に参加しており、概ね目標は達成された。昨年度の学生からのアンケートでは、演習中のディスカッションの充実や教員からの多くの講評を求める声があげられたため、今年の運営は学生主体とし、討議の時間を多く設定した。また、学生同士で評価を行いあうための相互評価表を導入し、評価の視点をヒントに討議の展開を支援した。結果、学生による運営は主体的に行え、討議も深まった。また評価は、人間科学系の教員にも指導や講評を依頼し、昨年度より充実した運営へとつながった。

今後も学生主体の運営、相互評価表の活用による討議、全教職員による支援などの運営の工夫により学生の学びを支援していく。

## 医療福祉と人権

4年次後期

平野 互

看護専門職としてだけでなく社会人として必要な基本的人権に関する知識を習得するとともに、人権感覚を身につける目的で開講される選択科目である。人権という概念を整理し、法に規定された事柄だけでなく、その本質的な意義と役割について理解できるよう、「人権 その概念と意義」、「医療福祉における人権課題」、「人格と自由権」、「社会権～生存権と社会保障」、「高齢者の人権」、「患者の人権」、「障がい者の人権」、「差別と優生思想」の講義を行い、自ら選択したテーマでレポートを作成し評価を行った。

4年次後期の選択科目のためであろう、今年も受講生は1名であったが、ゼミのように議論しながら、受講生の問題意識に寄り添って講義を進められ、受講生の理解も深まったと思われる。

## 4-2 博士課程(前期)

### 生体科学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

現状において、1 年次生は、臨床経験有しているため、生体科学（解剖・生理・生化学）の分野の基本的な理解はできていた。よって、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を“対話形式”で授業を進めた。

### 病理学特論

1 年次前期

市瀬孝道

昨年度同様に疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、また、腫瘍、代謝障害、先天異常などの病気の基礎を講義した。これら疾病の基本的事項と系統別の個々の疾患とが繋がるように詳しく講義した。また、系統別疾患の講義の中では疾患症例について、マクロ病理（解剖時の所見）とミクロ病理（病気の組織像）についてパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

### 病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

重要疾患を論理的に説明できるように指導し、発表・レポート提出を通して、その疾患の病態生理学を教授した。

### 健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに、科学について概説し、測定と評価、運動の強さと量の測定について説明した。臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、ストレッチング、筋力、筋力トレーニング、エネルギー代謝、有酸素能力、加齢と体力、運動強度、身体活動量、運動療法等について講義した。また、身体活動量、柔軟性、最大酸素摂取量の測定実習等を行った。

栄養学に関しては、栄養素の基礎の復習をし、著しく解明されてきた脂肪酸の効果について講義した。脂肪酸組成の異なるダイエットの例として地中海式食事の説明をし、メタボリックシンドロームと食事の英語の論文を読んで、解説を加えた。

## 人間関係学特論

1・2 年次後期

関根剛、吉村匠平

本講義はシラバスの構成を中心に、受講者の関心や希望を取り入れて講義テーマのバランスをとりながら内容を決定した。内容に応じて、関根、吉村で担当を分担し、講義および演習を行った。吉村は、行動分析の基本理論や応用を中心に解説しながら、検診受診率をあげる、禁酒禁煙、発達障がいへのアプローチなどの現実課題についての対応について解説した。関根は、行動変容の理論である多理論統合モデルについて解説して健康行動を効率的に変容させる方法、個別の課題変容プログラムを犯罪非行の心理的背景や処遇、グループ指導のための技法と演習、PTSD と被災者などについて解説をした。評価は、関根・吉村がそれぞれ独自に課題提出などをさせ、合計による評価を行った。

## 健康社会科学特論

1・2 年次後期

平野互

人間の健康に関わる研究や職業的実践においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、社会学や文化人類学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的思想と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。

今年度は受講生が 4 名あったため、共通の学習ニーズに応える必要があったが、方法論や基本的な理念に関する知識を伝授するための講義のほかは、受講生のキャリアや研究テーマに寄与できることを目的に、受講生の学問的関心に沿った課題に限らず、これまで接してこなかったであろう分野の研究の紹介と討論を行った。課題演習では、日本の保健医療福祉政策や社会の課題に関する分析と各受講生の選択したテーマに沿った文献の抄読の 2 つのレポートの作成を行った。

## 保健情報学特論

1・2 年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邊弘己

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術につ

いて、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。受講者のレディネスのばらつきへの対応が今後の課題と考える。

## 看護科学研究特論・健康科学研究特論

### 1・2年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、甲斐倫明、佐伯圭一郎、福田広美、平野互、関根剛、桑野紀子、山路野百合

看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、文献研究などを実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。

## 看護管理学特論

### 1・2年次後期

福田広美、佐藤弥生、甲斐仁美、柿本貴之

看護管理学特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生が、マネジメントプロセスの理解を深め、質の高い看護サービス提供のために組織が備えるべき機能、看護管理者に必要とされる能力について考える機会となった。さらに学が、看護管理に関するテーマを選び、自らの経験を踏まえて、マネジメント理論や論文等を活用したプレゼンテーションを行い、クラスメンバーとディスカッションを行った。今後は、多様な背景を持つ学生が、看護管理の実践現場において理論を応用しながら改善、改革を進められるよう学習を深める必要がある。

## 看護理論特論

### 1・2年次後期

藤内美保、高野政子、桑野紀子、秦さと子、筒井真優美、伊東朋子

看護実践の基盤となる看護諸理論を理解し、看護実践と理論のつながりを通して、看護を探究させた。また看護と科学的解釈の本質を考究するための導入であることを外部講師である筒井真優美教授に看護理論の総論の部分としての講義を依頼した。各論として、他の4名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式で講義した。また看護理論のパラダイムの視点から本年度の11名の履修学生には課題として調べさせた理論家について発表させて、看護実践を考察させた。

## 看護教育特論

### 1・2年次後期

高野政子、藤内美保、梅野貴恵、秦さと子、吉村匠平、山崎清男

看護を担う人材育成が質の高い看護教育に基礎をなすという観点から、教育学の理論と技法を理解し使えるようになることを目標に、本科目では看護基礎教育の内、専門分野の看護教育学、看護教育課程、看護教育方法、看護教育評価を含む内容を教授した。外部講師1名を招聘し、教育原理、教育心理学を分担した。履修生は、看護管理・リカレントコース、助産学コースの8名であった。課題レポートは、各自の立場で教育的視点に立ち、現状分析と自己の課題を明確化し、全員の前で発表して意見交換した。例年、受講生の職種や目的が多様であるので、其々に学び取っていると思われる。

## 看護コンサルテーション論

### 1・2年次後期

杉本圭以子、吉村匠平、関根剛、竹村陽子

看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略を講義し看護コンサルテーションの全体像をつかんだ後、外部講師（専門看護師）により現場でのコンサルテーションの実際を講義していただき、臨床現場に即した現実的なコンサルテーションについて考察した。さらに対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について講義した。講義での学びをふまえ、後半は学生が経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることで看護コンサルテーションについてさらに理解を深めた。

## 看護倫理学特論

### 1・2年次前期

平野互、小野美喜、関根剛

倫理的思考は、専門領域を問わず全ての看護職に不可欠であることから、受講者が専攻する各領域で活かせるよう、必要な生命倫理・医療倫理の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく思考訓練を行うことを目的に講義を組み立てている。11回の講義と担当教員ごとに事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告（レポート）による討論を行った。

講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「人間の尊厳と自己決定権」・「プライバシー権」・「医療政策による人権侵害」を平野、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行った。最終回の事例報告は、

例年同様受講生が 20 名を超えたので、レポートのテーマをもとに 3 名の教員で割り振り、それぞれ討論を主宰して評価を行った。

## 看護政策論

1・2 年次後期

影山隆之、小山明夫、小池智子、中西三春、立森久照、村嶋幸代

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、これらの政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。一部には、対策立案の演習という要素を取り入れた。各講師が up-to-date の内容を選択するため保健看護福祉の政策の最新動向や最新研究に触れることができ、履修者には非常に好評で、この形を維持するのが適当と考えられる。

## 英語論文作成概論

2 年次前期

甲斐倫明、影山隆之

テキスト（ボタージュ先生の医学英語論文講座）と配布資料を用いて、英語論文を執筆することの意義、英語論文の書き方の概要、さらに科学論文で使用する英語表現の基本的パターン（動詞）と基本表現までを教授した。英語論文の構造化アブストラクトを書けることを目標に実験系および調査系の論文アブストラクトを例示しながら講義を行った。提出されたアブストラクトの添削指導を行った。

## Intensive English Study

1 年次前期

Gerald T. Shirley, Yume Takano

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their



progress was monitored and evaluated by the instructors during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructors. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

## 原書講読演習

1 年次前期

宮内信治

発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の習得、英文法基礎知識の確認と演習を行ったうえで、看護（Nurse Practitioner）に関する英文原著の読解翻訳演習を行った。各講義のはじめに単語小テストを実施し、学習確認と評価を行った。今後、講義資料として使用する原著を最新のものに変更し、現在の最新情報、知識を学生に提示して、日本を含む世界の看護界の動向への興味関心を喚起していきたい。

## 看護アセスメント学特論

1 年次生前期

藤内美保、高野政子、伊東朋子、石田佳代子

クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点目は、看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2 点目は、小児のフィジカルアセスメントの講義・演習と、カルガリー家族看護システム理論の視点から家族アセスメントを講義し、各自 1 事例のレポート課題を課した。3 点目は、在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。オムニバスで 3 領域からなる内容構成であったが、担当教員の退職に伴い、次年度は内容の見直しを行う。

## 看護管理学演習

2年次

福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画を立案するよう教育を行った。さらに、立案した計画をもとに演習と文献による考察を行い看護管理の実践向上に繋げることを目指し、演習を行った。受講者は、臨床現場の課題について現状分析を行い、課題解決に繋がる研修ならびに計画を立案、他施設等における研修を行い、看護管理について新たな視点や学びを深めた。最終的に、受講者が演習成果をポートフォリオにまとめ、受講者間で発表と意見交換を行った。今後は、学生が演習で実施したことを臨床現場で発展的に進められるようにする必要がある。

## 成人看護学特論

1年次前期

森加苗愛

成人期の発達課題や健康問題への理解を深め、健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法を探究することを目的とする。学生の臨床経験に基づき、成人期の看護実践において感じている臨床課題や関心事を深めるための看護理論の講義を行った。その後、学生が実践した「良い看護ができた」と評価した事例、「良い看護ができなかった」と評価した事例に基づき、なぜそのような評価を行ったのかを看護理論を活用して事例を振り返りながら根拠に基づきゼミ形式で質の高い看護実践とは何かを探究した。日々の実践に追われる中、自己の看護実践に関する根拠の明確化と意味づけに繋がる講義となった。

今後も、臨床経験や臨床課題を有する大学院生の強みを活かし、事例の探求により看護実践と理論の理解が深まるゼミの運営を課題としたい。

## 老年看護学特論

1年次

小野美喜

看護管理リカレントコース3名が受講した。高齢者の全体像、高齢者の理解と介入に有効な理論、認知症に関する基礎知識を教授し学びなおしとした。さらに受講生が経験している高齢者の健康上の課題について、意見交換を行い、高齢者の看護の課題と検討を行った。幅広い経験の中から有効な意見交換ができた。今後も引き続き学生背景に応じた科目運営を行っていく。

## 生殖看護学特論

### 1 年次前期

林猪都子、梅野貴恵

思春期、成熟期、更年期、老年期の各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴と看護問題の中から、学生の学習テーマである月経異常や産後の継続ケアについて、その看護援助の方法およびセルフケアのための教育のあり方について講義し、ディスカッションした。また、現在の日本や海外における母性、助産活動の現状と課題について探求した。

## 発達看護学演習

### 2 年次前期

小野美喜

#### <成人・老年看護学領域>

成人看護学領域では、成人のヘルスプロモーションおよび疾病・障害をもった成人の急性期、回復期、慢性期、終末期の各健康段階の特徴と身体的側面・心理的側面・社会的側面からとらえた対象の理解について知識確認し、事例をとおして看護を考える演習を展開した。また、老年看護学領域では加齢に伴う脆弱性や認知症の問題をとりあげ、事例検討を行った。今年度は成人・老年看護学領域の希望履修者は3名であった。看護師・保健師としてのそれぞれの経験から事例を分析しディスカッションすることで、履修者が多角的な視点で看護を考えることにつながった。3名の学生間でディスカッションが深まった。今年度のように履修者が多い状況で演習を展開することが効果的である。領域を分散することで、履修者が少なくなることは課題であり、科目の運営を考えていきたい。

## 地域看護学特論

### 1 年次

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、佐藤愛、村嶋幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、産業保健領域で活用可能な理論を用いて事例を理解する方策、職場における看護活動を組織的に展開する方策について討議を行った。地域職域連携の意義や活動事例について最新の情報を活用し、複雑化する地域住民や労働者への看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

## 放射線保健学特論

1 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明

「看護と放射線」の教科書および配布資料を用いて、医療における放射線診療の概要から、放射線の健康影響・リスク、医療従事者の放射線防護までの基礎を教授した上で、学生からの質問と医療現場での問題意識をもとにトピックスを交えて講義を行うことで理解を深める方法をとった。

## 広域看護学演習

2 年次

赤星琴美、桑野紀子、福田広美

公衆衛生看護、看護管理、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。

特に、各保健領域での法改正や事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、具体的に理解できるように教授した。

## NP 実習

1 年次前期

甲斐博美、大嶋佐智子、小野美喜、中釜英里佳、高野政子、草野淳子、堀裕子、森加苗愛

NP の診療活動に同行し、診察の実際を体験することで NP の役割を理解し、必要な高度看護実践能力と自己の課題を明確にすることをねらいに 10 名が履修した。病院や老人保健施設など様々な分野で活動する NP に同行し、包括的健康アセスメントと看護的治療マネジメントの実際を理解し、施設内における安全管理体制やチーム医療における NP の役割を学んだ。実習終了後に、修了生から NP としての実践と役割についての講義を受け、NP の役割と NP を目指すために必要な学びと姿勢についてグループワークをしたことが、自己の振り返りと今後の学習における課題の明確化につながった。大学院生としての学生の自主性を育成することが課題である。

## 老年 NP 特論

1 年次後期後半

甲斐博美、小野美喜、庄山由美、高根利依子、廣瀬福美、光根美保、森加苗愛

EBN に基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NP としての看護を実践する理論、方法を探究

することを目的として講義を行った。各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や病院や介護老人保健施設など様々な臨床で活動する診療看護師などがオムニバス方式で教授した。また、在宅における多職種連携と老年期の対象者の看護実践事例をケースレポートにまとめ、それぞれのテーマ別に事例検討を実施した。1事例ごとの意見交換によってチームマネジメントや看護アセスメントを深め、経験分野の異なる背景を持つ学生各自の課題や、NPとしての看護実践の展開における課題が明らかになり、今後の学び方に影響する到達度であった。来年度も、同様の指導方法を継続し、事例と統合して思考の整理ができ、主体的な学習につながる支援を強化していく。

## 老年疾病特論

### 1 年次後期

濱中良志、工藤欣邦、一万田正彦、財前博文、竹下泰、甲原芳範、小寺隆元、塩月成則、木村成志

NPとしてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病および継続医療における臨床評価について学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

## 老年臨床薬理学特論

### 1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、田中遼大

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。

一度提示した処方や注意点については理解できるが、現象を一般化して、多様な条件で判断することに到達しておらず、臨床薬理学という視点での学習内容の習得状況は不十分である受講者が散見された。今年度も履修者全員が単位取得するに至らなかった。次年度以降、より本質的に理解ができるよう、講義の復習を求めるとともに、講義内容の調整が必要と言える。

## 老年診察診断学特論

### 1 年次後期

濱中良志、岩波栄逸、加隈哲也、上田徹、工藤欣邦、糸永一朗、阿部航、安藤優、中村雄介、中村朋子

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって専門医師による講義、演習を行った。

## 老年アセスメント学演習

2 年次前期

甲斐博美、小野美喜、甲斐誠司、立川洋一、濱中良志、宮川ミカ、森加苗愛

老年期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開し7名が履修した。演習では、慢性疾患や症状を伴う高齢者（成人を含む）の事例を通して臨床推論能力を身に着ける為、情報を整理しアセスメントを行い、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。事例のプレゼンテーションを通じ、基礎知識や求められる能力の確認を行い、実際に近い医療面接の場面の演習により対象者のイメージをアセスメント能力の強化につながり、NP の修了生からの指導によりマネジメントに必要な能力の促進ができた。同時期に履修する老年薬理学演習とともにアセスメント能力の強化につなげた。今後も臨床に近い形での演習を組み込んでいく。

## 老年薬理学演習

2 年次前期

甲斐博美、小野剛志、小寺高元、塩月成則

老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を獲得するために、事例によるシミュレーションを通じて学んだ。症例を通じて、病態の理解や検査や処方判断、治療マネジメントも含めた薬理学の習得をディスカッションによる演習で強化した。1 事例に対し複数名の履修生がプレゼンテーションすることにより、事例をより深めて学ぶことに繋がった。演習の課題は特定行為に係る内容も多く含まれ、同時に履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で学習の到達度をあげている。実習につながるようより実践的な学び方を考えていきたい。

## 老年実践演習

2 年次前期後半

甲斐博美、恵谷玲央、大嶋佐智子、小野美喜、迫秀則、佐藤博、竹内山水、田村委子、中村雄介、古川雅英、藤谷悦子、古川雅英、山本真

老年期の対象者への看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。

老年 NP に必要な医療行為を習得するために専門医の指導の下で NP 修了生と共に演習を実施し、老年 NP 実習につながるようにした。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにし

た。今後は、実際の演習だけでなく遠隔による指導も取り入れた多様な学び方を考えていく。

## 老年 NP 実習 I

2 年次前期

甲斐博美、大嶋佐智子、小野美喜、濱中良志、森加苗愛

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的に NP 実習を展開した。今年度は病院施設 10 週間（老年 NP 実習 I）、診療所 4 週間（老年 NP 実習 II）、老健施設 2 週間（老年 NP 実習 III）の 14 週間で構成した。老年 NP 実習 I は病院実習で基本的な診療を学んだ。1 施設 1～2 名の学生配置で 7 名の学生が履修し、5 名が単位取得した。医師、NP、大学教員ともほぼマンツーマンでの指導体制とした。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、修了生（NP）、大学側との合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解、評価を共有し大学と各施設との連携を図った。臨床実習では特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力強化の指導を強化した。NP に必要な 7 つの能力を客観的に評価できる様式を活用し、適宜、自己の課題を意識できる機会を持つように活用した。医療スタッフとの連携・協働の実践を強化し、看護実践能力の更なる強化と NP に必要な 7 つの能力を伸ばしていくことが引き続きの課題である。

## 老年 NP 実習 II

2 年次後期

甲斐博美、大嶋佐智子、小野美喜、濱中良志、森加苗愛

外来にて軽微な症状の初期診療、慢性疾患の診療について学び、指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ことをねらいとし、4 週間の診療所実習を 5 名が履修した。指導の元で医療面接や身体診察などを実施し、在宅での継続療養中の患者に対する包括的アセスメントを学んだ。在宅療養患者の理解は強化ができたが、学生が指導医や臨床のスタッフとチーム医療の中で学ぶ姿勢を強化することが求められた。今後の課題とする。

## 老年 NP 実習 III

2 年次後期

甲斐博美、大嶋佐智子、小野美喜、濱中良志、森加苗愛

入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護的治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。5 名の学生が履修した。2 週間の老人保健施設での実習において、担当となる対象者やご家族に対しての看護的治療マネジメント、医療

面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。病院での実習（8週間の老年 NP 実習 I）を終え、臨床推論の能力やチームマネジメント能力の獲得を目指した。学生のこれまでの教育・就業背景の違いを考慮して、在宅分野の看護実践能力を強化していくことが引き続きの課題である。

## 老年 NP 探求セミナー

2 年次後期

小野美喜、甲斐博美、濱中良志、森加苗愛

老年 NP コース 5 名が履修した。老年 NP 実習で担当した症例を振り返り、NP としての包括的アセスメントや看護治療的マネジメントを再検討することを目的に個人のワークとグループディスカッションを組み入れて実施した。また未習熟の特定行為についてスキルトレーニングを行った。個々の学生のトレーニングの習熟度を上げていくことが課題である。

## NP 論

1 年次前期

小野美喜、高野政子、田村委子、藤内美保、廣瀬福美、光根美保、村嶋幸代

NP コースの必須科目として NP の役割、現状について考えるとともに、チーム医療の中で活動するための医療安全や手順書作成についてワークを実施した。また海外 NP の活動を学び、日本の NP 制度化の動向について理解を深めるとともに最新の情報を共有できた。今後も NP の基本的な考え方を伝え考える科目として組み立てていく。

## フィジカルアセスメント学特論

1 年次前期

藤内美保、石田佳代子、濱中良志

クライアントの包括的・全身的な健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように、試験は中間試験と総合試験を実施し、それぞれ筆記試験および OSCE を行った。学生個々のキャリアの違いにより、学習到達度も異なるが、まずは基本的知識・技術の徹底した修得が必要であると考えており、学生の主体的な学修を促す教授方法の検討が必要である。



## 小児 NP 特論

### 1 年次後期

高野政子、草野淳子、式田由美子、佐々木真理子、黒木雪江、菅谷愛美

講義は EBN に基づいたケアを展開できる実践能力を高めるために、小児の成長発達と発達課題を基本的・理論的に理解し、NP（診療看護師）としての看護実践する探究的な視座を持つことを目的として行った。臨床実践で小児を対象に活躍している糖尿病認定看護師、小児 NP、小児の訪問看護を行う訪問看護認定看護管理者などを含む 6 名がオムニバス形式で実施した。

小児 NP の役割については、NP2 名と学生 2 名、教員 2 名で意見交換して、日本版小児 NP として、今後の自己像をイメージする上での課題についても学ぶことができていた。次年度は、学生に事例レポートを課して、最後の討論を深めることでより学びを深めることが必要と考える。

## 小児疾病特論

### 1 年次前期

高野政子、大野拓郎、岩松浩子、糸長伸能、佐藤圭右、福永拙、清田晃生、久我修二、井上真紀

小児に適切なプライマリケアを提供するために、小児期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。実際に臨地で NP 実習を指導した経験のある医師および地域の医療機関で小児の診療を行っている各専門領域に詳しい医師がオムニバス形式で講義した。特定行為に関連した内容を期待することには限界があるので、学生に自己学習で深める必要がある。最後に筆記試験を行い評価した。

## 小児臨床薬理学特論

### 1 年次前期

高野政子、吉田成一、松本康弘

講義は、医薬品についての知識として必要な薬理学の概要や薬物動態など基礎的な薬理学総論を老年 NP コースと共通コマとして学び、後半は小児疾患に対する薬物療法を理解し、小児の薬用量、服薬指導など知識を学んだ。特に、小児に多い発熱、下痢や腹痛、アレルギー等の疾患の治療に用いる医薬品の作用、副作用、相互作用などを理解し、小児の特殊性に焦点を当てて講義した。最後に筆記試験を行い評価した。

## 小児診察診断学特論

### 1 年次前期

高野政子、江口春彦、別府幹庸、井原健二、前田知己、岡成和夫、大野拓郎、佐藤圭右、長濱明日香

小児の臨床における診察や診断における臨床推論能力を身につけるために、小児の全身的な臓器・器官系ごと必須の知識や技術について理解することを目的に行った。実際に臨地で NP 実習を指導した経験のある医師および地域の医療機関で小児の診療を行っている各専門領域に詳しい医師がオムニバス形式で講義した。学生は自己学習で深める必要がある。最後に筆記試験を行い評価した。

## 広域看護学概論

### 1 年次

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

地域保健領域で活用可能な個人レベル・集団レベル・地域レベルの理論について、学生がプレゼンテーションを行い、討議を重ねながら複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

## 地域保健特論

### 1 年次

赤星琴美、大津孝彦、川崎涼子、久澄千里、清水久美恵、鈴木由美

地域で生活する個人・家族・集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。母子保健活動は県および市の保健師を招いて現在の母子保健活動の実際と課題について討議した。さらに、歯科保健の取り組みについても県の担当者による実践を教授し、現在の課題を理解できるようにした。学生が最新の情報や課題を理解し、今後の展開を検討できるよう討議を含む講義とした。受講生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

## 産業保健特論

### 1 年次後期

川崎涼子、高波利恵、吉田愛

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割、具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論およびモデルを用いて教授した。

企業で働く保健師を招き、職域における保健師活動の現状と課題について実際の活動事例を示しながらディスカッションを含めた講義を行った。

## 学校保健特論

### 2 年次

赤星琴美、小野治子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的方法について教授した。

現在の学校が抱えている健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況を教授した。

さらに最新の文献を用い、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健の連携や組織的な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。

## 健康危機管理論

### 1 年次後期

川崎涼子、赤星琴美、小野治子、甲斐倫明、玉井文洋、本山秀樹

地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する基本的な考え方やリスクマネジメント、保健師活動の展開方法について理解を深めることができるよう、実際の事例を用いた講義を行った。また、健康危機管理における多職種連携について理解を深めるため、県健康危機管理の経験者を講師として招き、地域での健康危機管理の実際や課題、具体的な活動方法について事例を使いながら講義を行った。

また、大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して、トリアージの実際を経験し、大規模災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、実践に即した学習内容を構成した。

## 健康増進技術演習

### 1 年次

関根剛、安部眞佐子、稲垣敦

本講義は、対象者の健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、より効果的な疾病予防・健康増進のための知識と能力を養うことを目的としたものである。疾病予防のためのアプローチとして、運動指導、栄養指導、心理相談という3つの領域を設定し、それぞれ、6回、7回、8回の講義・演習を実施した。

運動指導については、測定（数量化）の重要性、身体活動量・強度の測定、自転車エルゴメーターによる最大酸素摂取量の測定、ストレッチングの効果、講義やエクササイズ・ウォーキングや介護予防運動の実技指導も行った。

栄養指導については、健康日本21の中の食事摂取基準の位置付けと栄養行政の変遷、また各国の栄養指導からみた食事バランスガイドの特性について講義を行った。さらに、各栄養素についての復習、高血圧症、脂質異常症、糖尿病、慢性腎臓病、痛風の食事指導について、および、妊婦・授乳婦、乳児・幼児、高齢者についての栄養特性について演習を行い、学生がパワーポイントにまとめて発表したものにコメントをした。

心理相談については、人間関係学特論と内容が重ならないようにしながら参加者のニーズを含めて講義内容を調整している。今年は、災害時や学校における心理的危機介入技術と医療者の惨事ストレス対策、集団指導技術として構成的エンカウンターグループの理論と指導案作り、研修の企画（目標、構成）と講義スキル、心理検査の作成方法などについて講義と演習を行った。

評価はそれぞれの講師がレポートや演習などを課して、3名の合計による総合的な評価を行った。

## 広域看護アセスメント学演習

### 1 年次前期

川崎涼子、赤星琴美、小野治子、佐藤愛、村嶋幸代、横山光政

地域の健康課題の抽出および評価の方法として地域看護診断の基礎的考え方や方法論を教授した。既存資料の活用や地区視診を行うことで、対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。また、大分県国民健康保険団体連合会の担当者により、国民健康保険データとKDBシステムの理解を深める講義・演習を実施した。さらに、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて地域看護診断演習を行い、2回の中間報告で学生や教員との討議を重ね、実習科目との連動を図った。

## 精神保健学特論

1 年次前期

影山隆之

地域・職域における保健師活動に必要な精神保健の知識や考え方、つまり精神健康のモデルと評価法、事例のアセスメント、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。ただし、広域看護学コースでは昼間開講し、国試必須科目として行政保健師・産業保健師に必要な実践的内容に比重を置き、国試出題範囲の例示にとらわれず実際的な事例を取り上げ、インタビューと事例アセスメント、職場メンタルヘルス活動の実際などについて紹介した。一方、研究者・リカレントコースに対しては夜間開講し、受講者の関心が高いトピックスを加味した。前年度、広域看護学コース学生の一部は地域精神保健に関する準備性が高くないことを確認したので、地域精神保健におけるケースワークについて早い回で取り上げ、具体例を示したことで理解が深まった。今後も同様の組み立てで進めることが適当と考えられる。

## 健康教育特論

1 年次前期

川崎涼子、赤星琴美、小野治子、佐藤愛、高波利恵

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう講義と演習を組み合わせ教授した。また、行動変容理論の活用や、コミュニティオーガニゼーションを用いて個人・集団・組織に教育的に働きかける方策と保健師の地区活動の展開方法について教授した。また、家庭訪問指導や集団に対する健康教育では、一人で企画、指導案の立案、実施デモンストレーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

## 健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、佐藤愛

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と結核事例や感染症事例を用いて演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

## 疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、演習、確認のための小テストを組み合わせることで学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

## 保健統計学

1 年次前期

佐伯圭一郎

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を演習を交えて教授した。

## 疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邊弘己

疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

## 社会保障システム特論

1 年次前期

平野互

保健師の活動に不可欠な知識である社会保障制度について、その意義および理念と構造に対する理解を深めるために講義を構築した。

社会保障の存在理由である生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、諸制度の内容と課題を理解することを目的に、総論として法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷について論じ、次いで各論として、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆

衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度について講義した。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の2回、情報を収集し考察を行うレポートにより行った。

## 保健医療福祉政策論

1年次後期

平野互

保健師の職務に必要な政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の基本的な政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状と課題、障がい論とくに社会モデルの意味と課題、自立支援について講義し、さらに事業評価ならびに地方行政における政策形成については、理解を深めるために、教員自身の経験した実例（保健事業評価、社会福祉事業第三者評価および県条例策定）を基に実務の現実を紹介した。成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

## 疾病予防学特論

1年次前期

赤星琴美、池邊淑子、藤内修二、増井玲子、三浦源太

さまざまな健康レベルにある個人、集団を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、特定健診の検査結果を解釈するために必要な知識、および実践能力を取得できるように教授した。

## 実践薬理学特論

1年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が7名であったため、受講者の学習状況に差が認められた。様々な背景やこれ

までの学修内容の理解レベルを有する学生が履修していることを念頭に講義内容を調整する必要がある。

## 薬剤マネジメント学特論

1 年次

川崎涼子、平川英俊

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、薬剤コンプライアンスの基礎知識を学ぶとともに、ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬剤管理（残薬管理等）と服薬方法などについて実践に繋がる知識が得られるよう教授した。さらに、薬物依存（健康危機状態にある）ハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法、内服方法、効能などについての薬剤指導法（抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮痛剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服薬方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。地域における薬物依存対策や禁煙対策における多職種連携の一つとして地域に拡大する薬局の現状と課題について事例を用いて討議した。

## 環境保健学特論

1 年次後期

甲斐倫明

健康に関する最新のニュースおよび英語原著論文を資料として、健康と物理的要因、化学的要因、生物的要因あるいは社会的要因との関係について基礎を整理した講義を行った。さらに、最新の英語原著論文を学生に割り当て、学生が論文の概要をプレゼンすることで最新論文の現状と課題を理解する方式をとった。プレゼン後の討論を実施し、問題の多面性（自然科学的側面、統計学的側面、社会的側面など）を学生が考えるように努めた。また、社会的側面については、学生の考えを発言する対話形式を導入して行った。

## 地域生活支援実習

1 年次

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、佐藤愛、村嶋幸代

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として県内 7 か所の市町及び保健所において保健師に同行あるいは院生単独で訪問し、実習を行った。6 月から 1 月までの 9 か月間に合計 4 回～8 回の訪問を行い、成果報告会を 2 月 4 日に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行



い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。7名全員が事故なく実習を終了することができた。

## 地域マネジメント実習

### 1年次

川崎涼子、赤星琴美、小野治子、佐藤愛、村嶋幸代

広域看護アセスメント学演習や健康教育特論の演習や発表と連動し実習が効果的に行えるようにした。地域看護診断では、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うこと、地域資源の過不足をアセスメントする力を養うことを目的に実習を展開した。県内6か所の市町において、4週間の合計20日で構成した。7名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

10月1日に実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分支部、大分県福祉保健部医療政策課の方々の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果の共有とともに各市町の健康課題についての意見交換を行った。

## 広域看護活動研究実習

### 1年次後期、2年次前期

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、佐藤愛、村嶋幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体のQOLを向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

広域看護活動研究実習Ⅰでは、県内の保健所および市において、準備期間、まとめ期間を含む5週間実習を行った。7名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習地で現在進行形の課題を実習テーマとして取り組んだ。12月17日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習指導保健師だけでなく、国保連合会、協会けんぽ等からも参加を得て実習成果を共有した。

広域看護活動研究実習Ⅱでは、県内の企業3か所（大分キャノンマテリアル株式会社、旭化成メディカルMT株式会社、株式会社大分銀行）、大分労働衛生管理センターで職域における産業保健実習を行った。また、由布市地域包括支援センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ実習を行った。

## 助産学概論

1 年次前期

梅野貴恵、林猪都子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に取り組む姿勢や助産師のキャリアラダーについて系統的に教授した。授業は、視覚資料を用いた講義形式と学生が事前課題についてプレゼンテーションし、ディスカッションを行う方法をとった。「女性を取り巻く社会の変化、親子関係をめぐる問題」では、養育環境の現状や大分市の子育て支援などを調べ発表した。また『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、妊産婦が望む出産、社会に求められる助産師の役割について自己の助産観を述べ、他者の考えも知る機会とした。

## 周産期特論

1 年次前期

梅野貴恵、飯田浩一、後藤清美、佐藤昌司、豊福一輝、嶺真一郎

講義内容は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、主な疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施した。

## 母子成育支援特論

1 年次前期

梅野貴恵、井上祥明、上野桂子、桑野紀子、佐藤敬子、高野政子、平野互、吉村匠平

女性のライフサイクルにおける不妊や出生前診断、母子関係や家族をめぐる問題、愛着喪失などの心理・社会的問題、虐待や子育てを取り巻く問題、国内外の子育て支援制度など助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。専門性を考慮し、学内外の講師によるオムニバス形式で実施した。子育て体験は、育児体験人形を自宅に持ち帰らせ、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。体験後、夜間に激しく啼泣すると近所迷惑になるなど子育てに不安をもつ母親の気持ちを理解する機会になった。評価は、各講師によるレポート課題等の評価で行った。

## リプロダクティブ・ヘルスト論

### 1 年次前期

梅野貴恵、井上貴史、宇津宮隆史、中村聡、西田欣広、花田克浩、嶺真一郎

講義内容は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。性分化の機序、生殖器に関する形態機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向についても教授された。今年度は、子宮頸がん検診（腔スミアテスト）の方法もモデルを用いて演示された。評価は、筆記試験を実施した。

## ウィメンズヘルスト論

### 1 年次前期

梅野貴恵、市瀬孝道、甲斐倫明、影山隆之、桑野紀子、實崎美奈、林猪都子

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる健康問題を理解し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

## 妊娠期診断技術学特論

### 1 年次前期

安部真紀、梅野貴恵、吉田成一、安部真佐子、小嶋光明、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集に必要な基礎的な知識と、薬理、栄養、放射線障害などの知識と実践の手法を教授した。対象理解がすすむよう事例を用いたシミュレーションを行い、適宜グループディスカッションと事前課題への取り組みから知識の確認を行った。正常逸脱を予防するアセスメントと助産技術の重要性及び妊婦とその家族を取り巻く環境の理解を深めた。

## 分娩期診断技術学特論

### 1 年次前期

樋口幸、安部真紀、生野末子

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的に、講義と事例を用いたシミュレーション演習を取り入れた。それにより臨床での場面をイメージしながら、母児の生命の安

全の確保を第一にし、さらに母親が主体的に分娩に臨み、満足感を得ることができるよう支援するための基本的な助産の実践能力を習得できた。また、講義と演習では段階的に様々な事例を展開することで、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る基本的な知識及び技術を習得できた。次年度以降は、多様化する助産師の活動の場を意識した対象把握の視点と支援の広がりについても取り入れていく必要がある。

## 産褥・新生児期診断技術学特論

### 1 年次前期

樋口幸

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産ケアを実践するための内容を教授した。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU 課題探究実習」の導入とした。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。また、退院後の生活も見据えた退院指導と家庭訪問の充実を目標に、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。母乳育児支援に向けて、学内の乳房モデルや模型を使用し、乳房トラブル予防のためのマッサージ（堤式）方法や授乳指導の演習を取り入れ、実際の事例や場面を想定した演習を行った。学生は積極的に講義、演習に参加し、活発なディスカッションとリフレクションを行うことができ、対象や場面に応じた対応のバリエーションについても考えることができた。次年度も、臨床場面や個別性のある支援のイメージができるように学生に合わせて教材の工夫を行っていく。

## 周産期診断技術演習

### 1 年次

樋口幸、安部真紀、梅野貴恵、佐藤昌司、姫野綾

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。胎児の健康状態の診断については、高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。さらに、CTG 波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティービクス、骨盤矯正や産褥体操など、分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授し実際に体験した。学生は、自分自身の心身と向き合い変化を感じることで、対象者の状態に合わせた保健指導の質の向上について考えること

ができた。また、宗教的背景や早産児等の様々な状況に合わせて柔軟に対応できるよう、母乳育児支援の他に人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加し、習得した技術を実習で活かすことができた。次年度以降も、技術の習得と臨床での応用を意識した構成の検討を行っていく。

## 助産保健指導演習

### 1 年次後期

安部真紀、梅野貴恵、林猪都子、樋口幸、姫野綾

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を実践に応用する思考過程と保健指導案の立案及び実践方法を教授した。小学校における性教育の実践、妊娠期、産褥期及び育児期の保健指導や受胎調整指導の演習とかるがもの会参加を行った。学生自ら創意工夫し教材作成を行い、指導案立案と実践を行った。模擬患者への個別指導と小集団指導を実施し、保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。

## 分娩期実践演習

### 2 年次前期

梅野貴恵、安部真紀、樋口幸、姫野綾

産婦に対する助産実践に必要な基本的分娩介助技術を習得することを主な目的に教授した。講義や VTR、デモンストレーションで一通りの分娩介助技術を指導した。1 年次より分娩介助時の技術に必要な清潔操作などの基礎看護技術の OSCE を終えていることもあり、分娩介助に必要な技術を中心に指導した。学生は練習時から産婦を想定した練習（初産婦、経産婦）を行っており、メンバー間で分娩場面を話し合いながら、夜間、土・日祝日にもよく練習をしていた。知識の評価は筆記試験を行い全員合格した。初回の OSCE で 1 名が不合格となったが、次には合格した。産婦の陣痛発来時の入院対応や分娩第 1 期の胎児心拍数低下事例などを設定したシミュレーションと振り返り学習も実施した。臨床助産師に報告する場面は、学生自身の知識とアセスメント不足に気づく機会となったが、ディスカッションでは全員が発言し知識や技術の獲得に意欲的であった。実習 2～3 週目に帰学日を設け、産婦の主体性を尊重するフリースタイル分娩の方法を教授し全員が体験した。実習終了後の 9 月に会陰裂傷縫合の技術に、デモンストレーションを行い、実演により学びを深める機会とした。

## 助産過程展開演習

1 年次後期

梅野貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシエントを用いて、実践に応用する思考過程を教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦 1 事例、正常経過をたどる分娩期事例 1 例、分娩期ハイリスク事例 1 例の計 3 事例を用いて助産過程の展開を実施した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークを行った。2~3 名ずつのグループで『実践マタニティ診断』の診断指標についてディスカッションし発表した。発表に対して他グループからの質問で思考の確認をすると、これまで学習してきた知識を振り返りながら根拠を述べる努力をしていた。昨年度の振り返りから分娩期の 2 事例は、初期診断だけでなく数時間経過後の状態の情報を途中で追加し初期診断計画の修正や分娩進行中に医療介入（点滴誘発）が実施された場合の診断名、計画の修正を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。評価は、提出されたレポート、発表内容から行った。

## 助産マネジメント論

1 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子、戸高佐枝子

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理について教授した。講義は資料や視聴覚教材を用いて実施し、周産期領域における管理的視点を養う内容とし、講師それぞれの助産師としての専門性を考慮し、オムニバス形式で実施した。特に、産科領域で起こりがちな医療事故や災害時の母子への助産師としてのケアなど、身近な問題をディスカッションした。

## 地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野貴恵、赤星琴美、清水久美恵、鈴木由美

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援について、事例をとおしたディスカッションで理解を深めた。

## 助産マネジメント演習

2年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習とした。周産期母子医療センターへの母体搬送事例 3 事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアについて実習室でシミュレーション学習を行い、ディスカッションし学びを深めた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、シミュレーション学習を行った。さらに、助産院院長が行う日常的な助産院管理全般を経験し学びを深め、自己の課題と将来の目標を明確にし、助産師としてのアイデンティティを述べることができた。

## 助産学統合実習

2年次前期

梅野貴恵、安部真紀、樋口幸、姫野綾

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケア実践能力を養うことを目的に 5 月 27 日から 8 週間と約 2 週間の延長実習および 8 月 23 日まで 1 か月健診の実習を行った。実習施設は、産科診療所 3 施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数は 12 例以上としていたが、平均 10.1 例 (9~12 例) の実施となった。実習 2~3 週目に帰学日をもうけ、分娩期実践演習のフリースタイルや施設の情報共有の場とした。学生個々の学習意欲は高く、実習を重ねるうちにチームで情報共有し協力して実習に臨んでいた。各施設ともに学生の熱心な態度に指導者も温かく受け入れて下さりタイムリーな指導をいただいた。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況に応じた助言をいただいた。後半は、就職試験の学生が実習場を抜けるなどがあったが、チーム内の連携によりスムーズに実習できた。約 2 週間延長したにも関わらず、分娩予定者が少なく、10 例に達しないグループがあったが、全員が納得して実習を終了した。継続事例 3 例を妊娠期から産後 1 か月まで受け持ち、家庭訪問を含む助産実践を行うことで、妊産褥婦個々の問題に寄り添いケアを実践することができていた。全員の実習の目標は達成できた。

## ハイリスク妊産婦ケア実習

2年次前期

梅野貴恵、安部真紀、姫野綾

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を

養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間の実習を行った。臨床指導者や担当教員の指導を受け、受持ち対象者のリスク状況を判断し、母児の安全に配慮し助産過程を展開することができた。一方、家族や受持ち以外の対象者への配慮などハイリスクな対象者が療養する総合周産期母子医療センターのケアの実際を経験し、助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携の重要性について学びを深める機会となり、自己のコミュニケーションの傾向など課題を明らかにすることができた学生もあった。

## 妊娠期課題探究実習

### 1 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、樋口幸、姫野綾

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習としている。10月7日から12月14日の期間に、大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、12月からは、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、国立病院機構別府医療センターに分かれて実習した。1月24日に、前半実習の学びと1月後半からの実習の自己の課題を明確にするために中間報告会を実施した。2月第2週からは6~7月に出産予定の妊婦を継続事例として受持ち健診日に実習した。臨地の産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査20例程度と個別に応じた保健指導の実際12例以上の目標はほぼ到達している（施設により差はあり。）3月3日~3月14日は、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、実習を自粛した。3月16日~実習を再開したが、3月30日から再度、自粛した。

## NICU 課題探究実習

### 1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICUで、2週間ずつ実習を行った。学生1~2名でハイリスク新生児（超低出生体重児）1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。学生11名のうち数名は、消極的な姿勢が目立ち、受持ち児への看護展開を教員や指導者の助言によりやっと実施しているものもあった。NICUに入院中の超低出生体重児の看護や他部門との連携を見学・参加することで、母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整、助産師として妊娠期から果たすべき役割について学ぶ機会となった。



## 地域母子保健演習

2 年次後期

梅野貴恵、鈴木由美、渡邊しおり、別府市保健師

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習とした。大分市・別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、大分市・別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。4 か月児健康診査（大分市は個別健診のため、堀永産婦人科の3 か月児健康診査）、1 歳 6 か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組み、他機関との連携を理解した。特に、4 か月児健康診査では、助産学統合実習での継続を含む受け持ち事例の母子の健診に付き添うことで、家族や地域の人に支えられ成長していく母子への助産師としての役割を認識する機会となった。

## 放射線健康科学演習

2 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

最新の放射線リスクや放射線療法に伴う放射線障害に関する原著論文の抄読を課して論文の解説をプレゼンさせる方式で進めた。さらに、放射線療法に伴う皮膚放射線障害の論文レビューをまとめさせ、学術誌に投稿させた。

## 放射線生物物理演習

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

物理線量として、ガラス線量を用いた線量測定評価を実施し、その仕組みと評価法についての演習で指導を行った。生物線量として、染色体異常を指標にして、染色体異常の組織標本を観察することで、線量測定評価の原理と方法について指導を行い、放射線の健康影響・リスクの基本的指標である吸収線量の概念を教授した。

## メンタルヘルス学特論 I

1 年次前期

影山隆之

研究者・リカレントコースの精神保健学特論と合同で夜間開講とし、地域・職域・学校における

メンタルヘルス活動に必要な精神保健の知識や考え方として、精神健康のモデルと評価法、事例のアセスメント、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。適宜、課題研究のテーマや方法論との関連を意識づけることで、関心と学習意欲を高めることができたので、今後も履修者の事情に応じた柔軟な内容構成にするのがよいと考えられる。

#### 4-3 博士課程(後期)

##### 生命病態学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

学生の興味のある重要疾患の病態生理に関する総説形式のレポートを提出させ、そのレポートを基にして担当教官との質疑応答を通して疾患の病態学を理解させた。

##### 看護基礎科学演習

1～3 年次

甲斐倫明、市瀬孝道、安部眞佐子、稲垣敦、佐伯圭一郎、影山隆之、吉村匠平

各教員から課題提示および講義指導が行われた。学生の研究領域に配慮した課題が提示され、学生は調査分析を行い、各教員に対してプレゼンあるいはレポートによって報告し指導を受けた。

##### 看護管理学特論

1 年次後期

福田広美

看護管理学の理論や最新の研究に関する動向について教授した後に、受講者が看護管理について関心のあるテーマについて文献検索を行い、レポートを作成し関連分野への理解を深めた。

##### 生殖看護学特論

1 年次後期

林猪都子、梅野貴恵

思春期、成熟期、更年期、老年期の各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴と看護問題の中から、学生の研究テーマである「ロールプレイング」について、その教育方法および研究計画について講義、ディスカッションした。

## 放射線健康科学特別演習

3年次

甲斐倫明、小嶋光明

最新の放射線リスクや放射線療法に伴う英語原著論文の抄読を課して論文の解説をプレゼンさせるスタイルを進めた。取り上げた内容は、小児 CT 診断のリスクコミュニケーション、小児がん治療と 2 次がんリスク、オランダの小児 CT 検査とがんリスクの疫学調査。

## 4-4 その他の教育活動

### 4-4-1 CALL 英語学習システム講座

Gerald Shirley, Yume Takano

本年度も例年と同様に前期と後期の2回実施した。年間を通し、全ての学生（1～4年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう、受講希望者を募った。CALLシステムによる学習効果を上げるために、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している（前期：1年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果としてTOEICの平均点数が41点増加し、学習効果がみられた。

また、7月のオープンキャンパスでもCALLシステムや授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうために模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、本講座の理解を深めてもらった。

### 4-4-2 大学生消防応援隊（Oita-NHS-team）

4年次生 向江南歩（リーダー）、吉澤賢成（リーダー）、川島俊介、野々下実、松下紗織

3年次生 武田悠平（サブリーダー）、芦刈章吾、松永駿斗

2年次生 朝見舞、永路彩乃、小島柊子、金子綾菜、木村美紀、菅海咲、玉田光来、辻塚玲、平川杏奈、松谷美紗希、三浦愛未、美濃杏奈、村田美和子、吉松理子

担当教員 石田佳代子

#### 1. 消防応援隊の活動目的

大学生消防応援隊による活動は、大分県が若者の消防に対するイメージアップや消防に対する意識啓発と消防防災組織の育成・支援を図るために実施している「大分県ハイスクール消防クラブ及び大学生消防応援隊の結成・活動支援事業」の一環である。本学の消防応援隊は、平成25年度に大分県生活環境部消防保安室消防班の担当者から結成の打診を受けて同年度の3月に結成された。本学消防応援隊の活動目的は、地域での防災・減災の活動や災害時の活動を学び、地域での防災・減災活動に参加し、看護学生として地域に貢献することである。そのために、消防本部等の関係機関と連携をとりながら消防・防災に関する活動に参加することにより、消防に関する正しい知識、情報及び技術を習得する。

#### 2. 本年度の活動内容

##### 1) オープンキャンパス企画（7月20日、学内）

本学オープンキャンパスの一企画として、消防応援隊ユニフォーム試着、AED体験のコーナーを設け、消防応援隊学生3名とボランティア学生3名の合計6名で本企画を運営した。今年度の来場者数は高校生が30名程度、保護者他が10名程度の合計40名程度であった。

##### 2) 防災訓練における一部の企画・運営（2月17日実施、学内）

本学の防災訓練において、消防応援隊学生全員とボランティア学生 4 名で学生等の避難誘導・学年ごとの点呼（安否確認）・AED の使用訓練を中心に活動した。

3) 「救急の日」の街頭啓発活動（9 月 8 日実施、トキハわさだタウン 1F フェスタ広場）

大分市消防局が主催する「救急の日」の街頭啓発活動に消防応援隊学生 4 名が参加し、啓発用ティッシュ及びリーフレットの配布を救急医療関係者等と一緒にいった。

4) 応急手当普及員講習参加（11 月 2, 3, 4 日、大分市消防局）

大分市消防局が主催する応急手当普及員講習に消防応援隊学生 2 名が参加した。基礎医学（人体の構造、感染防止）と応急手当（AED の使用方法を含む）の実技や指導方法等を学び、応急手当普及員に認定された。

3. 今後の課題など

消防応援隊学生が防災訓練などに積極的に参加することを通して、本学全体の防災意識の向上などにつながっているのではないかと思われる。今後も学内で活動できる機会をより増やせるように取り組んでいく。学外行事への参加については、授業スケジュールの関係上（実習等）、活動可能な期間が限定されるので、早めの日程調整と企画が課題である。消防応援隊としてのスキルの習得も重要なので、消防本部等の関係機関と連携をとりながら進めていけるように、計画的に取り組みたいと考える。

4. 補助金について

令和元年度理事長裁量予算枠事業費 145 千円

## 5 研究室活動

### 5-1 生体科学研究室

#### 1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

#### 2 教育活動の現状と課題

昨年度の課題として、人体の各臓器が神経および血管で繋がっていることを理解していない学生が多いことであった。今年度は、解剖・生理学の講義と病態生理学を組み合わせ、演習を行うことにより、離れている臓器が繋がっていることを理解できるようになった。大学院でのNP教育の解剖生理学・病態生理学の講義において、学習時間の確保が困難で、目標に達しない学生が多くいたことが課題であった。今年度は、一部の学生は勤務先の病院の協力を得て、学部の生体構造論と生体機能論を受講することにより、疾患の病態生理を理解できるようになった。学部学生・大学院生ともに、学力の差が大きいことが課題である。

#### 3 研究活動の現状と課題

昨年度の課題は、4年次生が、卒論のテーマを理解することが困難で研究の進行が遅いことであったが、各指導教官が学生と早めに議論をすることにより、例年より卒業研究がスムーズに行えた。今年度の課題は、外部からの研究費の獲得が少ないことである。

### 5-2 生体反応学研究室

#### 1 活動方針

教育活動に関して、生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な

疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応や免疫反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。生体反応学研究室の研究活動に関しては環境と健康をキーワードとして環境汚染物質の健康影響に関する研究を行い、外部の競争的研究費を獲得して積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

## 2 教育活動の現状と課題

令和元年度は27年度カリキュラムにおける生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：1年次生、生体薬物反応論Ⅰ：2年次生、生体薬物反応論Ⅱ：3年次生の講義と健康科学実験（血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験）を行った。薬理学と微生物免疫論、生体反応学概論と生体反応学各論では講義資料をNekobusサーバに掲載して学生が何時でも使用できるようにしている。学生には、解剖学や生理学と共に、これらの病理学、薬理学、微生物学や免疫学が将来の看護実践を行ううえで十分に学んでおくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考え。しかし、これらの基礎科目（解剖、生理、病理、薬理、微生物、免疫学）の成績は看護系の科目の成績に比べると極めてわるい。生体反応学の科目の殆どは出欠を取らないが、講義の進め方の工夫や講義の欠席者への対処が今後の課題である。

## 3 研究活動の現状と課題

今年度の卒論指導は例年と同様に6名を教員3名で、2人ずつ指導することができた。生体反応学研究室の教員は外部の競争的研究費や学内の競争的研究費を獲得しているものの研究論文数が少ない。研究業績（特に英語論文）は科研費等の競争的研究費獲得にも繋がるため重要である。積極的に英語論文を投稿して競争的研究費を獲得して行くことを目指している。

### 5-3 健康運動学研究室

#### 1 活動方針

健康運動学研究室のスタッフは教授1名である。当研究室の活動方針は以下の4つである：①科学的なものの見方や考え方を学び、個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。②実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感すると共に、健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する。③自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。④ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。

これを実現するため、学部の授業では、看護系の授業や実習を視野に入れ、社会と学生のニーズに配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経



験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

## 2 教育活動の現状と課題

1年次は、健康運動ボランティア演習から始まる。この科目はサービス・ラーニングであり、教育と社会貢献の側面を半分ずつ有する。この科目はいわゆるリベラル・アーツであるから、よい市民の育成を目指している。例えば、無償で人のために働く体験を通して、人間は何のために生きるか、自分はどう生きるかを考えることを期待している。また、地域や社会のために人々と協力して何かをすることで喜びを感じ、人間としてごく自然な暖かい感情を育むこと、地域や社会の構成員としての自覚を確認し、相互に支え合うという意識を醸成することも期待している。このように、社会貢献活動を通して、生きていく上で大切な何かを自分で発見する授業である。このため、学生はボランティア希望調査で担当する3つのボランティアを決め、週末にボランティアを実施して、きづいたこと等をレポートにまとめた。1年次後期の健康運動では、2クラスに分かれ、40名ずつで、ニュースポーツ、障がい者スポーツ、ゲームやヨガを体験した。大学に入学すると身体活動量は低下し、特に一人暮らしになると、食事や休養の量、バランス、リズムが崩れ易い。これにより、体力の低下、ストレス亢進、自律神経活動の低下、肥満が懸念される。また、新たな人間関係の構築も必要になり、これに関連したストレスも生じやすい。そこで、この科目では運動強度と運動量の確保、学生間のコミュニケーションを重視した。具格的には、上手下手の差が出にくいマイナーなチームスポーツを選び、練習よりも試合時間を長くし、試合結果を記録させ、毎回ご褒美を出した。

2年次前期の健康運動学では、健康と運動の関連性と運動の効果的な仕方を講義した。ここでは、進化の視点を取り入れて、運動の必要性を理解させた。2年次後期の健康運動学演習では、生涯スポーツにつなげるため、前期の健康運動学での学習を活かして、学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して毎週実施した。そして、効果判定のための目標に合った計測を実施することで、科学の実証性やEBNを意識させた。また、授業時間の初めには、運動継続のために行動変容理論を解説した。2年次の健康科学実験では、自転車エルゴメータによる有酸素パワーの測定を行い、データに基づいて最大酸素摂取量を算出し、呼吸循環器系持久力の自己評価を行った。運動負荷試験を想定し、検者と被験者を体験し、安全性と測定精度について考えた。卒業研究は2名を指導した。研究テーマは、「看護大生の腰痛の実態と生活習慣等との関連性」と「看護大生のストレスと身体活動の関連性」であり、いずれも本学学生の調査を実施し、主体的に研究を実施した。

大学院に関しては、可能な範囲で実習を入れ、体験を通して理解できるように努めた。

課外活動としては、アウトドアサークル、ソフトテニスサークルの顧問を務めた。また、大学共通のME機器室、体育館、健康増進室、テニスコートの機器・器具のメンテナンスや消耗品の管理を担当した。

次年度は、新型コロナウイルス感染予防対策を充分にとって教育を進めながら、教育効果も出してゆくことが最重要課題である。

### 3 研究活動の現状と課題

当研究室の担当科目は年に 360 コマに及ぶが、スタッフは一名だけである。さらに、2018 年より理事、研究科長、看護研究交流センター長、実習センター長、監理官を兼任することになり、これが教員の長時間労働に拍車をかけ、その皺寄せが研究時間や卒論生・院生の指導時間に及んでいる点が問題である。今後は、大学に常勤、または非常勤教員の雇用あるいはそのための予算措置を求めていきたい。

### 4 その他

社会貢献活動としては、看護研究交流センター及び健康運動ボランティア演習の一環として実施している県民の健康・体力チェックや地域での健康教室があり、これ以外に、日本体育測定評価学会常任理事・会長、日本体育学会代議員・測定評価専門分科会代表、大分県スポーツ学会理事長、大分県スポーツナース協議会顧問、大分県介護予防運動機能向上専門部会委員等を務めた。特に、ラグビーワールドカップ 2019 大分大会では、大分県及び大分県ラグビーフットボール協会の要請を受けて、これまで大分県スポーツ学会で養成したスポーツ救護ナース 650 名のうち 100 名以上を救護班に派遣した。また、中高生や一般のスポーツ大会にもスポーツ救護ナースを多数派遣した。

## 5-4 人間関係学研究室

### 1 活動方針

「心豊かな人材の育成」を念頭に活動している。周りの人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。大学院教育においては、院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

### 2 教育活動の現状と課題

集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、人のことに関する基本的な知識の習得、対人援助技術の理解および体験を促す学習環境を構築することを目的として教育活動を展開している。理解が表面的なものにとどまることのないよう、時間外課題を提示し添削して返却する、学習したカウンセリングスキルを実践する機会を提供する、ペアワークなど、事前に構成化されたアクティブラーニングの機会を積極的に取り入れている。学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネ

ジメントの下に主体的に授業に参加する機会が十分に保障されている。

養護教諭養成課程の運営を担当している。非常勤講師との事務連絡、養護実習I、II、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相応の負担が発生している状況である。

### 3 研究活動の現状と課題

研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導（4名）、博士課程の学生（4名）の指導がメインになっている。博士課程の学生を中心とした大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が今年度の課題になる。

## 5-5 環境保健学研究室

### 1 活動方針

環境保健学研究室は、WHO が定義する「Envinmental Health」に沿って「環境」を、物理的要因、化学的要因、生物的要因、および行動に影響を与えるすべての関連要因と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項とその予防対策の考え方についての教育を行っている。一方、放射線教育は本学が開学以来実施してきたが、看護コアカリキュラムの教育項目に明記されたことで、本学の放射線教育モデルが他の看護系大学の参考になることが期待されている。その関係で看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として平成 30 年まで実施し、その後も、引き続き、研究室独自の主催で看護教育者の放射線教育を他大学と連携して進めている。大学院教育では、広域看護学コースの学生を対象に「環境保健学特論」、研究者コースを対象として「放射線保健学特論」を教授している。NP コースの放射線や画像診断教育にも貢献している。

### 2 教育活動の現状と課題

放射線を含む環境保健の教育は、基礎が多分野な内容を含むために、1,2 年生の段階では教育が難しい点がある。基礎的な知識が重要であることを認識するために、社会問題のようなトピックス、例えば携帯電話や加工肉の発がん性が問題となるのはなぜかを、その背後にある様々な学術的な課題を理解させることを目指している。さらに、3 年次の演習「環境疫学・生物学演習」でアクティブに関わる授業は、問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。課題レポート作成の段階でできる限りすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い演習にしていくことを目指している。

### 3 研究活動の現状と課題

放射線研究と環境保健の基礎をテーマに研究を続けている。福島事故や医療における放射線被ばくで問題となるがんリスクについては、環境省の研究費を獲得して、マウスを利用した放射線発がんの仕組みに注目して、線量率効果の知見を国際誌に公表した。さらに、診療放射線技師の社会人である大学院生の指導では、CT 診断やマンモグラフィを対象にした臨床研究を進めている。今後は共同研究の形で行う動物実験研究やマイクロビームを利用した細胞レベルの研究や医療被ばくの防護に関する研究を引き続けて進め、放射線がんのリスク研究と放射線保健に関する研究にさらに貢献していく。

## 5-6 健康情報科学研究室

### 1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

### 2 教育活動の現状と課題

前年度に着任した渡邊助手が博士号の取得によって後期より助教に昇任したことにより、大学院科目の分担など従来に戻り、教育活動へ注力できるようになり、具体的な改善について検討が進展した。また、卒論指導についても昨年度のような人員不足による困難は生じなかった。渡邊助教が学部および大学院における統計学教育 1 年間の経験を踏まえ、学部における演習と組み合わせた教育内容の精選、大学院における統計学テキストの変更などを決定した。次年度にこれらの取り組みを実践し、効果を検討していきたい。

### 3 研究活動の現状と課題

研究室メンバーそれぞれが、これまでの研究テーマを順調に継続するとともに、佐伯・品川については科研費による研究を複数進めている。渡邊助教については、これまでの専門分野以外に、看護系との連携した研究課題も検討している段階である。

メンバーそれぞれの研究活動はおおむね順調といえるが、個別の研究活動が活発であったため、これまでも課題として示した、研究室メンバーが連携した新しい研究テーマについて、さほど進展が無

かった点は継続的に取り組むべき課題であろう。

## 5-7 言語学研究室

### 1 活動方針

言語活動の四技能である **Speaking, Listening, Reading, Writing** をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるように、CALL (**Computer Assisted Language Learning**: コンピューターを用いたウェブ学習システム) による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

### 2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) を練習する。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (**Food, Shopping, Home, その他**)、2年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について3~4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1年次生前期の授業では、CALL 学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL 学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数 100 万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生 (1~4 年次生、大学院生) が自ら自由に

英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALL システムによる TOEIC 対策のための英語学習、学習期間前後の TOEIC IP 試験を実施している（前期：1 年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組む、結果として学習効果の向上がみられた。

CALL システムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

### 3 研究活動の現状と課題

今年度は、教育活動で取り組んでいる CALL 学習の効果を英語学習に対する態度と動機の視点から分析し、学内アニュアルミーティングで報告した。CALL 受講によって英語教育が必要と考えた学生が大半を占めた。CALL 受講前に TOEIC 得点が高い学生ほど受講によりモチベーションと英語学習への自己評価が増加した。受講前 TOEIC 得点が高い学生は受講により TOEIC 得点の伸びは大きいですが、自己評価が 15%下がる結果が得られた。この結果から、今後の教育に関する示唆が得られた。本研究の結果および卒論生の研究成果についても関連学術誌に投稿するなどして学外へ発信する予定にしている。

## 5-8 基礎看護学研究室

### 1 活動方針

本学建学の精神を遂行すべく配置された今年度の教室員は常勤職員 4 名、非常勤職員 1 名の計 5 名である。年度途中、1 名の非常勤職員の交代はあったが、5 名の職位と年齢構成との関係もよく、それぞれが個性を生かしながら、お互いが持っていない部分を補う形でバランスを取って、4 年間で看護師教育の充実を教室員全員の共通目標にして職務に励んでいる。

また大学院に関してはより高度で専門的な看護学とその関連領域の科学を保健・医療・福祉の視点から捉え、より広い知識と見識をもって社会に貢献できる看護の専門職を育てることを目標に教室員が結束して努力している。

### 2 教育活動の現状と課題

本研究室が担当する科目を履修予定の今年度の 1 年次生は 82 名であったが、実習施設の受け入れ開拓や学内演習のグループ編成等にも配慮しながら、効果的な学習ができるように努めた。また卒業

研究においては臨地実習指導等で教室員が不在になる場合にも、不在を補うように全員が卒業研究にも、多くの時間を費やして指導を行った。初期体験実習や基礎看護学実習などの実習要項の再検討などを十分に行い、学生の学習効果を第一義とし、初学者である学生に看護師という専門職について理解させ、将来の進路に対して、より具体的なイメージや方向づけができるように教材の準備や精選に教室員全員で取り組んでいる。今後は、看護学概論や看護理論による学習がどのように実践で活かされているのかを実感できるような臨地実習でのかかわり方、基礎看護技術の原理・原則の理解や、対象への適応を判断する力を効率的に学習できるような人間科学科目との連携が課題である。

### 3 研究活動の現状と課題

研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって鋭意努力を続けて、常に論文投稿を目標にして取り組んでいる。科学研究費だけではなく、その他の外部資金にもできるだけ、応募するように努めている。研究室5名の内、本年度は3名の教室員が科学研究費を取得している。5名それぞれの研究分野は現在、異なっているが、今後、可能な限り、全員が共同研究できるように領域を広げ、関連分野を模索しながら、研究室全体で取り組めるような研究体制にすることが課題である。

### 4 その他

(1)第25回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどい(令和元年6月2日)に参加した。参加学生はボランティアとして、受付や司会補助、患者移動支援、患者家族制作の物品販売等に関わった。多くの学生が参加することで、支部から大いに感謝された。また学生自身、将来看護職に就く者として患者・家族のつどいに参加することの意義や必要性も見い出せていた。

参加学生：1年次生；安部智也、足立はな、小原和華、河尻俊太郎、古城楓、佐野結菜  
4年次生；釘宮百夏

(2)令和元年度全国膠原病友の会大分県支部総会(6月2日 大分県医師会館)にボランティア活動の要請があり1年次生3名の学生とともに参加した。

参加学生：1年次生；久保田真衣、竹野晴奈、松田遥

(3)重症心身障害児と母親の会「医療的ケア児の親子サークル」(令和元年6月9日)に参加した。

参加学生は5名でボランティアとして、受付や司会補助、障害児の移動支援、医療的ケアの見学実施等に関わった。

参加学生：1年次生；甲斐萌香、梶谷希、加藤優、浜田怜海、舟越まりか

(4)重症心身障害児と母親の会「医療的ケア児の親子サークル」(令和元年8月10日)に参加した。

参加学生は5名でボランティアとして、受付や司会補助、障害児の移動支援、医療的ケアの見学実施等に関わった。

参加学生：1年次生；岡歩実、佐藤莉子、竹野晴奈、光吉麻奈実、山本琴乃

(5)第 43 回収穫祭(11 月 3 日、4 日 福祉農場コロニー久住)にボランティア活動の要請があり 1 年次生 20 名の学生とともに 2 日間参加した。

参加学生：

11 月 3 日；岡田純佳、後藤夢那、中川侑紀、永富優々、濱田桃子、藤丸燿暖、古川友理、水野もえ、吉山未来、湯地智香

11 月 4 日；一幡紗彩、奥山紗久来、小野春香、貴戸彩華、楠瀬杏咲、久保田真衣、黒木藍子、蓑津有里佳、山内珠鈴

## 5-9 看護アセスメント学研究室

### 1 活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1 年次、2 年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割があると考えている。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論 I」「看護疾病病態論 II」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論 I」「看護疾病病態論 II」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組み合わせ、知識の習得を段階的に行っていく。事例を通して個人およびグループワークにより看護過程の展開をする。2 週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし専門看護学領域の基盤とする。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント学特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。

### 2 教育活動の現状と課題

学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目はメカニズムが押さえられるように工夫し、筆記試験は過去問による断片的で暗記の知識にならない学習を意図し、試験問題は学生に返却し、毎回新たに試験問題を作成している。試験問題作成については、4 名の教員で



出題内容や難易度などを確認し、不適切問題がないようにしている。ヘルスアセスメントにおいて、新たな試みとして、「フィジカルアセスメント事例演習」を4コマ組み込み、状態が悪化した事例について、必要な情報を考え、収集し、アセスメントする演習を実施した。この演習の教育計画を教員間で何度も繰り返し検討して実施した。学生からの肯定的な意見や改善してほしい意見を参考に、次年度に活かしていく。また、「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開の How to 自体の指導に焦点化されないようにし、理論的根拠や思考のプロセスに関する課題を指導した。演習では、病態関連図の検討について「どこでもシート」を使い、グループ全員がディスカッションしやすいようにすることで、前年度の課題として挙げていた「病態の理解、症状のメカニズムの理解のさらなる強化」という点において効果があったのではないかと考える。一方で、アセスメントシートを記載する時間がとれず希薄な内容にとどまったグループがあり、次年度の課題として改善する。

### 3 研究活動の現状と課題

卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。それぞれの教員が、自己の専門的研究領域で研究を推進している。3名は科学研究費を獲得し、1名は本学の競争的研究費（奨励研究）に採択されているので、それぞれ遂行している。学術集会や論文投稿を行い、積極的に公表していく。

## 5-10 成人・老年看護学研究室

### 1 活動方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護学援助論・老年看護学援助論、成人・老年看護学演習、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、老年看護学実習の各教科を設定している。成人および老年領域の概論は2年次前半に開講し、各発達段階や保健に関すること、理論について学ぶ。さらに成人および老年の援助論では、急性期、回復期、慢性期、終末期や老年特有の疾患や傷害をもつ人への看護を実践する力を養うために、専門的知識の教授とディスカッションやグループワーク等を設け、学生が自ら考えられるような学習方法を展開している。さらに3年次前期には、成人・老年看護学演習において、模擬事例へのケアについて考え学びを深める教材を使い、看護過程の展開を行った。意見交換、発表を通して看護の実践につながる思考を強化できるように取り組んでいる。さらに3年前期から後期かけて実習科目をおき、成人看護、老年看護の学習成果を実践に反映できるように展開している。

また、大学院では老年NPコースを運営し、NP論、老年NP論、老年アセスメント演習、老年薬

理学演習、老年実践演習、老年 NP 実習 I II III の科目を開講している。法的に認められた特定行為研修を含みつつ、ナースプラクティショナー（仮称）の制度化も視野にいたした老年 NP を育成することが目的であり、責任をもった自律性のある実践者としての看護師の育成に取り組んでいる。

## 2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。代表的疾患を持つ対象者の生活と看護を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるように科目を構成し、卒業時の到達目標につなげている。看護の実践の場では、教員からの指導はもとより、学生が経験に応じて主体的にタイムリーに学習する必要がある。その媒体として、ナーシングスキル等の e ラーニングを活用した学習教材の導入をしており、成果を継続的にみていく。大学院では特に遠距離学生が学べる体制づくりが必要であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することが課題であり、次年度はその体制づくりを行う。

## 3 研究活動の現状と課題

成人・老年看護学では、認知症高齢者の看護、糖尿病などの慢性期疾患看護、急性期疾患患者の看護、高齢者の生活行動に着目した研究、NP の成果に関する研究など各教員のテーマによる研究を幅広く行っている。引き続き研究を行い、課題としては国内外での研究成果の公表の機会をつくることである。

### 5-11 小児看護学研究室

#### 1 活動方針

小児看護学の教育活動は、2年次生と3年次生に専門看護学として、対象とする小児に関する小児保健と小児看護の特殊性を理解でき、実習後には小児と家族への関心を深め、隣地で看護実践する能力を身につけることをねらいとしている。そのため、講義では小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、演習では小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学実習では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族の関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができることを教育や指導をしている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。小児看護学研究室の研究活動に関しては、学外や学内の競争的研究費を獲得し、研究論文が積極的に学術雑誌に投稿することを目標にしている。

## 2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、2年次前期に10コマ1単位で行う小児看護学概論と、2年次前期に2単位20コマの小児看護援助論と、15コマの小児看護学演習を行った。2年次前期の概論では、小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。3年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。3年次後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは子どもの成長を支援する大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近の学生は、兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は出席重視を伝えており欠席は少なく意欲的に受講していた。

## 3 研究活動の現状と課題

小児看護学研究室では、小児看護の中でも小児がん看護の研究や、小児保健分野の予防接種関連の研究や、幼児後期の食行動と保護者の食育意識の研究、また、小児在宅医療に関連した医療的ケアの研究を軸に取り組み、学部の4年次生には課題を提案し協働した。令和1年度も各自が取り組んでいる研究を学会発表等で発信した。大学院では、小児NPコースに2名が在籍しているので、2年間で終了できるように指導・教育的介入を継続していく。

## 4 その他

ボランティア活動：糖尿病サマーキャンプ（Young Wing Summer Camp）は、糖尿病をもつ子どもを対象とするキャンプで、学生7名が県内の大分大学、別府女子短期大学等の学生や医師、看護師等と協働して運営に参加した。キャンプの活動は、同じ病気をもつ子どもの仲間づくりや、病気の正しい理解や自信を持たせるという目的がある。学生は5月から、8回の事前ミーティングをもち企画や役割を担い、8月16日～20日まで活動を支援した。教員は1名がキャンプに1日参加して学生を支援した。

### 5-12 母性看護学研究室

#### 1 活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊

娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

## 2 教育活動の現状と課題

母性看護学の講義時間数は平成 27 年度カリキュラムから変更しているため、母性看護学演習に講義内容を含めて知識の定着に努めた。特に母性看護学演習に TBL を取り入れて、妊娠期の異常と産褥期の看護についての項目を強化している。実習前に課題を学生に提示し、学生は学習内容を各自整理してから実習に望むことは継続して実施している。

母性看護学実習は、各施設における分娩や産褥婦、新生児などの経験値が異なるなどの課題があがっていた。令和元年度に、いしい産婦人科医院とサロンリラ・ドーナつ助産院の実習施設を開拓し、次年度は新施設の実習場所の準備や実習要項の作成を予定している。また、2022 年度の新カリキュラムに向けて、講義時期や必要単位数、実習場所等の検討が課題である。

## 3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、女性の健康に関する研究、父性に関する研究、性教育、受胎調節、家族計画に関する研究、乳房ケアや産後ケアに関する研究に取り組んでいる。昨年度から大分中村病院の医師、看護師、理学療法士とともに「産後骨盤底症状に関する調査」の共同研究に取り組んでいる。今年度は妊娠中と産後 1 ヶ月時の尿失禁に関する調査結果について報告した。次年度は産後 1 ヶ月、6 ヶ月、12 ヶ月の縦断調査結果について報告予定である。

### 5-13 助産学研究室

#### 1 活動方針

大学院助産学コースは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーションや体験型の演習、段階的 OSCE を取り入れた技術試験などの教授方法を実施している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、個別面談や他学年を交えた発表や交流の機会を設けディスカッションの場としている。研究活動は、各教員のテーマを深め研究力を高めること及び卒業研究、課題

研究の指導をとおして、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積んでいる。また、アドバンス助産師として CLoCMiP<sup>®</sup> レベルⅢ 認証の更新申請に向けて各自研修を受講している。

## 2 教育活動の現状と課題

大学院助産学コースの助産学専門科目は、主に昼間に教育を実施している。学生は、夜間に共通科目を履修し、1年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があることから課題の重複や体力・健康面の維持なども含めて教員は支援している。段階的 OSCE により、臨地での多重課題に混乱する場面は減少しているが学生個々の対人対応能力や学習量にもよるため、個別に応じた指導を展開している。1年次後期は、臨地実習と課題研究の計画を進める時期であり、個々での取組み状況を確認しながら適宜支援したが、研究倫理・安全委員会への申請が2年次になったものもあった。2年次生は、4月に分娩介助の OSCE を実施したのち、5月から8月にかけて約4か月間の実習を行い、実習目標は概ね達成できた。今年度は、1名が疲労と熱中症で2日間欠席したが、その他の7名は体調を崩すことなく実習できた。7月に就職試験と重なり、待機と学習に追われ焦りもみられる様子があったが、心身のコントロールはよくできておりチームで協力することができていた。昼夜を問わない実習であるため、心身の疲労を含めた体調管理に全教員で引き続き支援していきたい。2年次後期には、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、助産師としてのアイデンティティの基礎を形成することできた。課題研究は指導を受けながらまとめ、全員提出し成果を報告した。今後、関連学会等に投稿や発表する予定であるため引き続き支援していく。今後は、現在実施している段階的 OSCE の評価とともに、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながら、引き続き教育内容を修正し、改正カリキュラムに向けて全体を見直していく予定である。

## 3 研究活動の現状と課題

学内外の研究費を獲得し各自の課題を探究し続けており、関連学会で発表もしくは学会誌に投稿をしている。樋口助教が博士の学位を取得した。卒業研究は、教員の研究テーマの一部や教員のテーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を指導した。大学院生の特別研究・課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会で発表し成果を残している。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことは継続課題である。

## 4 その他

平成30年度に引き続き、令和2年2月29日に本学講義室と母性・助産実習室において、大分県内産科8施設の助産師16名を対象に、大分県立病院の佐藤副院長を講師に招き妊娠期における助産師能力強化研修「経腹超音波検査」を行う予定で準備をすすめていた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2月26日に中止とした。

## 5-14 精神看護学研究室

### 1 活動方針

学部教育の基本目標は、1)精神科領域だけでなく他のさまざまな場での精神看護、2)対象者の社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や治療的人間関係に留意した看護、及び 4)医療のみならず保健・福祉サービスとの連携を意識した看護について、学生が習得できることである。そのために、講義・演習・実習が一連の流れとして接続するよう、研究室内で連携しながら授業構成をしている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮し、4名の学生を担当した。教員の研究については、それぞれの専門領域を生かしつつ、行政や病院と協働で研究を推進できる体制の構築を図っており、複数の協力フィールドの開拓に向けて働きかけた。

大学院では、精神看護学特論、メンタルヘルス特論、看護政策論、看護コンサルテーション論などを担当している。広域看護学コースの精神看護学特論は、国家試験出題範囲にとらわれず、保健師の地域・職域精神保健活動の実際に必要な内容を扱っている。それ以外の科目は、大学院各コースの共通科目に指定されている単位が多いので、履修者全体の関心とニーズに対応する授業内容を目指している。

### 2 教育活動の現状と課題

学部の教育内容について、国試の出題基準をふまえた見直しを図り、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などに関する例年の内容の中で、防衛機制や法制に関する内容を強化した。学生がイメージできるよう視聴覚教材を多用し、具体的な事例や参考資料を用いながら、アクティブラーニングを実現できるよう努めている。演習では、紙上事例演習の課題をブラッシュアップし、体験的学習、実習施設や家族会・NPOのスタッフによる活動紹介などの基本構成を維持しつつ、続く実習への準備性を高めるようにした。各実習施設と緊密に連絡をとりつつ、病棟実習と障害福祉サービス事業所での実習を前年同様の比重で展開した。卒業研究では、学生の関心・能力と計画の実現性をすり合わせ、卒論完成後も国試に至るまで支援を続けた。

### 3 研究活動の現状と課題

大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働して、自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい者のリハビリテーション、コミュニティでの看護教育、環境心理学等の領域で研究活動を展開した。自殺予防に関しては、大分市・豊後大野市の住民調査データに基づく論文を作成し、投稿中または投稿準備中である。交替勤務者の夜勤時眠気に関する調査論文が掲載され、続報を投稿準備中である。看護師の勤務時の眠気に関しては、新たに科研費を獲得したので、活動量測定機材を購入し、次年度の調査に向けて基礎検討を開始した。コーピング特性簡易評価尺度思春期版の作成に関する論文を公表した。

予防的家庭訪問実習を通じて初年度に学生が学んだことに関する英文論文が、Public Health Journal誌に掲載された。WHOEuro が公表した騒音と健康に関する新ガイドラインの評価に関する検討会（環境省から騒音制御工学会への委託事業）に参加し、睡眠等の心理社会影響に関するレビューを行った。精神科病院と協働して進めている、精神障害者の社会参加に向けたリカバリー支援心理教育（IMR）の効果評価について新たに科研費を獲得できたので調査を継続し、研究成果を学会発表し、論文が掲載された。患者の拘束に関する看護者の意識調査も、日本精神科看護協会の大分県支部推薦を受け、学会で発表し、論文が掲載された。また精神科病院スタッフによる九州精神医療学会における発表を支援した。

#### 4 その他

複数の学会の役員および編集委員として、学術活動に貢献した。また、日本精神科看護協会大分県支部の役員として、県内の精神科看護師への教育や研究の支援を行った。大分アディクションフォーラムの実行委員として、様々なアディクション（嗜癖）問題を抱える当事者や家族の支援を行った。リカバリー支援心理教育（IMR）の普及として、精神科病院デイケア以外に県内の精神科クリニックや就労継続支援 B 型事業所での導入を支援した。

精神看護学の教授法や、臨床における精神看護のトピックについて、学外の研修や学会に参加し情報収集し、教育や研究に活かした。

### 5-15 保健管理学研究室

#### 1 活動方針

学部教育では、学生が看護管理学や在宅看護論等の講義、演習、実習を通して、マネジメントや在宅看護について理解を深める教育を重視した。学生が、地域で生活する在宅療養者や家族に看護を提供できるよう各科目では、学生の主体性を引き出す教育を心がけた。

大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめ、多様なコースの学生へ看護管理学に関する教授を行った。看護管理特論では、学生が、看護管理演習や課題研究を通して、講義で得た知識を活用しながら、演習や研究に取り組み、実際の現場でマネジメントスキルを高められるようにした。

#### 2 教育活動の現状と課題

学部教育の看護管理概論では、学生が実習等の経験を振り返りながら、看護管理についての基礎知識について理解を深められるようにした。在宅看護論では、講義に加え、終末期の事例について演習を行った。学生は終末期をはじめ多様な在宅療養者に対する看護について、ロールプレイを通して学びを深めた。在宅看護論実習では、学生が学内で学んだ内容を応用し、自ら考えて看護を提供できるよう、臨地指導者の協力も得ながら教育を行った。また、大学院教育では、看護管理学に関する多様な理論や組織分析等について実際の事例をもとに教育を行った。学部と大学院の教育について、学生

が、各学年で行われる教育を積み重ね、知識とスキルを高め実践の場で応用できるよう、シミュレーション教育も行っていくことが課題である。

### 3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究については、5名の学生に保健管理学研究室の教育に関連したテーマで研究指導を行い、学生がそれぞれに研究を進めた。今後は学生が研究を通して新たな看護を継続、探求できるよう教育を行う必要がある。大学院の研究では、担当教員が各学生へ指導を行った。各学生は、個々人のテーマに沿って看護管理学および在宅看護学等に関する研究を進め、成果を学会等で発表した。今後は、論文の公表および研究の継続と発展を視野に進められるよう教育を行う。

## 5-16 地域看護学研究室

### 1 活動方針

学部では、看護の対象を個人から集団、地域へと視野を広げ、看護の活動の場を地域に拡大し展開できる看護職の育成をめざしている。地域全体を包括的に捉え、生活の場での看護や生活に目を向けた看護職育成への社会的要請を反映し、すべての看護職者の基礎的知識として「地域看護」の思考を持った看護師を育成する。大学院教育では、少子高齢社会における生涯を通じた健康づくりの支援や、産業・学校を含む地域全体を対象として活動できる保健師の育成をめざしている。また、社会変化に対応し、新人期から困難事例に対応できる能力、新たな取り組みを企画立案できる保健師を育成する。

### 2 教育活動の現状と課題

学部では、4年次前期の地域看護学実習において地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町の既存の資料を基に、地域看護診断を行ってきた。コミュニティ・アセスメントの考え方を活用し、3年次後期の地域生活支援論で実習地のデータにアクセスする演習を取り組み実習と連動した学習を強化した。

大学院の実習では、学生・教員・自治体（企業）が一体となって行っており、テーマ設定の場面から、学生の関心のあるやりたいことと、実習地が直面している「現代進行形の健康課題」などについて打ち合わせを行い、一緒に考え、実習に臨むなどの工夫を凝らして実習テーマを決定している。この形式で6年目となり、初年度に学生がかかわった課題に期間を経て別の学生が取り組む事例が生まれ、保健師がかかわる事業の発展の過程を学ぶことができ、県内の保健師活動の積み上げに学生実習が連動できる可能性がみえてきた。今年度は2年生4名全員が県内で保健師として採用された。県内への保健師採用募集人員と比較した保健師需要には現在の定員数では十分とは言えないが、次年度も県内保健師活動と連動した実習を行い、県内に定着する保健師育成をめざしていくことが必



要である。

### 3 研究活動の現状と課題

学部では、4年次生の卒業論文、大学院生の実習を「日本公衆衛生学会」で発表した。また、「日本公衆衛生看護学会」で全国の大学院修士課程保健師養成の学生との交流会を持つなど、活発に研究活動も行っている。修了生の実習成果において、「保健師教育」での発表を行った。次年度も継続して課題研究や実習の成果を学会発表や雑誌投稿していきたい。

## 5-17 国際看護学研究室

### 1 活動方針

国際看護学研究室は、学部教育では、国際看護学概論（2年次）、国際看護比較論・国際看護学演習（3年次）を担当している。講義・演習では、世界の人々を看護の対象と捉え、1) 地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2) 日本国内でも在留外国人や訪日外国人の増加等により急速に多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア（Transcultural nursing）について学ぶことを目的としている。世界の課題の背景は複雑であるため、保健医療についてだけでなく、歴史や風土、経済的側面など、複眼的な視点を持ってもらえるよう留意している。また、グローバルヘルスの現状と課題に関する最新かつ包括的な情報は、国際機関のホームページ等から得ることができるため、信頼できる情報源から英語で情報を得る力も身に付けられるよう配慮している。

大学院では、国際看護学特論、広域看護学演習等を担当している。グローバルヘルスの基本的な枠組みや視点を伝えるとともに、受講生の研究テーマに沿い、ニーズに対応した内容を目指している。

### 2 教育活動の現状と課題

学部の講義・演習では、看護の対象を日本のみならず世界に広げて考えることができるよう努めている。グローバルヘルスに関する基本的な知識の獲得や、国や地域間の健康格差等の課題について背景を知り考察できることをめざしているが、身近な問題と感じづらい内容もあり、興味を維持しながら学んでもらえるよう工夫が必要である。

講義と演習が効果的につながり、相乗効果が得られるようさらに効果的な組み立てを考えること、卒業後の実践にも役立つ内容となるよう教授内容を工夫する必要がある。

### 3 研究活動の現状と課題

多文化看護に関する内容とグローバルヘルスの課題に関する内容を中心に研究を続けている。学

部生の卒業研究では、3名の学生が所属し、看護学生が国際交流に参加することの効果、訪日外国人観光客の温泉利用のリスク、FGM/FGCに関する英語文献研究を行い、成果を得た。また、学内競争的研究費（先端研究）を獲得し研究に取り組んだ。

今後は、卒業研究については単年度の研究のみでなく、研究室として学生と共に継続的に続ける研究や、海外姉妹校・MOU締結校との共同研究にも取り組みたい。

#### 4 その他

大分県国際交流プラザ、JICA デスク大分から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。若葉祭では JICA デスク大分と共同で『SDGs について学ぼう』を企画・運営した。昨年 8 月から日本人教員 2 名体制となり、1 年半が経過した。それぞれの研究テーマを深め、国内外の学会等で発表していくことを目指している。

## 6 研究助成・事業助成等

### 6-1 研究助成

#### 6-1-1 日本科学振興会科学研究費助成事業（科研費）

##### 石田佳代子

災害時における「黒エリア」での対応に向けた実践モデル的教材の開発. 基盤研究(C). (代表)

##### 市瀬孝道

東アジア沙漠地帯における黄砂バイオエアロゾルの発生過程とその越境輸送ルートの解明. 基盤研究(A). (海外学術調査) (分担)

##### 伊東朋子、品川佳満

NIRS を用いた ALS 患者の認知レベルの評価とコミュニケーション支援を目指して. 基盤研究(C). (代表)

##### 恵谷玲央

動物 X 線 CT による頭部及び全身照射がマウス造血幹細胞の変異に与える経時変化の比較. 若手研究. (代表)

##### 小野美喜

看護師の裁量範囲の拡大により生じる倫理的問題と倫理教育のあり方に関する研究. 基盤研究(C). (代表)

##### 甲斐倫明

頻回小児 CT 診断の検査理由と放射線被ばくの継時的分析による脳腫瘍罹患との関係. 基盤研究(C). (代表)

WAZA-ARI(CT 検査に伴う被ばく線量を計算するシステム)に関する研究. 基盤研究(C). (分担)

##### 影山隆之

病院看護師における夜勤時の眠気と先行睡眠・勤務時間・身体活動との関連. 基盤研究(C). (代表)

##### 草野淳子、高野政子、足立綾

在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討. 基盤研究(C). (代表)

#### 佐伯圭一郎

量的な看護研究における統計手法利用の現状分析と報告のためのガイドラインの提案. 基盤研究(C). (代表)

看護学生のシビリティ (civility) を育むアクションリサーチ. 基盤研究(C). (分担)

#### 定金香里

除菌成分塩化ベンザルコニウムの低濃度吸入曝露がアレルギーに及ぼす影響. 基盤研究(C). (代表)

#### 佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の介入の試み. 若手研究. (代表)

#### 品川佳満

高校までの連続性と現場への連動性をパッケージ化した看護情報倫理教育モデルの開発. 基盤研究(C). (代表)

保育者養成をベースとした妊娠から始まる子ども子育て支援者養成カリキュラムの開発. 基盤研究(C). (分担)

#### 秦さと子

加齢による嚥下機能低下予防のための運動方法の検討. 基盤研究(C). (代表)

嚥下機能評価のための血中および唾液中サブスタンス P 濃度の基準値の検討. 基盤研究(C). (代表)

#### 杉本圭以子

精神科デイケアにおけるリカバリー支援心理教育プログラムの標準的実施の可能性. 若手研究. (代表)

#### 田中佳子

血液透析患者のシャント血流音と狭窄度の関連. 若手研究(B). (代表)

#### 藤内美保、福田広美、山田貴子、田中佳子

高度実践看護師の臨床推論に基づくフィジカルアセスメント継続教育支援プログラム. 基盤研究(C). (代表)

#### 樋口幸

予防的スキンケアのための画像解析による新生児の皮膚評価ツールの開発. 基盤研究(C). (代表)

#### 福田広美、村嶋幸代

ピアサポートによる中小規模事業所の看護管理者能力開発と地域ネットワーク推進の研究. 基盤

研究(B). (代表)

#### 森加苗愛

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の検証. 若手研究. (代表)

#### 山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発－新卒訪問看護師教育の開発に向けて－. 若手研究. (代表)

#### 吉田成一

PM2.5 構成成分の複合胎仔期曝露による出生仔雄性生殖系・免疫系に及ぼす影響. 基盤研究(B). (代表)

### 6-1-2 その他の研究助成

#### 市瀬孝道、吉田成一、定金香里

環境中微粒子の体内、細胞内動態、生体・免疫応答機序の解明と外因的、内因的健康影響決定要因、分子の同定. 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業 (CREST) 研究補助金 (分担)

#### 岩崎香子

機能性食品因子の摂取による CKD 骨病変発症予防の可能性. 日本腎臓財団公募助成 腎不全病態研究 (代表)

#### 小嶋光明

放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 放射線災害・医科学研究拠点共同研究

#### 小野美喜

おおいたの地域医療の課題とナースプラクティショナーの可能性. 大学等による「おおいた創生」推進協議会 令和元年度地域活性化事業

#### 樋口幸、吉田成一

微酸性電解水を用いたディスプレイの開発. 鳥繁産業株式会社 受託研究費. (代表/分担)

#### 福田広美

大分県中小規模病院等看護管理者支援事業 令和元年度大分県地域医療介護総合確保基金

## 堀裕子

原子力発電所 UPZ 内の教職員における放射線リスク認知調査  
長崎大学 原爆後障害医療研究所 研究費申請獲得金  
井上満治医学研究奨励基金

### 6-1-3 学内の競争的研究資金

#### 安部真紀、吉田成一、樋口幸

妊娠中の葉酸長期摂取がマウス胎仔発育に与える影響. 奨励研究

#### 岩崎香子

TGF- $\beta$  による骨細胞機能変化と CKD-MBD 病態への関与. 先端研究  
食事性フラボノイドの積極的摂取による CKD 骨脆弱性発症予防の可能性. 先端研究

#### 小嶋光明

マイクロビームを用いた放射線に対する細胞集団の応答～照射面積の違いによる DNA 損傷応答  
の変化とそのメカニズム～. 先端研究

#### 桑野紀子、丸山加菜、篠原彩

別府市における外国人患者来院時の診療所のニーズと期待される支援. 先端研究

#### 篠原彩、川崎涼子、桑野紀子

在留外国人女性技能実習生が経験する体調の変化. 奨励研究

#### 姫野綾、梅野貴恵、樋口幸、安部真紀

アドバンス助産師認証者の助産活動に対する想い. 奨励研究

#### 吉田成一

加熱式タバコ気化蒸気による免疫細胞に対する影響と気化蒸気中の成分との関係. 先端研究

### 6-2 事業助成

本年度実績なし

### 6-3 外部研究者受入れ

本年度実績なし

## 7 研究業績

### 7-1 著書

安部眞佐子：栄養に関する基礎知識. 太田百合子、堤ちはる（編著），子どもの食と栄養. pp22-36, 羊土社, 東京, 2019.

岩崎香子：ヒト骨生検からわかる骨形態計測と骨代謝動態 i. 栄養と骨組織. 遠藤直人（監修）, 山本智章, 平野徹, 田中伸哉（編集）, 骨形態計測からヒトの骨組織を見る、知る、学ぶ. pp83-87, ウィネット出版, 新潟. 2019.

戸田芳雄, 相部保美, 鮎沢衛, 石井卓之, 石山友美, 大友智, 影山隆之, 他：新しい保健 5・6 年. 東京書籍, 東京, 2019.

佐伯圭一郎：回帰分析. 柳井晴夫・緒方裕光（編）, 改定新版 SPSS による統計データ解析—医学・看護学・生物学、心理学の例題による統計学入門. pp126-156, 現代数学社, 京都, 2020.

福田広美, 村嶋幸代：「看護ネット」を核とした看護管理者支援, 大分県, 大分県看護協会, 大分県立看護科学大学による協働の取り組み. 手島恵（編）, 地域密着型病院の看護管理者能力向上指針と実践. pp137-143, 日本看護協会出版会, 東京, 2019.

村嶋幸代：【Ⅰ：基礎編】 第 5 章 保健師と研究 1 実践に不可欠な「研究力」. 新版 保健師業務要覧 第 4 版 2020 年版. pp246-251, 日本看護協会出版会, 東京, 2019.

鈴木由美, 村嶋幸代：【Ⅱ：実践編—地域診断に基づく展開事例—】精神疾患患者への育児支援, 新版 保健師業務要覧 第 4 版 2020 年版. pp369-382, 日本看護協会出版会, 東京, 2019.

吉田成一：大気環境の事典 編集：大気環境学会 朝倉書店 分担

## 7-2 原著論文・査読付総説

高司未由希, 赤星琴美, 梅野貴恵 : 助産師による離島の母親への出産・子育て紫煙のあり方 出産時から産後1か月までの語りから. 母性衛生, 59, 第4号, 906-913, 2019.

峰松恵里, 赤星琴美, 村嶋幸代 : 地区診断を通じた糖尿病予防の介入方法の検討, 保健師教育, 第3巻第1号, 83-89, 2019.

足立綾, 高野政子, 草野淳子 : 慢性疾患がある子どもの予防接種に携わる外来看護師の支援の実態. 日本小児看護学会誌, 29, 51-58, 2020.

Ren Y, Ichinose T, He M, Yoshida S, Nishikawa M, Sun G. : Co-exposure to lipopolysaccharide and desert dust causes exacerbation of ovalbumin-induced allergic lung inflammation in mice via TLR4/MyD88-dependent and -independent pathway. Allergy Asthma Clin Immunol. 2019. Dec 18;15:82.

He M, Ichinose T, Ito T, Toriba A, Yoshida S, Sadakane S, Nishikawa M, Sun G, Shibamoto T. : Investigation of inflammation inducing substances in PM2.5 particles by an elimination method using thermal decomposition. Environ Toxicol. 2019. 34(10):1137-1148

蓮沼英樹, 市瀬孝道, 上田佳代, 小田嶋博, 金谷久美子, 清水厚, 高見昭憲, 竹内文乃, 西脇祐司, 渡部仁成, 橋爪真弘 : 黄砂の健康影響に関する疫学文献レビュー : 2009年-2018年. 日本衛生学会誌. 74.19010. doi: <https://doi.org/10.1265/jjh.19010>. 2019.

Sato T, Otsuka Y, Kikkawa Y, Iwasaki Y, Fukagawa M. : Semiquantitative analysis of virtual histology derived from intravascular ultrasound images at vascular access stenosis. J Vasc Access. 2019, 20: 55-59.

Ojima M, Hirouchi T, Etani R, Ariyoshi K, Fujishima Y, Kai M: Dose-Rate-Dependent PU.1 Inactivation to Develop Acute Myeloid Leukemia in Mice Through Persistent Stem Cell Proliferation After Acute or Chronic Gamma Irradiation. Radiat Res, 192, 612-620, 2019.

Kusano J, Takano M., Adachi A.: Process in which Fathers of Home-Cared Children Acquire Medical Care Nursing Technique. Journal of Nursing & Care, 8(4), 1-5, 2019.

草野淳子, 高野政子, 田ノ上辰吾 : A 県の訪問看護師が小児の訪問看護の経験の有無や経験年数の違いにより不足していると認識している知識・技術. 日本小児看護学会誌, 29, 1-8, 2020.



金城芳秀, 宮里暁乃, 佐伯圭一郎, 西川浩昭, 大城真理子, 李廷秀 : 看護系大学生が認識する教育学習環境のシビリティとインシビリティ : フォーカス・グループインタビューデータの質的分析. 日本看護科学会誌, 39,165-173, <https://doi.org/10.5630/jans.39.165>, 2019.

Sadakane K, Ichinose T, Nishikawa M. : Effects of co-exposure of lipopolysaccharide and  $\beta$ -glucan (Zymosan A) in exacerbating murine allergic asthma associated with Asian sand dust. *Journal of Applied Toxicology*, 39(4), 672-684, 2019 April.

杉本圭以子 : 看護師の精神的健康とセルフコンパッションとの関連についての文献検討. *こころの健康*, 34(2), 40-50, 2019.

Higuchi S, Yoshida S, Minematsu T, Ichinose T : Detection of inflammatory cytokines by skin blotting as an objective measure of neonatal skin problems. *JNSE*, 6 (1) : 33-40, 2019.

Hori H, Orita M, Taira Y, Kudo T, Takamura N : Risk perceptions regarding radiation exposure among Japanese schoolteachers living around the Sendai Nuclear Power Plant after the Fukushima accident. *PloS one* 14(3) e0212917 2019.

宮内信治 : Jane Austen Emma の談話音調の検討 : 直接話法疑問文における下降調が示唆するもの. *英語音声学*, 24, 29-34, 2019.

大森順子, 梅田麻希, 麻原きよみ, 井口理, 蔭山正子, 小西美香子, 渡井いずみ, 田宮菜奈子, 村嶋幸代 : 特別論文 活動展開技法モデル「コミュニティ・アセスメント」の提案: 第6期公衆衛生看護のあり方に関する委員会活動報告. *日本公衆衛生雑誌*, 66(3), 121-128, 2019.

吉村匠平 : 看護学生の認知や感情に焦点を当てた臨地実習適応感の検討. *日本看護学教育学会誌*, 28(2), 39-45, 2019.

Watanabe H., Seo T., Hyodo M.: An estimator of misclassification probability for multi-class Euclidean distance classifier in high-dimensional data, *SUT Journal of Mathematics*, 55(1), 11-23, 2019.

Sugiyama T., Hyodo M., Watanabe H., Tsukada S., Seo T. : Test for equality of generalized variance in high-dimensional and large sample settings, *SUT Journal of Mathematics*, 55(2), 133-148, 2019.

### 7-3 その他の論文等

佐川きよみ, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ3・精神保健領域の事例から①個別支援. 保健師ジャーナル, 75, 514-519, 2019.

佐川きよみ, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ4・精神保健領域の事例から②事業化. 保健師ジャーナル, 75, 610-614, 2019.

池戸啓子, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ5・母子保健分野の事業化事例から. 保健師ジャーナル, 75, 698-704, 2019.

鈴木由里子, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ6・感染症分野の事例から. 保健師ジャーナル, 75, 782-788, 2019.

佐川きよみ, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ7・難病対策における施策化の事例から. 保健師ジャーナル, 75, 866-872, 2019.

池戸啓子, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ8・保健事業の評価から健康づくり事業の展開へ. 保健師ジャーナル, 75, 964-970, 2019.

佐川きよみ, 安齋由貴子, 岸恵美子, 赤星琴美他：公衆衛生看護学の体系を事例で学ぶ9・8050 家族への支援体制づくりの事例から. 保健師ジャーナル, 75, 1056-1062, 2019.

岸恵美子, 赤星琴美, 安齋由貴子他：公衆衛生看護学の体系の活用と公衆衛生看護学の発展に向けて. 保健師ジャーナル, 76, 234-241, 2020.

市瀬孝道：黄砂と花粉症. アレルギーの臨床.40(2)：17-20, 2020.

岩崎香子, 大和英之：尿毒症と骨・骨の力学特性とその評価. 腎と骨代謝, pp29-36, 日本メディカルセンター, 東京. 2019.

梅野貴恵：助産師基礎教育における助産診断の教育の展開. 日本助産診断実践学会誌, 1(2), 33-36, 2019.

小嶋光明：放射線生物の基礎～放射線被ばくによる組織反応と確率的影響を生物学の視点から考える～. 日本放射線公衆安全学会誌, 16, 2019.

小野美喜：多職種協働時代における「看護倫理」の再考. 日本看護倫理学会誌, 11(1), 1-2, 2019.

影山隆之：世界は矛盾しているか？ Sense of coherence と生きる底力. こころの健康, 34(1), 7-15, 2019.

影山隆之：働き方改革と労働者のメンタルヘルス、睡眠について. 睡眠医療, 13, 295-300, 2019.

Iwasaki R, Hirai K, Kageyama T, Satohb T, Fukuda H, Kai H, Makino K, Magilvy K, Murashima S: Supporting elder persons in rural Japanese communities through preventive home visits by nursing students: A qualitative descriptive analysis of students' reports. Public Health Nursing 2019 Mar 7. <https://doi.org/10.1111/phn.12596>

牧野治敏, 中川忠宣, 西村靖史, 鈴木照夫, 定金香里, 水戸貴久, 岩本光生, 鈴木雄清：地域で働くことをテーマにした高等教育機関の協働による初年次教育プログラムの実践. 大分大学高等教育開発センター紀要, 11, 127-134, 2019.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人：看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第1回）医療機関で起きている患者情報の取り扱い事故のパターン. 看護技術, 66(1), 100-103, 2020.

橋本勇人, 品川佳満：看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第2回）個人情報保護に関する法的・社会的責任. 看護技術, 66(2), 204-207, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人：看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第3回）院内でのUSBメモリの紛失. 看護技術, 66(3), 309-311, 2020.

加藤（山名）由希子, 有本梓, 島村珠枝, 村嶋幸代：結核発病ハイリスク集団の特定方法の提案. 保健師・看護師の結核展望, 112号, 45-50, 2019.

森加苗愛：高齢者糖尿病と看護 - 在宅医療・介護連携と高齢者糖尿病看護における看護職者の役割. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 23(1), 2019.

#### 7-4 プロシーディングス

麻生祐華, 後藤成人 : 精神科入院患者の身体合併症に対する看護・他科受診が必要となった事例を通して. 日本精神科看護学術集会誌, 62(1), 228-229, 2019.

後藤成人, 岡崎敬一郎, 足立大作, 河向勝貴, 若林美紀, 伊東宏紀, 山崎悦子, 衛藤龍 : 精神科看護師の暴力を受けた経験が精神疾患患者の隔離早期解除へ与える影響. 日本精神科看護学術集会誌, 62(1), 144-145, 2019.

Higashi D, Nishijima K, Furuya K, Tanaka K, Shin S: Classification of Shunt Murmurs for Diagnosis of Arteriovenous Fistula Stenosis, APSIPA ASC 2018, 665-669, 2019.

#### 7-5 報告書

福田広美, 村嶋幸代 : 平成 30 年度地域医療介護総合確保基金 (医療分) 活用事業 大分県中小規模病院等看護管理者支援事業報告書. 大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会. 2-3

村嶋幸代, 成木弘子, 川崎涼子, 吉岡京子 : 令和元年度「地域保健総合推進事業」市町村保健師の人材育成体制構築支援事業, 厚生労働省, 日本公衆衛生協会

村嶋幸代, 石川貴美子, 大木幸子, 川村尚美, 高橋郁美, 田中由香, 福原円, 三上房枝, 山本光昭, 吉岡京子 : 平成 30 年度 厚生労働省先駆的保健活動交流推進事業 自治体保健師のキャリア形成支援事業 市町村保健師の人材育成体制構築の支援に関する報告書. 公益社団法人 日本看護協会, 41-43

村嶋幸代, 角野文彦, 川上美都江, 西生敏代, 野村陽子, 平野一美, 福田裕子, 佐々木暁子, 野口純子, 本田あゆみ : 地域包括ケアシステムの推進にむけた保健医療福祉の連携強化に関する検討委員会, 日本看護協会, 2019.

## 7-6 学術講演

小野美喜：シンポジウム 日本のナースプラクティショナー（仮称）の将来を考える。愛知医科大学看護学研究科セミナー，愛知県，2019.8.

小野美喜：シンポジウム ナースプラクティショナー（仮称）の制度化に向けた考え方と取り組み 診療看護師の歩みと実績。第5回日本NP学会，東京都，2019.11.

Kai M.：Developments in Radiation Protection in Japan, Post Fukushima: Annual Conference of the Society of Radiological Protection, Scarborough Spa, UK, 12-23, May, 2019.

Kai M.：Cancer risk from CT examinations in children: Institute of Nuclear Energy Research, Atomic Energy Council, R.O.C., Taoyuan City, Taiwan, 2019.8.

Kai M.：Developments in Radiation Protection in Japan, Post Fukushima: Institute of Nuclear Energy Research, Atomic Energy Council, R.O.C., Taoyuan City, Taiwan, 2019.8.

甲斐倫明：大規模原子力事故における人と環境の放射線防護。福島県立医科大学令和元年度フォローアップ研修会，福島市，2019.10.

甲斐倫明：リスク予測と防護のためのLNTモデル—その背景と課題。第59回日本核医学会学術総会・第39回日本核医学技術学会総会定期大会，松山市，2019.11.

影山隆之：世界は矛盾しているか？Sense of Coherence と生きる力。日本精神衛生学会第34回大会，町田，2019.2.

影山隆之：労働と健康—超過勤務および職場ストレス環境との関連。日本睡眠学会第44回定期学術総会，名古屋，2019.6.

影山隆之：ワークショップ「自殺対策ゲートキーパー研修のつくりかた」。日本精神衛生学会第35回大会，別府，2019.12.

藤内美保：基調講演 今を知る！看護師の専門化に向けての動きと期待～特定行為研修修了看護師・認定看護師・専門看護師～。日本看護管理学会例会運営助成事業令和元年度例会 in 山口，山口県，2019.12.

村嶋幸代：拡大する診療看護師(NP)の活躍を支える基盤づくりと方策。第3回九州診療看護師(NP)研究会学術集会，大分市，2019.2.

森加苗愛：大分県立看護科学大学における診療看護師(NP)育成の10年間の歩みと成果. 第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 京都, 2019.5.

## 7-7 学会発表等

渡邊一代, 赤星琴美 : 開業助産師が実践している地域で生活する母子への支援に関する想い. 第 60 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 千葉県, 2019.10.

足立綾, 高野政子 : 乳児の保護者が受けた妊娠期及び産褥期の予防接種教育の実態. 日本小児看護学会第 29 回学術集会, 北海道, 2019.8.

足立綾, 高野政子 : 産科施設における妊産婦を対象とした小児期の予防接種に関する教育の現状. 日本小児看護学会第 29 回学術集会, 北海道, 2019.8.

大塚奈々, 安部真紀, 吉田成一 : 妊娠期の葉酸過剰摂取が雄性出生仔の免疫系に与える影響. フォーラム 2019 : 衛生薬学環境トキシコロジー, 2019.9

安部真紀, 樋口幸 : 妊娠期間の葉酸長期過剰摂取がマウス胎仔発育に与える影響. 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 千葉県, 2019.10.

安部真紀, 草野淳子, 梅野貴恵 : NICU 入院児の家族へ看護職が行っている看護の実態-質問紙調査から. 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 千葉県, 2019.10.

加藤瑛可, 安部真紀, 梅野貴恵, 樋口幸 : 父親に対する出産準備教育プログラムの傾向と課題. 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 千葉県, 2019.10.

Abe.M. Effects of folic acid supplement intake during pregnancy on food allergy onset in female children. European Academy of Allergy and Clinical Immunology 2019, リスボン, 2019.5.

石田佳代子 : 災害時に「黒エリア」を担当する看護師に必要な教育内容の検討—全国の災害拠点病院の看護管理者を対象としたデルファイ調査—. 日本災害看護学会第 21 回年次大会, 北海道, 2019.9.

石田佳代子 : 災害時に「黒エリア」を担当する看護師に必要な教育—全国の災害拠点病院の看護管理者を対象としたデルファイ調査 1 回目の結果より—. 第 25 回日本災害医学会総会・学術集会, 兵庫県, 2020.2.

石丸智子, 西岡綾乃 : 小地域データを用いた A 市の救急搬送動向の現状分析. 第 23 回日本救急医学会九州地方会, 2019.6.

市瀬孝道, 定金香里, 牧輝弥 : 黄砂バイオエアロゾルから分離された 4 種の真菌類のマウス肺におけるアレルギー炎症の比較. 第 60 回大気環境学会年会, 東京, 2019. 9.

市瀬孝道：マウスにおける黄砂と OVA 繰返し共曝露による気道のアレルギー炎症の悪化と免疫寛容の誘導. 第 42 回日本分子生物学会年会.講演要旨集 1AW-90-2, 福岡市, 2019.12.

伊東朋子, 森崎武司：在宅療養中の筋萎縮性側索硬化症患者における光照射が睡眠に及ぼす影響. 第 10 回大分難病研究会, 別府, 2019.7.

岩崎香子, 末延里沙, 一瀬美穂, 濱中良志, 大和英之, 深川雅史, 風間順一郎：軽度鉄濃度低下環境での FGF23 産生. 第 62 回日本腎臓学会学術総会, 愛知県, 2019.6.

Iwasaki Y, Yamato H, Kazama JJ, Fukagawa M. p-cresyl sulfate causes bone fragility by osteocytes apoptosis in CKD bone, American Society of Bone mineral Research 2019 Annual Meeting, Orlando, Florida, USA, 2019.9.

岩崎香子, 大和英之, 深川雅史, 風間順一郎：糖尿病に合併する腎機能低下は骨の粘弾性を低下させる. 第 21 回日本骨粗鬆症学会, 兵庫県, 2019.10.

梅野貴恵, 樋口幸, 姫野綾：妊娠後期女性のエクオール産生能と授乳期女性の産後 1 ヶ月と 3~4 ヶ月の糖・脂質代謝、骨代謝マーカーの変化. 第 33 回日本助産学会学術集会, 福岡, 2019.3.

梅野貴恵, 樋口幸, 安部真紀, 姫野綾：閉経後の健常な女性の骨代謝に対するエクオール摂取の効果に関する検討. 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 浦安市, 2019.10.

羽田野朱音, 梅野貴恵, 大矢七瀬：女子大生のダイエット行動と心身に及ぼす影響に関する認識. 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 浦安市, 2019.10.

榊田志帆, 大矢七瀬, 梅野貴恵：無料クーポン対象女子学生の子宮頸がん検診の受診行動に影響する要因の検討. 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 浦安市, 2019.10.

前田里紗, 梅野貴恵, 大矢七瀬：産後 2~4 か月の母親の災害時を予測した備えや認識の実態—大分市の現状—. 第 16 回大分県母性衛生学会学術集会, 大分市, 2019.11.

Etani R., Ojima M., Miyazaki E., Kai M: Time course of the change in Sfp1/PU.1 gene deletion in populations of hematopoietic cells following X-irradiation. International Congress of Radiation Research 2019, Manchester, 2019.8.

恵谷玲央, 小嶋光明, 宮崎絵美, 甲斐倫明：高線量率高線量照射した C3H マウスの増結系組織における Sfp1 遺伝子欠失の経時的変化の差異. 日本放射線影響学会第 62 回大会, 京都, 2019.11.



恵谷玲央, 児玉百華, 甲斐倫明: 日本における小児 CT 検査で患者が受ける線量の変遷に関する文献的調査. 第 2 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会 (日本保健物理学会第 52 回研究発表会), 宮城, 2019.12.

Ojima M, Hirouchi T, Etani R, Ariyoshi K, Kai M: Dose-Rate-Dependent PU.1 Inactivation to Develop rAML in Mice Through Persistent Stem Cell Proliferation following Acute or Chronic  $\gamma$ -Irradiation. 16th International Congress of Radiation Research (ICRR), Manchester, 2019.8.

小嶋光明, 廣内篤久, 恵谷玲央, 有吉健太郎, 甲斐倫明: 低線量率長期連続照射によるマウス急性骨髄性白血病の起因となる PU.1 遺伝子変異の線量率依存性. 第 62 回日本放射線影響学会, 京都, 2019.11.

小嶋光明, 伊藤敦, 鈴木啓司, 宇佐美徳子, 大原麻希, 甲斐倫明: X 線マイクロビームを用いた不均一な放射線照射が細胞集団全体に及ぼす影響-内部被ばくによる生物影響を考えるための基礎研究-. 第 52 回日本保健物理学会, 福島, 2019. 12.

原光明, 小野美喜: 介護老人保健施設の入所者の発熱に対する診療看護師と一般看護師の協働, 日本 NP 学会第 5 回学術集会, 東京都, 2019.11.

影山隆之: 住民の自殺念慮の関連要因は性・年齢で異なる: A市の住民意識調査から. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.2.

黒岩千翔, 影山隆之: 女性病院看護職者の日勤中の眠気に関連する要因: 個人特性および朝の起床時刻との関連. 日本睡眠学会第 44 回定期学術総会, 名古屋, 2019.6.

影山隆之, 後藤成人: 農村部一般住民における自殺念慮の有症率調査: 「その他無職」群の有症率はなぜ高いか? 第 43 回日本自殺予防学会, 名古屋, 2019.9.

永松ゆきの, 川崎涼子, 桑野紀子: 妊娠届出時の面接で保健師が抱く妊婦への違和感. 第 78 回日本公衆衛生学会, 高知県, 2019.10.

草野淳子, 安部真紀, 梅野貴恵: NICU 入院児の家族へ看護職が行っている看護と困難の実態-自由記述から-. 第 60 回日本母性衛生学会, 千葉県, 2019.10.

草野淳子, 永末はるか, 安部真紀, 梅野貴恵: 不妊症患者への初回受診から検査・終結に至るまでの看護において看護職がジレンマを感じる要因. 第 60 回日本母性衛生学会, 千葉県, 2019.10.

永末はるか, 草野淳子, 安部真紀, 梅野貴恵: 看護職が行う不妊症患者への初回受診から検査・終結

に至るまでの看護の実態. 第 60 回日本母性衛生学会, 千葉県, 2019,10.

富田志織, 草野淳子, 梅野貴恵: 不妊看護における看護職の心理的葛藤を構成する因子の検討. 第 60 回日本母性衛生学会, 千葉県, 2019.10.

草野淳子, 高野政子: 在宅療養児の父親が医療的ケアの技術を獲得するプロセス. 日本小児看護学会 第 29 回学術集会, 北海道, 2019.8.

草野淳子, 高野政子: 医療的ケアが必要な在宅療養児の父親が家庭内での役割を獲得するプロセス. 第 66 回日本小児保健協会学術集会, 東京都, 2019,6.

磯部厚子, 桑野紀子, 芝山江美子, 戸田美幸, 橋本真由美, 山田智恵理: 投稿を推進するために学会と研究委員会ができること —日本国際看護学会で倫理審査を受けるために—. 日本国際看護学会第 3 回学術集会, 神奈川, 2019.9.

仲野水稀, 桑野紀子, 丸山加菜: 日本で出産を経験した在日中国人母親の産後ケアニーズに関する検討 (A study on the postpartum care needs of Chinese mothers who experienced giving birth in Japan) . 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 東京, 2019.10.

Kuwano N., Hwang, Y.H., Kameya M.: Comparative study on the intercultural sensitivity of Japanese and Korean nursing students. The 6<sup>th</sup> international nursing research conference of world academy of nursing science, Osaka, 2020 Feb 29

西川浩昭, 金城芳秀, 佐伯圭一郎, 李廷秀, 宮里暁乃, 大城真理子: インシビリティー評価用調査票作成の試み —学生の認識に焦点を当てて—, 第 84 回日本健康学会総会, 長崎県, 2019.11.

佐伯圭一郎: 看護系学術雑誌における量的研究の現状と執筆ルール, 第 39 回日本看護科学学会学術集会, 石川県, 2019.12.

西川浩昭, 金城芳秀, 佐伯圭一郎, 李廷秀, 宮里暁乃, 大城真理子: 学生による学生のインシビリティー評価尺度開発の試み, 第 39 回日本看護科学学会学術集会, 石川県, 2019.12.

金城芳秀, 西川浩昭, 佐伯圭一郎, 李廷秀, 宮里暁乃, 大城真理子: 学生による教員のインシビリティー評価尺度開発の試み, 第 39 回日本看護科学学会学術集会, 石川県, 2019.12.

定金香里, 市瀬孝道, 牧輝弥: 4 種の黄砂付着子囊菌類と加熱黄砂曝露による肺アレルギー増悪作用の比較. 第 60 回大気環境学会年会, 東京, 2019. 9.

原田こなみ, 佐藤栄治: 障害 (失語症) をもった方が人との関わりの中で前向きな感情を抱いた要因—看護師の役割に着目して—. 日本看護倫理学会第 12 回年次大会, 大阪府, 2019.6.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 高校までの連続性を考慮した看護系大学での情報倫理教育のための情報モラルチェックシートの開発. 第 20 回日本医療情報学会看護学術大会, 東京, 2019.9.

篠原彩, 川崎涼子, 桑野紀子: 大分県内のベトナム人女性議場実習生が経験する体調の変化と対処行動—女性技能実習生 13 名へのインタビュー結果— (Physical and mental changes and coping strategies experienced by Vietnamese female technical intern trainees living in Oita) . 日本国際保健医療学会第 34 回東日本地方会, 青森, 2019.7.

篠原彩, 緒方文子, 影山隆之, 村嶋幸代: 看護学生による予防的家庭訪問実習(第 7 報): 学生の学び、他実習との相互作用. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知, 2019.10.

篠原彩, 川崎涼子: 大分県の外国人技能実習生の動向と技能実習生の健康支援における課題. 日本健康学会第 84 回総会, 長崎県, 2019.11.

杉本圭以子: 精神科デイケア・就労継続支援 B 型事業所における IMR の実践状況—大分県内複数機関への支援を通して—. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 27 回大阪大会, 大阪市, 2019.11.

一丸あゆみ, 高野政子: 幼児後期の咀嚼能力と児の食習慣との関連と保護者の認識. 第 66 回日本小児保健協会学術集会, 東京, 2019.6.

高野政子, 草野淳子, 足立綾: 病院における小児領域の特定行為と特定看護師に関する看護管理者の認識. 日本小児看護学会第 29 回学術集会, 北海道, 2019.8.

高野政子: 咀嚼能力判定ガムを用いた 5 歳児の咀嚼能力と保護者の児の食行動に関する認識. 第 39 回日本看護科学学会, 金沢, 2019.11.

高野政子: 小児がん患児の母親が入院時と原籍校への復学時に経験した困難. 第 17 回日本小児がん看護学会学術集会, 広島, 2019.12.

久保田彩加, 徳丸由布子, 林猪都子: 妊娠期・退院時・産後 1 か月での母乳育児に対する意識の変化と実際 - 初産婦と経産婦の比較 -. 第 60 回日本母性衛生学会, 千葉県, 2019.10.

永松いずみ, 林猪都子: 初産・経産別の妊娠期と産褥期の尿失禁の関係と特徴. 第 60 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 千葉県, 2019.10.

松永知亜紀, 永松いずみ, 林猪都子: 女子看護学生における HPV ワクチン接種の有無による意識の差. 第 60 回母性衛生学会総会・学術集会, 千葉県, 2019.10.

矢野裕之, 濱中良志, 松尾哲孝, 甲斐浩一, 吉岡秀克: 骨芽細胞における長非コード RNA の発現. 第 41 回日本分子生物学会, 福岡県, 2019.12.

西田欣広, 矢野博之, 太田三紀, 北村裕和, 檜原久司, 花田俊勝, 濱中良志:  $\beta$  セクレターゼ欠損マウスにおける発育不良と成長ホルモン関連因子発現解析. 第 41 回日本分子生物学会, 福岡県, 2019.12.

河室奈々, 西田純一, 林猪都子, 永松いずみ, 織田真由美, 渡邊麻衣子: 大分県での妊娠、産褥期における尿失禁に関するアンケート調査. 第 21 回日本女性骨盤底医学会, 愛知県, 2019.7.

後藤麻乃, 林猪都子, 永松いずみ: 出産後の会陰部痛と母児の属性および経日的変化との関係. 第 60 回母性衛生学会総会・学術集会, 千葉県, 2019.10.

藤澤彩花, 林猪都子: 褥婦が就業を継続する要因. 第 60 回母性衛生学会総会・学術集会, 千葉県, 2019.10.

林猪都子: Shared expression of mucin12 in *Ascaris lumbricoides* and the human small intestine. 令和元年度(第 19 回)関西医科大学医学会, 大阪府, 2019.11.

田辺美智子, 竹中愛子, 大戸朋子, 原田千鶴, 福田広美, 村嶋幸代: 大分県豊肥地域の看護ネットワークを基盤とした中小規模病院等看護管理支援事業～スタッフ育成グループの取り組み～. 第 23 回日本看護管理学会学術集会, 新潟県, 2019.8.

副田明美, 竹中愛子, 大戸朋子, 原田千鶴, 福田広美, 村嶋幸代: 大分県豊肥地域の看護ネットワークを基盤とした中小規模病院等看護管理支援事業～次世代の看護管理者育成に取り組んで～. 第 23 回日本看護管理学会学術集会, 新潟県, 2019.8.

渡邊律子, 平松深雪, 竹中愛子, 大戸朋子, 原田千鶴, 福田広美, 村嶋幸代: 大分県豊肥地域の看護ネットワークを基盤とした看護管理の向上にむけた検討会～人材不足の弱みを強みに変えて現場の力を生み出す取り組み～. 第 50 回日本看護学会・看護管理・学術集会, 愛知県, 2019.10.

疋田利恵, 高森洋子, 池田裕美, 福田広美, 村嶋幸代: 保健所を核とする「看護の地域ネットワーク」を活用した看護管理者支援の取り組み. 日本公衆衛生学会第 78 回学会総会, 高知県, 2019.10.

福田広美, 原田千鶴, 村嶋幸代: 大分県中小規模病院等看護管理支援の実践報告. 日本看護研究学会第 24 回九州・沖縄地方会学術集会, 大分県, 2019.11.

高田美聡, 堀裕子, 小野美喜: 手術経験のある高齢者の入院中の行動制限に対する思い. 日本看護倫理学会第 12 回年次大会, 大阪府, 2019.6.

宮内信治: 自由間接話法疑問文における音調選択の検討: 研究ノート. 日本英語音声学会中部支部第 29 回 (最終) 研究大会, 愛知県, 2019.3.

宮内信治: 自由間接話法疑問文における音調の検討: rebound, replay, rethink に着目して. 日本言語音声学会第 1 回大会, 兵庫県, 2019.7.

宮内信治: 自由間接話法での Yes/No 疑問文における音調選択とその効果. 日本実践英語音声学会第 3 回研究大会, 広島県, 2019.10.

森加苗愛: 糖尿病とともにある男性のセクシュアリティの課題と看護ケア糖尿病をもつ男性の課題と看護ケアより豊かな生への支援を目指して. 日本看護倫理学会第 12 回年次大会, 大阪, 2019.6.

森加苗愛, 他 8 名: どうすべき? まず語り合おう! 糖尿病をもつ男性のセクシュアリティの看護に関する困りごと. 日本糖尿病教育・看護学会第 24 回学術集会, 千葉, 2019.9.

熊野真美, 窪岡由佑子, 原光明, 森加苗愛: 診療看護師 (NP) が行う糖尿病看護とは. 日本糖尿病教育・看護学会第 24 回学術集会, 千葉, 2019.9.

Yoshikawa K: Factors associated with self-management that prevent aspiration trouble related to laryngectomy stoma. The 1st International Conference of Nursing, Yogyaka, 2019.7.

吉田成一, 市瀬孝道: PM2.5 と LPS の胎仔期複合曝露による雄性出生仔の免疫系への影響. 第 60 回大気環境学会, 2019.9.

吉田成一, 村木直美, 伊藤剛, 市瀬孝道: PM2.5 由来有機化学物質の胎仔期曝露が雄性出生仔の生殖系に及ぼす影響. フォーラム 2019: 衛生薬学環境トキシコロジー, 2019.9.

吉田成一, 市瀬孝道: 加熱式たばこ気化蒸気の胎児期曝露が雄性出生児の免疫系に与える影響. 第 140 回日本薬学会年会, 2020.3.

Watanabe H., Hyodo M., Seo T.: Inference on high-dimensional mean vectors under alternative hypothesis, DSSV (Data Science, Statistics & Visualization) 2019, Kyoto, 2019.8.

杉山高聖, 兵頭昌, 渡邊弘己, 塚田真一, 瀬尾隆: 高次元大標本枠組みにおける一般化分散の同定性

検定. 2019 年度統計関連学会連合大会, 滋賀県, 2019.9.

古賀直大, 兵頭昌, 渡邊弘己, 杉山高聖: 高次元における共分散行列のトレースの同等性検定. 日本  
計算機統計学会第 33 回シンポジウム, 東京都, 2019.11.

## 7-8 開発・特許等

本年度実績なし

## 7-9 受賞

大分県小児保健協会奨励賞

草野淳子, 高野政子 : 在宅療養児への訪問看護師の介入に対する母親の意識と満足の実態. 日本小児看護学会誌, 27, 91-96, 2018.

看護理工学会奨励賞

Higuchi S, Yoshida S, Minematsu T, Ichinose T : Detection of inflammatory cytokines by skin blotting as an objective measure of neonatal skin problems., 沖縄, 2019.6.

## 8 社会貢献

### 8-1 講演等

#### 石田佳代子

臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編, 平成 31 年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2019.6.  
看護過程, 平成 31 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2019.8.  
フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚), 平成 31 年度看護力再開発講習会, 大分市,  
2019.11.  
看護診断とアセスメント 講義・演習, 平成 31 年度豊後大野市民病院看護師研修会, 豊後大野市,  
2019.7, 2019.8, 2019.9.

#### 岩崎香子

骨形態計測ハンズオンセミナー2019. 日本骨形態計測学会. 北九州市, 2019.7.

#### 梅野貴恵

フィジカルアセスメント～妊娠期～. 令和元年度大分県助産師会第 2 回研修会. 大分市, 2019.7.  
助産師教育課程. 平成 31 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分市, 2019.6.  
第二次性徴と妊娠. 平成 31 年度大分市立三佐小学校「いのちの教育」. 大分市, 2019.10.

#### 小嶋光明

放射線の線量と影響. 放射線教育セミナー. 福島, 2019.9.  
放射線の健康への影響・霧箱の製作と放射線観察. 放射線教育セミナー. 福島, 2019.12.

#### 小野美喜

日本看護倫理学会ワークショップ. 看護倫理教育コーチングライブ: 惹きつけられる看護倫理教育  
を考えよう. 日本看護倫理学会第 12 回年次大会, 大阪府, 2019.6.  
佐久大学教育セミナー. 地域医療のゲートキーパーを目指す診療看護師 (NP) の育成: 実習運営.  
2019.3.  
看護専門職論 看護実践における倫理. 認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修. 大分市,  
2019.5.  
実習指導計画・指導案作成の実際. 大分県看護協会実習指導者講習会. 大分市, 2019.8-9.  
看護倫理の理解 (基礎編). 大分県看護協会. 大分市, 2019.8.  
看護倫理の理解 (実践編). 大分県看護協会. 大分市, 2019.10.  
実習指導者養成短期プログラム. 大分県立病院. 大分市, 2019.8.

#### 甲斐博美

長崎県南高校 SSH 未来デザインスクール. 「大学院看護学研究科看護学専攻 修士課程 (実践者養



成) NP 診療委看護師コース」. 長崎市, 2019.10.

看護師のキャリアアップについて 看護 おおいた 第 111 号 (2019 年 4 月 1 日発行)

### 影山隆之

自殺対策の基本的な知識～地域での支え合い. 豊後大野市理容美容業組合研修会. 豊後大野市, 2019.5.

精神科看護の基礎. 日精看大分県支部第 2 回支部研修会 (初任者研修). 大分市, 2019.5.

職場のメンタルヘルス. 大分県職員令和元年度マネジメント研修, 大分市, 2019.6.

自殺対策はみんなの課題～ゲートキーパーはみんなの役割. 令和元年度宇佐市自殺予防対策強化推進協議会・庁内連絡会専門研修会, 宇佐市, 2019.7.

睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター衛生管理者研修, 大分市, 2019.7.

睡眠と健康管理. 大分産業保健総合支援センター産業医研修, 大分市, 2019.7.

睡眠と健康. 梅林建設安全衛生協力会・労働衛生研修会, 大分市, 2019.9.

大学生の自殺対策の実態. 令和元年度群馬県内大学等メンタルヘルス研究会, 前橋市, 2019.9.

自殺対策ゲートキーパー研修. 玖珠町役場職員向けゲートキーパー養成研修会, 玖珠町, 2019.10.

コーピング特性簡易評価尺度 (BSCP) の開発と応用普及の過程. 令和元年度高知大学 FD 研修会, 高知市, 2019.10.

平時のストレスマネジメントと惨事ストレス対策. 大分県消防学校上級科研修, 由布市, 2019.10.

ワークショップ「SST を使いこなそう」, 大分県立看護科学大学精神看護学研究室・大分県精神保健福祉士協会合同研修会, 大分市, 2019.10.

地域で進める自殺対策とは～あなたが地域・職場でできること. 日出町自殺対策事業ゲートキーパー研修, 日出町, 2019.11.

惨事ストレスについて. 大分県消防学校消防団員幹部教育 (上級幹部科), 由布市, 2019.12.

地域で進める自殺対策とは? あなたが地域・職場でできること. 令和元年度日出町自殺対策ゲートキーパー研修会②. 日出町, 2020.2.

### 草野淳子

令和元年度大分県医療的ケア教員研修会. 大分市, 2019.8.

### 定金香里

色が変わる不思議な花 夏休み子供サイエンス. 大分大学. 大分市, 2019.8.

### 品川佳満

やってみよう看護研究 2 量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2019.7.

### 杉本圭以子

やってみよう看護研究 1 テーマの絞り方から研究開始まで. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2019.5-6.

やってみよう看護研究 3 看護研究のまとめ方とプレゼンテーション. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2019.8.

精神科デイケア利用者へのリカバリー支援プログラム (IMR) による地域生活継続支援. 地域精神フォーラム. 別府市, 2019.3.

## 関根 剛

アイスブレイク. 大分県新採用職員研修 (前期). 大分市, 2019.4.

カウンセリングの理論と実際 (1). 電話相談員養成講座. 大分いのちの電話協会. 大分市, 2019.5.

被害者の心理と相談対応. 山口県警察学校. 山口市, 2019.5.

児童生徒や保護者との信頼関係を築くコミュニケーションの基礎. 大分県教育センター. 大分市, 2019.6.

警察安全相談実務専科教養 対話の基本. 大分県警察学校. 大分市, 2019.6.

犯罪被害者の心理と犯罪被害者支援要領. 大分県警察学校. 大分市, 2019.6.

犯罪被害者支援とは何か・支援の意義. 被害者支援活動員養成講座. 紀の国被害者支援センター. 和歌山市, 2019.6.

カウンセリングスキルの基礎・倫理. 山口被害者支援センター. 山口市, 2019.7.

効果的な相談の聴き方と助言の仕方～傾聴ワークショップ. 人権入門講座 (技術編). 大分県人権同和対策課. 大分市, 2019.7.

新任係長級研修 メンタルヘルス. 大分自治人材育成センター. 大分市, 2019.7.

面接技術. 訪問看護 e ラーニングを活用した訪問看護師養成講習会. 大分県看護協会. 大分市, 2019.7.

カウンセリングの原理と実際. 大分県看護協会「保健師助産師看護師実習指導者講習会」. 大分県看護協会. 大分市, 2019.7.

信頼関係を築くコミュニケーション. 新規採用学校栄養教諭等研修会. 教育庁体育保健課. 大分市, 2019.8.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー養成研修会 (大分市保健所). 大分市, 2019.8.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 九重町ゲートキーパー養成研修会. 九重町, 2019.8.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー養成研修会 (わさだ市民行政センター). 大分市, 2019.8.

効果的な相談の聴き方と助言の仕方～効果的な助言につなげるには～. 大分県隣保館連絡協議会関係職員研修. 別府市, 2019.9.

スーパービジョン. 大分市男女共同参画センター. 大分市, 2019.9.

聴くということ・ロールプレイ. チャイルドライン受け手養成講座. チャイルドライン大分. 大分市, 2019.9.

不祥事の防止～アルコールの不祥事を中心に～. 新規採用職員への不祥事防止研修. 福岡市消防局. 2019.10.

惨事ストレス対策. 消防職員専科教育警防科. 大分県消防学校, 由布市, 2019.11.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 国東市福祉課自殺対策ゲートキーパー養成研修等. 国東市, 2019.12.

スーパービジョン. 大分いのちの電話協会. 大分市, 2019.12.

人材育成(派遣から育成へ). 全国被害者支援ネットワーク. 沖縄市, 2020.2.

臼杵市ゲートキーパー養成研修会. 臼杵市保健所. 臼杵市, 2020.2.

スーパービジョン. 香川被害者支援センター. 高松市, 2020.2.

人材育成(派遣から育成へ). 全国被害者支援ネットワーク. 神戸市, 2020.2.

惨事ストレス対策. 消防職員専科教育救急科. 大分県消防学校. 由布市, 2020.3.

## 高野政子

学校における医療的ケアの現状と対応. 平成31年度大分市養護教諭後期研修会. 2019.4.

「たんの吸引の実施手順及び評価方法」特別支援学校における医療的ケアへの助言. 平成31年度大分県教育委員会主催 第1回医療的ケア看護師研修. 2019.4.

少子化社会における小児看護の重要性. 大分県立臼杵高等学校出前講義. 2019.6.

実習の意義・実習指導者の役割. 令和元年度臨地実習指導者短期教育プログラム. 2019.7.

看護教員の人材育成やマネジメントについて. 令和元年度大分県福祉保健部主催 看護師等養成所教務主任連絡会. 2019.6.

実習の意義・実習指導とは・実習指導者の役割. 令和元年度大分県看護協会主催「人が育つ実習指導」研修. 2019.7.

経管栄養の基礎、たんの吸引や経過栄養の指導上の諸課題とその対応. 令和元年度大分県教育委員会主催 第2回医療的ケア看護師研修. 2019.8.

たんの吸引の基礎、経管栄養の基礎. 令和元年度大分県教育委員会主催特別支援学校教員医療的ケア研修会. 2019.8.

小児看護学. 令和元年度大分県看護協会主催 実習指導者講習会. 2019.9.

ヒヤリハット事例の共有・分析. 令和元年度大分県教育委員会主催 第3回医療的ケア看護師研修. 2019.12.

## 藤内美保

知っておきたい基本的なフィジカルアセスメント. 福岡県医師会看護師卒後研修会. 福岡市, 2019.10.

臨床に役立つフィジカルアセスメント. 大分県看護協会. 大分市, 2019.6.

実習指導案・指導計画. 大分県看護協会実習指導者講習会. 大分市, 2019.8.

専門看護師・認定看護師・特定行為研修を修了した看護師・認定看護管理者の交流会. 大分県立看護看護科学大学における診療看護師(NP)・看護管理リカレントコースの教育. 大分県看護協会. 2019.8.

看護研究. 竹田地区看護研究学会. 竹田市, 2019.7.

看護研究. 豊後大野地域看護研究学会. 豊後大野市, 2019.9.

### 林猪都子

性教育. 児童養護施設森の木職員研修. 2019.9.

### 平野互

ASD 児の未来のために ～専門職に寄せる親の願い～. 大分県 2019 年度発達障がい者支援専門員養成研修初級. 大分市, 2019.6.

憂いは残るが備えよう～保護者にできること、やっておくべきこと. 臼杵支援学校 PTA 講演会. 臼杵市, 2019.12.

障がいのある人もない人も共に心豊かに暮らせるまちづくり. 日田市「市民まちづくり学校」講演会. 日田市, 2019.12.

### 福田広美

ヘルスケアシステム論. 大分県看護協会令和元年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル. 大分市, 2019.8.

統合演習. 大分県看護協会令和元年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル. 大分市, 2019.9.

看護関連法規. 大分県看護協会令和元年度保健師助産師看護師実習指導者講習会研修. 大分市, 2019.7.

中小規模病院等の看護管理者支援を通して創る地域包括ケア. 令和元年度大分県立看護科学大学公開講座. 大分市, 2019.9.

### 堀裕子

“物忘れ”“認知症”わたし達が知っておきたいこと!. よしどめ内科・神経内科クリニック 勉強会. 大分市, 2019.9.

### 村嶋幸代

市町村保健師の人材育成体制の構築支援について. 厚生労働省平成 31 年度保健師中央会議. 厚生労働省. 東京都, 2019.4.

在宅医療の体制整備と保健師の役割. 第 9 回 (通算 45 回) 2019 年度 都医学研 夏のセミナー「難病の地域ケアコース」プログラム. 公益財団法人東京都医学総合研究所. 2019.6.

大学の教育課程. 2019 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分県看護協会. 大分市, 2019.6.

看護管理者が手を繋いで 地域看護力を上げよう!. 滋賀県看護トップマネージャー研修会. 滋賀県看護協会. 滋賀県, 2019.7.

新任期から統括保健師がそれぞれの立場で考える人材育成～日々の保健師活動を通じてお互いに育ちあう環境づくり. 新任期から統括保健師がそれぞれの立場で考える人材育成～日々の保健師活動を通じてお互いに育ちあう環境づくり令和元年度保健師等ブロック別研修会 (関東甲信越ブロック). 山梨県庁. 山梨県, 2019.8.

行政保健師のキャリアラダーに沿った人材育成の推進. 保健師等ブロック別研修会 (九州ブロッ

ク) . 宮崎県庁. 宮崎県, 2019.8.

保健師キャリア形成について考える～保健師として歩いてきた道、これから目指す姿、保健師の技術について語ろう！～.令和元年度第1回保健師研修会. 鹿児島県看護協会. 鹿児島県, 2019.10.

人材育成体制構築における支援のポイント. 全国保健師長会特別企画 「地域に責任を持つ保健師活動：組織的・戦略的に育ちあう仕組みを展開するために、管理期の保健師がどう取り組むべきか考える. 愛媛県庁. 愛媛県, 2020.1.

自治体保健師のキャリア形成を考える-住民が望む保健師と自分自身の夢を重ねる, 自治体保健師のキャリア形成を考える. 島根県中堅期・管理期保健師研修会. 島根県庁. 島根県, 2020.2.

## 森加苗愛

糖尿病に関する集団教育技術.2019 年度徳島文理大学地域連携センター糖尿病看護認定看護師教育課程講義. 徳島市, 2019.5.

看護記録の基礎. 大分県看護協会研修. 大分県, 2019.6.

糖尿病患者及び家族・重要他者への援助方法. 2019 年度徳島文理大学地域連携センター糖尿病看護認定看護師教育課程講義. 徳島市, 2019.7.

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティ～より豊かな生を支える看護を考える～. 第34回奥羽糖尿病教育担当者セミナー講演.青森県, 2019.7.

知っ得2！脂肪がつきにくい身体をつくろう！～おいしい炭水化物との付き合い方～. 令和元年度第1回健康づくり事業講演. 姫島村, 2019.8.

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティ～看護ケアの質の向上を目指して～. 糖尿病療養指導士兵庫県連合会第8回兵庫県糖尿病教育看護研修会. 兵庫県, 2019.8.

長い健康寿命をさらに生き活きと！ぴかぴかの血管になる食習慣のこつ. 令和元年度姫島村健康づくりの集い. 姫島村, 2019.11.

看護研究を始めよう. 大分赤十字病院キャリア開発ラダーレベルⅡ. 大分県, 2020.1.

## 山田貴子

フィジカルアセスメントⅠ 確実に身につくフィジカルアセスメント（呼吸・循環編）. 2019 年度大分県看護協会教育研修. 大分市, 2019.6.

## 吉村匠平

気になる子どもの理解とポジティブ行動支援. 社会福祉法人皆輪会職員研修. 福岡市, 2019.4-10.

勇気づけのコミュニケーション. 大分県立病院実習指導者短期教育プログラム. 大分市, 2019.7.

構成的エンカウンターグループによる集団作り. アルメイダ病院新入職員研修. 大分市, 2019.6-11.

勇気づけのコミュニケーション. アルメイダ病院プリセプター研修. 大分市, 2019.7.

効果的な午睡の取り方について. 大分県安全運転管理講習会. 竹田市, 2019.11.

勇気づけのコミュニケーション. 「人が育つ実習指導」. 大分市, 2019.7.

勇気づけのコミュニケーション. 「人が育つ実習指導」. 日田市, 2019.8.

持っててよかった学校心理士. 学校心理士会大分支部主催公開学習会. 大分市, 2019.10.

## 8-2 非常勤講師

**安部真佐子**

大分大学福祉健康科学部理学療法コース 生化学

**石田佳代子**

中津ファビオラ看護学校

**岩崎香子**

大分大学福祉健康科学部

**梅野貴恵**

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

**恵谷玲央**

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

**小野美喜**

鹿児島大学保健学科 離島看護学

中津ファビオラ看護学校 人間と倫理

**甲斐倫明**

福井大学医学部

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

**影山隆之**

別府大学人間学部 精神保健の課題と支援

別府市医師会看護専門学校 精神看護学概論、精神看護の方法 I

**桑野紀子**

藤華医療技術専門学校 国際社会と看護

**後藤成人**

中津ファビオラ看護学校 看護研究

**定金香里**

大分リハビリテーション専門学校 生理学

COC+協働開発科目

**品川佳満**

別府医療センター附属大分中央看護学校 情報科学、情報科学演習

**関根剛**

大分大学医学部医学科 心理行動科学、導入Ⅱ・自己理解のための心理臨床学入門

大分大学医学部看護学科 臨床心理学

大分医学技術専門学校 心理学

**藤内美保**

広島大学 客員教授

名桜大学大学院

中津ファビオラ看護学校

**樋口幸**

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

**平野互**

大分大学福祉健康科学部

福岡大学法科大学院

**丸山加菜**

中津ファビオラ看護学校 国際看護

**宮内信治**

大分県立芸術文化短期大学 英語Ⅰ

大分大学理工学部 英語Ⅰ、英語Ⅱ

**森加苗愛**

徳島文理大学地域連携センター 糖尿病看護認定看護師教育課程

**吉村匠平**

放送大学非常勤講師（「心理学実験Ⅱ」大分市、6月）

**渡邊弘己**

中津ファビオラ看護学校 情報科学

### 8-3 研究指導

衛藤病院

影山隆之

石丸智子

大分県立病院

草野淳子

佐伯圭一郎

大分医師会立アルメイダ病院

杉本圭以子

関根剛

大分赤十字病院

平野互

森加苗愛

吉村匠平

佐伯豊南地区養護教諭高等学校部会



#### 8-4 学会役員等

##### 岩崎香子

日本骨粗鬆症学会 評議員  
日本 CKD-MBD 研究会 評議員  
ROD21 研究会 幹事  
第 21 回日本骨粗鬆症学会学術集会 プログラム委員

##### 梅野貴恵

大分県母性衛生学会 理事  
日本助産診断実践学会 理事 編集委員  
第 16 回大分県母性衛生学会学術集会 実行委員

##### 恵谷玲央

日本保健物理学会 広報担当委員

##### 小嶋光明

日本放射線影響学会 災害対応委員会委員  
日本放射線影響学会 論文紹介企画小委員会委員  
放射線生物研究会 編集委員会委員

##### 小野美喜

日本看護倫理学会 評議員・理事  
日本看護倫理学会 政策検討委員  
日本看護倫理学会 査読委員

##### 甲斐博美

日本 NP 学会 理事

##### 甲斐倫明

日本学術会議連携 会員  
日本保健物理学会 代表理事（会長）  
日本放射線影響学会 評議員

##### 影山隆之

日本精神衛生学会 理事長  
日本精神衛生学会 編集委員  
日本自殺予防学会 常務理事

日本自殺予防学会 編集委員長  
日本学校メンタルヘルス学会 評議員  
日本学校メンタルヘルス学会 編集委員  
日本産業ストレス学会 評議員  
日本産業衛生学会 編集委員  
日本看護科学学会 編集委員

#### 桑野紀子

日本国際看護学会 理事会研究委員会 評議員  
日本国際看護学会 選挙管理委員会 委員  
International Conference on Nursing (ICONURS) 査読委員

#### 佐伯圭一郎

日本健康学会 評議員 (～11月)  
日本看護科学学会 和文誌編集委員 (～6月)  
日本テスト学会 編集委員 (8月～)

#### 定金香里

日本生理学会 評議員、エドキュケーター  
大気環境学会健康影響分科会 幹事  
大分県理科化学教育懇談会 幹事

#### 高野政子

日本小児看護学会 評議員  
日本小児看護学会 国際交流委員会 委員  
九州沖縄小児看護教育研究会 幹事  
日本小児がん看護学会誌 査読委員  
日本看護科学学会 和文誌専任査読委員  
国立大学法人香川大学 医学部看護学雑誌査読委員

#### 藤内美保

日本 NP 学会 理事

#### 徳丸由布子

大分県母性衛生学会 幹事 (事務局会計担当)

#### 永松いずみ

大分県母性衛生学会 幹事 (事務局庶務担当)

### 林猪都子

大分県母性衛生学会 副会長  
大分県母性衛生学会 事務局長  
大分県母性衛生学会 学術集会実行委員

### 平野互

医療事故防止・患者安全推進学会 理事  
大分県発達障がい研究会 理事

### 堀裕子

一般社団法人日本放射線看護学会 編集委員

### 村嶋幸代

一般社団法人日本看護系学会協議会 監事  
一般社団法人日本NP学会 監事  
一般社団法人日本地域看護学会 監事、代議員  
一般社団法人日本在宅ケア学会 監事、代議員  
公益社団法人日本看護科学学会 監事、代議員

### 森加苗愛

日本糖尿病教育・看護学会 表彰委員会委員  
日本糖尿病教育・看護学会 編集委員会委員  
公益社団法人日本糖尿病協会 編集委員会委員  
慢性看護学会 評議員

### 吉田成一

日本アンドロロジー学会 評議員  
精子形成・精巣毒性研究会 評議員

### 吉村匠平

日本学校心理士会大分支部支部長

### 渡邊弘己

日本計算機統計学会 第34回大会 実行委員

## 8-5 その他委員等

### 安部真紀

一般社団法人大分県助産師会 教育委員

### 伊東朋子

大分県看護協会（学会委員会委員長）

日本 ALS 協会 大分県支部運営委員

### 小嶋光明

大分大学医学部附属病院 治験審査委員会・臨床研究審査委員会委員

### 小野美喜

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 理事

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 NP 資格認定試験委員

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 資格更新制度委員会委員長

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 制度検討委員会委員

社団法人日本看護協会 ナースプラクティショナー（仮称）制度検討委員会委員

大分県立病院 地域医療支援病院運営委員会 委員長

社会医療法人啓和会 大分岡病院特定行為研修管理委員

### 甲斐倫明

放射線影響研究所 科学諮問委員

国際放射線防護委員会(ICRP)主委員会 委員

国際放射線防護委員会(ICRP)Task Group93 座長

原子力規制委員会 放射線審議会 委員

原子力規制委員会 国立研究開発法人審議会 委員

原子力規制委員会 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構部会 部会長

環境省 環境回復検討会委員

環境省環境回復検討会除去土壌の処分に関する検討チーム 座長

人事院安全専門委員会 委員

国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線リスク・防護研究基盤委員会 委員長

国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線防護分野における課題解決型ネットワークとアンブレラ型統合プラットフォームの形成事業代表者会 委員長

大分県防災会議 委員

大分県防災対策推進委員会 原子力災害対策部会 委員

福岡県防災会議原子力部門専門 委員

鳥取県原子力安全 顧問

鹿児島県環境放射線モニタリング技術委員会 委員

#### 影山隆之

大分県自殺対策連絡協議会 副会長  
大分県精神疾患医療連携協議会 委員  
大分県アルコール健康障がい対策推進協議会 委員  
大分県医療ロボット・機器産業協議会看護関連機器開発部会 会長  
大分県環境影響評価技術審査会 委員  
大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 審査委員  
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会 会長  
別府市自殺対策計画策定推進委員会 委員長  
豊後大野市自殺対策連絡協議会 助言者  
日出町自殺対策連絡協議会 委員  
大分市総合計画第2次基本計画検討委員会市民福祉部会 会長  
成田国際空港航空機騒音健康影響調査委員会 委員

#### 草野淳子

大分県教育委員会 大分県立特別支援学校第三者評価委員会委員 2019.5～2020.3

#### 桑野紀子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会 委員長

#### 後藤成人

一般社団法人 日本精神科看護協会 大分県支部 副教育委員長  
大分県アクション（嗜癖）フォーラム実行委員会

#### 佐伯圭一郎

大分県情報公開・個人情報保護審査会 委員

#### 定金香里

大分県環境影響評価技術審査会 委員  
大分県リサイクル認定製品審査会 委員

#### 佐藤愛

大分県公衆衛生協会 評議員

### 関根剛

公益社団法人 全国被害者支援ネットワーク 理事（九州沖縄地区担当）  
公益社団法人 大分被害者支援センター 副理事長  
大分いのちの電話協会 スーパーバイザー  
消防庁 緊急時メンタルサポートチーム メンバー  
大分県こころの緊急支援チーム 運営委員会委員・メンバー  
大分県災害派遣精神医療チーム 運営委員会委員

### 高野政子

大分県医療的ケア連絡協議会 会長  
大分県障害児適正就学指導委員会 委員  
大分県小児在宅医療連絡会 委員  
大分市特別支援教育メディカルサポート事業委託事業者選定委員会 会長  
大分県小児保健協会 理事

### 藤内美保

大分県看護協会 理事  
大分県医療計画策定協議会 委員  
大分県医療費適正化推進協議会 委員  
日本 NP 教育大学院協議会 社員  
大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会 委員  
看護師の特定行為に係る指定研修機関連絡会 幹事施設代表者  
COC+ 教育開発部会 委員

### 永松いずみ

公益社団法人 大分県看護協会 助産師職能委員  
公益社団法人 大分県看護協会 施設担当責任者

### 林猪都子

大学コンソーシアムおおいた 運営委員  
大分県准看護師試験委員  
大分県助産師会 県中地区理事

### 樋口幸

大分市産業活性化プラザ産学官連携推進事業検討委員会委員

## 平野互

大分県自閉症協会 会長  
大分県障がい者差別解消支援地域協議会 委員  
杵築市障がい者差別等事案解決委員会 委員長  
大分県特別支援連携協議会 委員  
大分県立特別支援学校第三者評価委員会 委員  
大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム 委員  
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員  
大分県発達障がい者療育専門員養成研修運営委員会 委員  
大分県立病院治験審査委員会 委員  
九州大学病院 心臓移植外部評価委員

## 福田広美

大分県看護協会認定看護管理者 教育運営委員  
大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会 委員  
大分地方労働審議会 委員  
大分県社会福祉審議会 委員

## 村嶋幸代

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 副会長  
一般社団法人全国保健師教育機関協議会 監事  
一般社団法人日本看護系大学協議会 監事  
大学コンソーシアムおおいた 理事  
健康寿命日本一おおいた創造会議 委員  
大分県医療審議会 委員  
生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員  
大分県国民保護協議会 委員  
大分県公私立学校教育協議会 委員  
大分県石油コンビナート等防災本部員 委員  
野津原地域まちづくりビジョンフォローアップ会議 委員  
大分市国際都市交流親善会議 会員  
おおいたホームタウン推進協議会 会員

## 森加苗愛

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 資格更新委員会委員  
大分県看護協会 教育委員会委員  
糖尿病患者会ウオークラリー委員, 令和元年度国東市民病院糖尿病患者会, 国東市, 2019. 10

**吉田成一**

環境省 光化学オキシダント健康影響評価作業部会 委員

**吉村匠平**

九重町教育支援センターほっとスペース 教育相談員

大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム 委員（大分地区）

大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム 委員（日田地区）



## 9 報道

### 9-1 新聞

入学式（大分合同新聞 4/8）  
大分県民つぶやきリレー（大分合同新聞 4/22）  
地域貢献し採用優遇（大分合同新聞 4/23）  
四重奏（大分合同新聞 4/27）  
看護科学大で学園祭（西日本新聞 5/19）  
産学で医療用除菌水（大分合同新聞 6/2）  
オープンキャンパス（日本経済新聞 7/8）  
命のメッセージ展(大分合同新聞 9/27)  
命のメッセージ展(読売新聞 9/28)  
大学入試センター試験（読売新聞 1/20）  
大学入試センター試験（大分合同新聞 1/20）  
前期入試（大分合同新聞 2/25）  
前期入試（朝日新聞 2/26）  
前期合格発表（大分合同新聞 3/6）  
卒後式中止（大分合同新聞 3/7）  
後期入試（大分合同新聞 3/12）  
後期合格発表（大分合同新聞 3/21）

#### 村嶋幸代

大分合同新聞社「私の紙面批評」 2019.4  
「看護・助産師に向けて」  
大分合同新聞社「私の紙面批評」 2019.7  
「産業振興生み出す看護学」  
大分合同新聞社「私の紙面批評」 2019.9  
「地域のビジョン 取材を」

### 9-2 テレビ・ラジオ・インターネット等

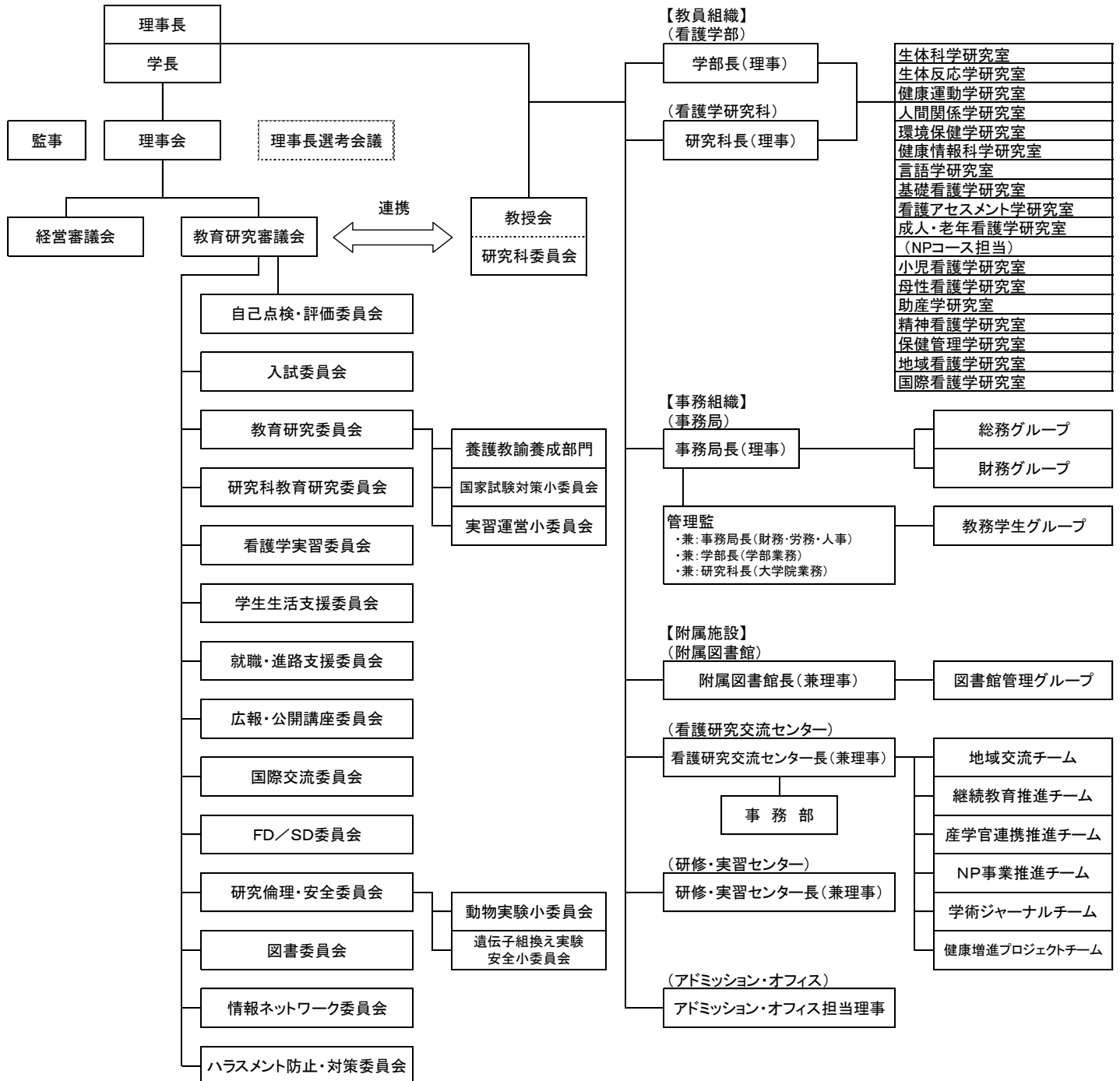
若葉祭（JICA の HP 4/25）  
若葉祭（TOS ほっとはーと大分 5/18）  
オープンキャンパス（てくてくふらす 6/25）  
公開講座（県政だより 8/25）  
議員出前講座(県議会大分 No.116 10/1)

10 学務

10-1 組織図

法人組織図

令和2年4月 大分県立看護科学大学



## 10-2 危機管理対策本部

本部長 理事長 村嶋幸代

副本部長 学部長 藤内美保、研究科長 稲垣敦、事務局長 清末敬一朗

本部員 赤星琴美、伊東朋子、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、  
桑野紀子、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、高野政子、濱中良志、林猪都子、  
福田広美、吉村匠平、矢部美香、坂本晴生

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が令和2年初頭より世界中で猛威をふるい、本学もこの感染症で多大な影響を受けた。

本学でも「感染防止に努め、学生・教職員から感染者を出さない」、「細心の注意を払って授業を継続し、学生の学ぶ権利を保障する。」、「大変革期にあたり、学生・教職員自身が情報を得て自律的に行動すると共に、COVID-19と共存する世界を見据えて必要な準備をする。」という3つの方針を掲げ、県と連携しながら、各委員会や事務局から学生や教職員に対して体調管理の徹底や海外渡航の注意喚起などを行ってきた。

しかし、日に日に悪化する情勢の中で、卒業式や謝恩会の中止を余儀なくされるとともに、後期入学試験での感染拡大防止対策措置の実施などの対応を迫られた。

そのような中で、3月23日に大分県立看護科学大学危機管理対策本部設置要領に基づき、危機管理対策本部を設置した。当該年度に2回の本部会議を実施した。協議、方針策定をした主な内容は以下のとおりである。

### 第1回(3月23日)

- ・現状認識の共有について
- ・学生、教職員の健康管理、把握、周知
- ・入学式について
- ・全学オリエンテーション等について
- ・授業の実施、延期、欠席の取り扱い、救済措置について
- ・遠隔授業の実施可能性について
- ・予防的家庭訪問実習、総合看護学実習等について
- ・環境整備・消毒（特に教室・演習室・南大分キャンパス）について

### 第2回(3月25日)

- ・学生、教職員の健康管理・把握・周知について
- ・入学式の実施方法について
- ・新入生オリエンテーション等について
- ・授業の実施、延期、欠席の取扱と救済措置について
- ・環境整備、消毒などについて
- ・実習について

## 10-3 委員会等活動

### 10-3-1 理事会

理事長 村嶋幸代

学内理事 藤内美保、稲垣敦、清末敬一郎

学外理事 門田淳一、小寺隆、高橋靖周（～9月）、姫野昌治（10月～）

監事 福田安孝、神品實子（～7月）、中野洋子（8月～）

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第1回は、ハラスメントの防止等に関する規程改正について、公的研究費の不正使用防止等に関する規程について、第2回は、平成30年度事業年度に係る業務の実績、平成30年度決算について、第3回は、平成30年度事業実績の評価結果（教育研究等の質向上S評価）、教職員の出退勤時間の把握について、第4回は、市瀬教授の定年延長について、大学職員給与規程の一部改正について、第5回は、教員の昇任、教員の採用について、定款及び規程等の一部改正について、本学の防災・業務継続計画（BCP）及び危機管理マニュアルについて、大学認証評価について、令和2年度予算等について審議された。

なお、理事会会員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催した。

教育・研究関連の運営についての問題になることはないが、大分県の地域密着型病院への就職が少なく、地域医療の将来に懸念を示す意見があり、対応が必要である。

### 10-3-2 経営審議会

理事長 村嶋幸代

学内理事 藤内美保、稲垣敦、清末敬一郎

学外理事 門田淳一、小寺隆、高橋靖周（～9月）、姫野昌治（10月～）

経営審議会委員 千野博之、吉松秀孝、松尾和行、竹中愛子（～6月）、大戸朋子（7月～）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。令和元年度の法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及

び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告および審議事項は、理事会と同様の内容である。

運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進すること、大学の魅力を発信し優秀な学生の継続的な確保の戦略が必要であり、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

### 10-3-3 教育研究審議会

学長 村嶋幸代

学部長 藤内美保

研究科長 稲垣敦

事務局長 清末敬一郎

委員 犀川哲典（学外委員）、赤星琴美、伊東朋子、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、桑野紀子、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、高野政子、濱中良志、林猪都子、福田広美、吉村匠平

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は11回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項として、第1回は、本学保有の個人情報保護等に関する規程、教員評価、教員昇任に関する選考基準、第2回は、ハラスメント防止・対策委員会について、期限付き雇用職員の無期転換ルールの適応、第3回は、学内競争的研究費、第4回は、カリキュラム改革 TG 設置、兼業の上限時間の設定、第5回は、2021年度本学入学者選抜の変更（予告）の見直し、令和元年度授業料減免、教職員の出退勤把握等、第6回は、次年度のシラバス様式変更、仁荷大学との MOU 案、未来応援基金の活用、第7回は、英語成績提供システム運用見送りに伴う一般選抜の変更、令和2年度以降の原著講読ルーブリック評価、キャンパスの名称、第8回は、職員給与規程等の一部改正、令和元年度中間決算の概要、令和2年度予算編成方針、第9回は、修士・博士論文審査員、就職試験における推薦基準の改正、第10回は、令和2年度以降の原著講読ルーブリック評価、本学防災・業務継続計画（BCP）及び事故・災害時における危機管理マニュアル、第11回は、教員の昇任、委員会等の構成員、定款及び規程等の一部改正、教職員の出退勤時間の把握、令和元年度進級判定、2022年度カリキュラム改革 TG による DP・学生像及び改正カリキュラム（第一案）、2022年度カリキュラムにおける講義コマ数とセメスター案などが審議された。また今年度退職される伊東朋子教授が退任挨拶をした。

今年度は指定規則改正に伴う 2022 年度にむけてのカリキュラム改革 TG が設置され、新しい看護職人材の育成に向けて新たなカリキュラムに向けて検討をした。次年度はカリキュラムを最終版として決定し、カリキュラム改正とともに授業方法などの FD/SD 活動と連動させながら進めて、教育・研究効果を向上していくことを推進する。また令和 2 年度の中期計画が順調に遂行できるよう推進する。

#### 10-3-4 教授会

学長 村嶋幸代

学部長 藤内美保

事務局長 清末敬一郎

委員 稲垣敦、赤星琴美、伊東朋子、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、高野政子、濱中良志、林猪都子、福田広美、吉村匠平、安部眞佐子、石田佳代子、小嶋光明、川崎涼子、桑野紀子、品川佳満、関根剛、宮内信治、平野互、森加苗愛、吉田成一、草野淳子、秦さと子、杉本圭以子、岩崎香子、定金香里

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は 4 回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。これまで 4 年次生は卒業式の日に学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞の表彰であったが、今年度は優秀賞 2 名を加えた。今年度の卒業式は、新型コロナウイルス感染防止のため中止とし、学位記とともに賞状、副賞を送付した。また、在学中に表彰する奨励賞を新たに表彰対象とし、1 年次の GPA や実習成績から選ばれた 2 名、及び 2 年次の進級試験で上位の成績であった学生 3 名（2 位同点）が承認された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

平成 31 年度入学生は 80 名、卒業生は 79 名であり、今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、今後も優秀な学生の輩出に向けて努力する。

### 10-3-5 研究科委員会

学長 村嶋幸代

研究科長 稲垣敦

事務局長 清末敬一郎

委員 赤星琴美、安部眞佐子、石田佳代子、伊東朋子、市瀬孝道、岩崎香子、梅野貴恵、小嶋光明、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、川崎涼子、草野淳子、桑野紀子、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、Gerald T. Shirley、杉本圭以子、関根剛、高野政子、藤内美保、濱中良志、平野互、林猪都子、福田広美、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本委員会は、大学院の教育課程の編成、学生の入学、修了等の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行う。本年度も例年通り委員会を 5 回開催し、特別選抜と 2 回の入学試験の合否判定、進学判定、修了判定等について審議し、課程修了者の修了を認定した。次年度は新型コロナウイルス感染予防対策の下で開催することが最重要課題である。また、メンバー全員が集まる機会が限られているので、委員会時に意見を求めて、大学院運営に活かして行くことが重要である。

### 10-3-6 自己点検・評価委員会

委員長 影山隆之

副委員長 石田佳代子

委員 秋吉良継、安部眞佐子、稲垣敦、衛藤美樹子、清末敬一郎、関根剛、藤内美保、吉田成一

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達成するため、大学の自己点検・自己評価に関すること、内部質保証に関すること、年報の編集・発行に関すること、本学の中期目標・中期計画に関すること、および認証評価その他の第三者評価に関することを分掌している。今年度からハラスメント委員会が独立したので、これは分掌外となった。1) 大学の中期目標・中期計画：平成 30 年度計画の実績報告を取りまとめた。これに対する外部評価の結果を検討し、平成 30 年度中に立てた平成 31 年度計画について、外部評価に基づき修正すべき点はないことを確認した。平成 31 年度計画の実績報告について、年度内に各種委員会等からの資料収集を開始した。令和 2 年度計画について、各種委員会等の計画を取りまとめる作業を行った。2) 年報の編集・発行：平成 30 年度年報を編集し公開した。ただし編集過程で原稿の不備やレイアウト上の問題が五月雨的に明らかになり、公開が 3 月にまでずれこんだ。他方、以降の年報編集に活用する電子システムの導入について情報ネットワーク委員会に検討を依頼した結果、年度末には業者から試用版が示されたが、年度内には仕様を充足できず運用に至らなかった。並行して、外部認証評価で活用しやすいよう年報の構成を再検討するとともに、年報入力ガイドラインを作成し、前回と同様に原稿をテキストで収集する可能性も念頭に置きつつ学内に原稿準備を呼びかけた。また、過去に各種

委員会等に対して検討整備を依頼した事項に関して、その後の取り組み状況が年報に記載されているかどうかを確認し、取り組みが遅れている場合には善処を要請した。3) 大学の外部認証評価：大学機関別認証評価の次回受審を 2022 年に控え、前回の受審機関（大学改革支援・学位授与機構）と公大協が新たに立ち上げた受審機関（大学教育質保証・評価センター）についての説明会に参加して情報を収集し、比較結果を本学経営審議会と教育研究審議会に報告した。経営審議会で検討の結果、後者を受審する方針が決定された。4) 従来の大学危機管理マニュアルに業務継続計画（BCP）という性格が欠けていたことから、マニュアルの改定作業に着手し、防災・業務継続計画（BCP）及び事故・災害時における危機管理マニュアルと危機管理対策本部設置要領を策定した。新型コロナウイルス感染症拡大に際しては、これに基づき危機管理対策本部が設置された。

次年度の課題として、年報の入力システムを確立するとともに、原稿の編集・校正作業を系統的に行い、公開が遅れないようにする必要がある。また、外部認証評価の受審に向けて、必要情報を収集するとともに、自己点検・評価が適切に行われているかどうかの確認作業を始める必要がある。

### 10-3-7 入試委員会

構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、令和 2 年度入学者選抜について大学入試センター試験の実施を含めて統括するとともに、入試関連の広報及び今後の入学者選抜の変更について検討した。今年度は特に令和 3 年度より、大学入試センター試験が大学入学共通テストに変更されること、同時に本学の入学者選抜に変更を行うことに対応するための情報収集・検討と準備作業に多忙を極めた。令和元年 11 月の大学入試英語成績提供システムの導入見送り、12 月の大学入学共通テストにおける記述式問題を実施しないという変更など状況の変化にあわただしい対応を迫られた。

一般入試については、新型コロナウイルス感染症予防に配慮する点で例年以上に困難な状況であったが、感染予防のための全学的な取り組みにより、トラブルなく実施できた。

#### 1) 入試関連の広報活動

広報委員会とも協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者主催の進学説明会には 21 会場参加し、高校生や保護者 359 名の相談を受けた。また 6 月 7 日に、本学において県内高校の進路指導担当者等を対象とした進学説明会を開催し、来場者は 29 名であった。これら以外に、若葉祭及びオープンキャンパスにおいて進学相談コーナーを開設した。

#### 2) 大学入試センター試験の実施

大学入試センター試験（1 月 18、19 日）の本学会場では大きなトラブルはなく試験を実施した。この準備として、大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（第 1 回 8 月 21 日、第 2 回 12 月 10 日）、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（5 月 23～25 日）の他、大学入学者選抜・教務関連事項連絡協議会（6 月 20 日）、公大協主催の入学者選抜に関する研究会（6 月 6 日）に入試委員を派遣した。



### 3) 令和2年度入学者選抜

別項(2. 入学試験等 2.1 学部入試)に整理したとおり、令和2年度入学者選抜を実施した。一般入試においては、新型コロナウイルス感染症の感染予防対策のため例年以上に困難な状況であったが、選抜試験に関してはトラブルなく実施できた。志願者数については、推薦選抜において昨年度より45名の増加、前期日程においては60名の減少、後期日程においては101名の増加であり、総計では昨年比で86名の増加であった。

### 4) 2021年度入学者選抜の変更

「2021年度大分県立看護科学大学入学者選抜の変更について(予告)」の第二報を2019年3月に公開し、その修正版を4月に公開した。11月の「大学入試英語成績提供システム」の導入見送りへの対応を検討し、12月に「本学入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用について」を公表した。また、面接の実施や調査書の活用について具体的な検討と準備作業を進めた。

## 10-3-8 教育研究委員会

委員長 藤内美保

副委員長 濱中良志

委員 川崎涼子、清末敬一郎、定金香里、品川佳満、杉本圭以子、原田千夏、森加苗愛、吉村匠平

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月(8月除く)定例の委員会として11回の会議を開催した。

#### 1. シラバス関連(品川委員、定金委員)

シラバスのフォーマットに、「DPとの対応」、「参考書」、「履修する上で必要な要件」、「教員の実務経験」、「教員以外の実務経験」、「実務経験をいかした教育内容」を新たに追加した。また、シラバスの記載事項を、教育研究委員会が第三者的視点でチェックする体制を整えた。

#### 2. 入学前教育(定金委員)

入試種別に1年次前期の成績比較および困難感を感じる科目を問うアンケート調査を実施した。その結果、「生物」を事前学習対象科目に選定し、推薦入学者には、大学入学前に必要な生物の学習範囲を具体的に提示、事前学習を実行するよう通知した。

#### 3. 総合人間学(川崎委員)

教職員から講師を募集し、8名の講師とテーマを決定し、好評であった。COC+による他大学学生の単位互換制度も導入しWeb受講を可能にしている。効率的運用のため、講堂から講義室での開催とし、SG担当人数を減らし、効率化を図った。

#### 4. 2年次・4年次に実施するカリキュラム・ディプロマ・アンケートについて、(杉本委員)

4年次生は1月、2年次生は2月末に実施しそれぞれ90%以上の回収率であった。ディプロマポリシー及びカリキュラムポリシー到達度は前年とほぼ同様の結果であった。これに加え今年度は、12月に4年次生にカリキュラムの重複についてアンケートを行い、各学年の科目数のバランスは良

いが、1年次のカリキュラムの過密感と講義内容の重複について意見を得た。これを参考にカリキュラム検討TGで検討し改善することとなった。

#### 5. 科目毎の成績分布（原田委員）

成績評価の分布について、5月に30年度の科目別評価分布、12月に前期科目の成績分布を学内に公表した。

#### 6. 健康科学実験（濱中委員、定金委員）

順調に健康科学実験を実施できた。

#### 7. 教育環境について（藤内、原田委員）

旧メディアセンターのパソコン等の撤去に伴い、学生が自己学習、演習、ディスカッション等自由に使用できる学習環境として整備を行った。名称は学生の投票により「マルチルーム」とした。

#### 8. 卒業研究（藤内）

全員78名が卒業論文、要旨を提出し、12月4日・5日の2間、講堂で全員がプレゼンテーションを行った。今年度より、担当教員によるルーブリック評価を導入した。次年度は、原著講読についても担当教員によるルーブリック評価ができるよう整備した。

#### 9. 卒業研究発表会運営（濱中委員、吉村委員、品川委員、定金委員）

今年度から要旨をペーパーレス化しweb上で閲覧できるようにした。これによりカラーで見ることが可能となった。また、PDF化しているので必要に応じて印刷もできるように配慮した。その他、例年と同様に業務のスリム化を図った。

#### 10. 学生表彰（藤内）

卒業式に表彰する4年次生の学長賞1名、優秀賞2名、卒業研究優秀賞2名、学生賞1名の計6名を表彰した。今年度から新たに優秀賞が加わった。新型コロナ感染症防止のため、卒業式が中止となり、賞状と副賞は郵送とした。また、1年次及び2年次の実績で評価される奨励賞を4月に表彰する予定である。

#### 11. 2022年度カリキュラム改正について（藤内、全員）

平成27年度カリキュラムの評価を行い、課題を明らかにした。またカリキュラムTGによるカリキュラムの検討課題について、本委員会で審議し、審議会に提案した。計画は順調に進めて第1案の新カリキュラムを3月の審議会にて提案した。

12. 国家試験対策小委員会（杉本委員）、実習運営小委員会（森委員）、進級試験WG（濱中副委員長）、養護教諭養成部門（吉村委員）の活動は、別途項目により記載しているため、ここでは省略する。

今年度は、2022年度改正カリキュラムに向けた活動と並行しながら、通常の役割業務を順調に行うことができた。次年度は、カリキュラム改正の最終案を提示し、カリキュラム改正のプロセスを教職員に共有し透明化し進めていきたい。また年度末に発生いた新型コロナにより、オンライン授業の検討を行ったが、通常授業おけるオンライン授業導入についても検討する必要がある。

### 10-3-8 1) 養護教諭養成部門

部門長 吉村匠平

副部門長 伊東朋子

委員 赤星琴美、秋本慶子、小野治子、草野淳子、佐伯圭一郎、坂本晴生、関根剛

養護教諭養成課程の運営を担当した。履修カルテの作成、図書整備（学術誌、雑誌、図書）、新入学生全員を対象としたガイダンス、オープンキャンパスでの高校生（保護者）対象の相談会、非常勤講師の時間割（教科書）調整及び土日講義対応、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、養護実習Ⅰ履修者選考（12名中11名に履修許可）、大学パンフレットへの関連情報の掲載、大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習の開始（中津市1校、日田市2校で実施）、大分県採用試験のガイダンス（5月、12月）の開催、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、九重町での養護実習の実施に向けた九重町教育委員会との協議、教員採用試験一次対策、採用試験終了後の就職支援、教員免許の一括申請である。

平成28年度入学生は、11名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は6名、1次試験合格者は3名（大分県2名、愛媛県1名）、最終合格者は1名（愛媛県）だった。11名の進路は、愛媛県教員1名（正規）、大分県非常勤講師4名、大学院進学2名、医療機関就職者4名。教員就職率は、55.6%、教員として勤務する卒業生の大分県内就職率は66.6%だった。

養護実習に関しては、大分市教育委員会、中津市教育委員会、日田市教育委員会、実習校との連携の下、順調に進めることができた。

令和2年度の課題は、実習校の安定確保に向けて、県内母校実習、県内過疎地域実習、大分市教育委員会と連携しての大分市内での実習を軌道に乗せること、教員採用試験1次試験に向けたオンラインの学習環境を整備すること、学習指導要領の改訂に伴う必要図書の更新を進めることである。

### 10-3-8 2) 実習運営小委員会

委員長 森加苗愛

委員 足立綾、石丸智子、川崎涼子、後藤成人、佐藤愛、中釜英里佳、永松いずみ、姫野綾、丸山加菜、山田貴子、吉川加奈子

本委員会は学生の実習に関わる教育を効果的かつ円滑に行うため、演習の運営や実習環境の調整を担う委員会である。本年度の会議は、毎月（8月除く）の定例委員会を計11回（うち、1回はメール会議）開催した。本委員会の主な活動内容は以下8点である。

#### 1) 看護技術修得プログラムの運営

1年次から4年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できることを目的に、看護技術修得プログラムを企画・運営・評価した。昨年度から本プログラムは、すべての段階の演習内容を見直し、学生が効果的に学ぶことができるよう検討している。第1段階看護技術演習（2年次後期）およ

び第2段階看護技術演習（3年次前期）では、学生が実技演習前に主体的に看護技術を実践して学べるようワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考することができるようにした。また、事例は学生が内容を共有して議論をし易いように課題数を統合した。評価方法は3～4人でグループを組み、公平に選出した1名が実践してグループの評価とした。評価内容は<技術項目>だけではなく<全体的取り組み>を鑑みて合否判定を行うこととした。昨年度の評価で、1名のチェックによるグループ評価の心理的負担感への配慮、教員の指導姿勢や評価基準の確認・共有などが課題としてあがっていたが、オリエンテーションの工夫により今年度は、課題としてあがることはなかった。学生の取り組みは主体的に行えており、概ね目標に到達できた。

第3段階看護技術演習（4年次前期）では、学生が主体的・計画的にかつ繰り返し学習する環境の提供としてeラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指した。第4段階看護技術演習（4年次後期）では、今年度の技術は採血と蘇生法とし、大分赤十字病院の看護師の方の来学により指導を受けた。学生からは臨床で勤務する看護師に直接指導を受けたことによる自信につながる肯定的な意見を多数得た。

今後は、第1段階・第2段階看護技術演習では、事例内容やワークノートの活用について検討し、効果的な実践演習に繋がれるよう更なる検討を行う。第4段階は今年度で終了となった。本演習の臨床看護師との交流のメリットを考慮し、今後は他の教科目で、時期や内容について引き続き検討を行っていく。

## 2) 看護スキルアップ演習の運営

看護スキルアップ演習（4年次後期）では、事例数を5例とし内容も各専門領域の特徴を活かせるよう検討し見直した。看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことを狙いとして事例のロールプレイを行い、学生の学びと教職員の指導が円滑に展開されるよう準備・調整・展開した。演習は今年から学生が主体的に運営することとし、学生間の討議が行い易くなるよう、他者と自己を評価する相互評価表を導入した。

演習は学生が主体的に運営できていた。また、相互評価表により学生は自己の評価とともに他者を発展的に評価・批評することを学んでいた。実施後の学生からのアンケートでは、ロールプレイ後のディスカッションの充実や教員からの多くの講評が得られたとされていた。

今後は、本演習の実施時期が第4段階実習により教員の指導体制や参加が難しくなる時期であるが、引き続き人間科学系の教員にも指導や講評において協力を依頼し、更に充実した運営を検討したい。

## 3) 実習関連マニュアルの内容検討および整備

### (1) 看護技術習得確認シート

昨年度までは自記式回答のアンケート調査により、看護技術修得状況を確認していたが、今年度から、本シートの集計により看護技術修得状況を確認した。

2019年度の4年次生70名の看護技術確認シートを回収し集計を行った。「AA」46項目のうち、8割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は、45項目（2018年度は35項目）であった。「A」54項目のうち、8割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は、24項目であった。

今後の評価の在り方を将来構想検討においても検討中していく。

## (2) 実習ガイドブック

学生の実習記録の保管における注意事項として、Google ドライブの活用上の注意点や実習中の感染症発症時の対応における基本姿勢など、昨年度見直した項目を確認していった。

今後も引き続き見直しを行っていく。

## 4) 南大分キャンパスおよび各実習施設の環境整備

学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、臨地実習における環境整備を行った。

南大分キャンパスは、実習中に早朝登校する学生および教員の負担を考慮し、朝 7 時から 9 時までの 2 時間を解錠（フリーモード）とし、本学から施設管理がリモート操作できるよう、申し合わせ事項を定め、準備を進めることとした。解錠時間が生じることから、教職員室と図書室は施錠することとし、暗証番号付きの鍵を設置した。また、南大分キャンパスの使用状況を把握できるよう、サイボウズからの予約システムを整えた。今後、リモート操作についてもサイボウズで行えるようシステムを整えていく。

その他の施設では、大分赤十字病院にポケット Wi-Fi を導入し、教員の連絡環境の充実を図った。その他プリンターの配置やロッカーの交換等、必要に応じて環境を整えた。引き続き整備を行っていく。

今後、南大分キャンパスについてはサイボウズシステムの導入による利便性やトラブル等の評価を行っていく。その他の実習環境も引き続き確認を行っていく。

## 5) 実習関連予算管理

必要に応じて担当者が経費を申請し対応した。298 万円の予算のもと活動した。多額の費用が必要な物品の購入等は可能な限り計画的に購入するよう各研究室に連絡し、計画的に支出できるようにした。実習室のベッドや医療機器の老朽化による買い替えにより、数年のうちに高額な支出を要する案件があり計画的に購入できるよう議論し、小委員会委員で運営を行っていく。

## 6) 実習関連フォルダの管理

学生の実習記録の保管における注意事項として、Google ドライブの活用上の注意について検討し、実習ガイドブックに反映してきた。今後はその評価を行っていく。

## 7) 実習服、ファイル等の注文・管理

実習服、ファイルや必要物品の注文・管理を行ってきた。今年度も学生の演習や実習で必要な物を検討して備え管理していく。

## 8) 看護技術演習将来構想検討

2022 年のカリキュラム改正に向けて、本委員会が担当する看護技術演習やスキルアップ演習の運営の目的・目標や運営方法のあり方を検討してきた。現在までに看護技術演習は大きく 2 本柱で構成し、『136 項目で構成された e-ラーニング（2 年次～4 年次）』と『看護技術習得チェック（3 年次前半）』として検討を重ねている。

『136 項目で構成された e-ラーニング（2 年次～4 年次）』では、現在活用しているナーシングスキルを活用し、4 年間で修得すべき 136 項目を定め、その修得時期を定めて段階的・繰り返し学習するシステムを検討している。4 年間を通して e-ラーニングを活用し、その学年で学んだ技術の知識を再学習できるようなシステムを構築することが目的である。今後は評価方法を Access を活用するこ

とで検討している。

『看護技術習得チェック（3年次前半）』は、現第2段階看護技術習得プログラムを活かし、実習前に学生の看護技術の確認と自信につなげられる演習と取り入れることを検討している。

来年度も2022年度のカリキュラム改正に向け、実施内容や評価方法を引き続き検討していく。

#### 10-3-8 3) 国家試験対策小委員会

委員長 杉本圭以子

委員 定金香里、佐藤愛、永松いずみ、原田千夏、山田貴子

国試対策のスタートとして学生委員とともに4月にガイダンスを行い、7月には外部講師による「国試の傾向と対策セミナー」を実施し、国試対策への動機づけを高めた。学生委員と連携して業者模試を7回、学内模試を2回実施した。模試結果は自己採点し、自分の力を把握するとともに必ず問題のやり直しをすることを求めた。また本学が全国の結果と比較し正答率が低い問題をチェックし、それがどのような問題か各研究室に回覧した。夏休み前には、それまでの模試で苦手領域であった人体、疾病、基礎看護領域の問題演習を行い、冬の直前期には集中的に必修問題対策を実施した。

学内に過去問を掲示し、他学年に対しても国試対策の意識付けをおこなった。合格率は、全国（新卒）の94.7%に対し、本学は100%であった。

次年度の課題は、学生の国試対策への主体的な学習をさらに支援するため、国試の傾向と対策について情報提供を行い学習環境を整えることと、冬の直前期に有効な対策を検討し、提供することである。

#### 10-3-8 4) 進級試験ワーキンググループ

リーダー 草野淳子

メンバー 濱中良志、佐伯圭一郎、佐藤栄治

進級試験ワーキンググループの役割は、進級試験問題作成と、学生への周知、進級試験の実施を行うことである。6月4日（火）に2年生を対象に進級試験の目的、概要、出題範囲の説明を行った。7月末に教員へ本試験・再試験の進級試験問題の作成を依頼した。その後、WG内で問題の検討、推敲を行った。

令和元年度2月26日に2年次生を対象に本試験を行い、合格率は87.7%であった。再試験を3月5日に行い、全員合格となった。

### 10-3-9 研究科教育研究委員会

委員長 稲垣敦

副委員長 福田広美

委員 赤星琴美、梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、神崎正太

オブザーバー 村嶋幸代

本委員会の任務は、大学院研究科の運営に関する事項について審議することである。本年度は委員会を12回開催した。入試の結果は、2-2及び2-3に記載した。

- 休学、復学、長期履修、退学について随時審議し、教育研究審議会に諮った。
- 必要に応じて指導教員の変更を審議し、教育研究審議会に諮った。
- 大学院生の困りごとに関して、メール等で随時相談を受けた。
- 退学希望者と随時面談をした。
- 大学院生のTA雇用申請について、随時審議した。
- 大学院研究費の使用及び大学院研究室の消耗品の購入を許可し、納品後に検収した。
- NPコースの進級判定を確認した（4月3日）。
- 在学生の履修状況を確認した（4月3日ほか）。
- 学年暦を確認した（4月3日ほか）。
- 特待生授業料免除希望者の募集、審査員の決定（4月3日）、候補者の選考を行ない、教育研究審議会に諮った（4月10日）。
- 大学院生オリエンテーションを開催した（4月8日）。
- 指導教員の担当学生の上限を検討した（4月3日）。
- 博士論文の提出要件について検討した（4月3日）。
- 日本学術振興会の有志賞受賞候補者の推薦について審議した（4月3日）。
- 日本学生支援機構大学院在学奨学金の説明会を実施した（4月19日）。
- 特別選抜の面接担当者を決め、小論文の採点基準について検討した（5月8日）。
- NPコース地域枠の出願書類の推薦書について審議し、変更した（5月8日）。
- NPコースの基礎学力試験（4月9日）の結果を確認し、今後の対応について確認した（5月8日）。
- 昨年度から導入された特別選抜の小論文の問題を作成し、事前相談を実施した。
- 新入生の既習得単位について確認した（5月8日）。
- 長期履修申請者の確認を行い、合わせて長期履修制度の見直しについて審議した（5月8日）。
- 本学の学部3年生対象のキャリアガイダンスで大学院進学について説明した（7月19日）。
- 指導教員の決定を確認し（5月8日）、決まらない学生には希望があれば面談した。
- 日本学生支援機構大学院奨学金推薦者の選考方法を検討し、審査を実施し（6月5日）、教育研究審議会に諮った（6月12日）。
- 8月の入試問題を分担して作成し、検討した。

- ハラスメント委員会の委員を決めた（6月5日）。
- 大学院説明会（6月22日）を企画し、チラシを作成・郵送し、設営し、開催した。
- 特別選抜（7月17日）の募集要項を作成・郵送し、受験資格等の問い合わせに対応し、面接・口頭試問要領、実施要領、問題を作成し、試験監督・採点・集計・合否判定案作成を行い、研究科委員会に諮り（7月24日）、合格発表をした（7月25日）。
- 博士課程後期への進学審査（8月21日）の募集要項を作成・郵送し、受験資格等の問い合わせに対応し、面接・口頭試問要領、実施要領、問題を作成し、試験監督・採点・集計・合否判定案作成を行い、研究科委員会に諮り（9月4日）、合格発表をした（9月5日）。
- 入学試験（8月24日）の募集要項を作成・郵送し、受験資格等の問い合わせに対応し、面接・口頭試問要領、実施要領、問題を作成し、試験監督・採点・集計・合否判定案作成を行い、研究科委員会に諮り（9月4日）、合格発表をした（9月5日）。
- 8月の入試の追加合格について検討し、次年度から導入することとした。
- 研究中間報告会（8月29日）の実施方法を検討し（8月5日）、今年は2グループ制で実施することとし、準備を行い、当日の運営を担当した。
- 研究計画報告会・論文レビュー報告会（8月30日）の実施方法を検討し（8月5日）、今年も2グループ制で実施することとし、準備を行い、当日の運営を担当した。
- 研究中間報告会の実施方法を検討し、次年度から2グループ制で実施することとした（9月4日）。
- 次年度のスケジュールを検討し、NPコースの大学院研究成果報告会は3月に実施することとした（10月2日）。
- 大学院特待生入学料免除の審査を実施し（10月2日）、教育研究審議会に諮った（10月9日）。
- 大学院研究費取り扱い要領の見直し、購入物品や旅費の手続きを統一し、学会への旅行、宿泊費については年に1回を上限とすること、報告書を事後に指導教員に提出することとし（10月2日）、研究費取扱要領を改正した。
- 大学院入試の過去問題に解答例を添付して配付した。
- シラバスの項目について検討して決定し、システムを最適化した（11月6日）。
- 令和元年9月26日付けで通知された「学校教育法施行規則及び大学院設置基準の一部を改正する省令の施行について（通知）」を受けて、修士論文審査要領、修士論文審査のためのクライテリア、博士論文審査要領、博士論文審査のためのクライテリアを大学HP上で公開することとした（11月6日）。
- 長期履修のあり方について検討し、長期履修期間中に原則休学は認めないこととし、また、申請期間に関するNPコースの特例を削除することとし（11月6日）、これを教育研究審議会に諮った（11月13日）。
- 研究者養成コース、NPコース、健康科学専攻、博士課程後期看護学専攻を対象とした入学試験二次募集（12月14日）を実施することを決め（9月4日）、教育研究審議会に諮り（9月11日）、募集要項を作成・郵送し、受験資格等の問い合わせに対応し、面接・口頭試問要領、実施要領、問題を作成し、事前相談、試験監督・採点・集計・合否判定案作成を行い、研究科委員会に諮った（12月18日）。



- 日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除候補者選考の審査委員を推挙し（1月8日）、教育研究審議会（1月15日）に諮った後、審査を実施し、審査結果を育研究審議会（3月10日）に諮った。
- 3年次生を対象とした大学院生と語る会（助産学・広域看護学コース）を開催した（12月18日）。
- NPコースの課題研究成果発表会を開催した（1月9日）。
- 修士論文と博士論文の審査員を決め（1月8日）、教育研究審議会に諮った（1月15日）。
- 大学院研究生の募集要項を確認し（1月8日）、教育研究審議会に諮り（1月15日）、募集した。
- 2019年度目標の実施状況を確認し、また、次年度目標、次年度予算案を検討し（1月8日～）、提出した。
- 現在のNPコースの再試験合格のC評価（cd）をAd評価とすることについて再検討し、現行のC評価（cd）を継続することとし、学生便覧では誤解が生じないように工夫することとした（2月5日）。
- 次年度の新生オリエンテーションについて検討し、オリエンテーション後の院生・教員による交流会は、在学生在が主体となって企画・運営することとした（2月5日）。
- S評価の導入について検討し、今回は導入を見送ることとした（2月5日）。
- 研究計画報告会・論文レビュー報告会（3月5日）、研究成果報告会（3月6日、NPコースは1月9日）は、今年度から学生が主体的に運営することになった。
- 研究成果報告会（3月6日）は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、報告資料ファイルをサーバ（サイボウズ）に提出し、教員とメールで質疑応答する形式に変更して実施した。
- 次年度の大学院学生便覧を検討し、作成した（2月5日～）。
- 令和2年度特待生授業料免除の問題作成及び審査員を推挙し（2月5日）、教育研究審議会に諮った（2月12日）。
- 看護管理学演習の単位数を1単位から4単位に変更することとし（2月5日）、教育研究審議会に諮った（2月12日）。
- 大学院科目について変更の希望を調査することとし（1月8日）、教育研究審議会に依頼した（1月15日）結果、教員からの要望があり、看護教育特論の科目名を看護教育学特論に変更することとし（2月5日）、教育研究審議会に諮った（2月12日）。
- NPコース2年次生の修了試験（1月30日）、再試験（2月6日）実施し、合否判定会議（2月6日）を開催した。
- NPコース1年次生の進級試験（2月26日）、再試験（3月4日）を実施し、合否判定会議（3月6日）を開催した。
- 修了判定案を作成し（2月5日）、研究科委員会に諮った（2月10日）。
- 次年度の特別選抜の対象となる学部生から成績評価にS評価が導入されたため、特別選抜の出願要件であるGPAを2.5から2.6に変更した（3月4日）。
- 大学院便覧に学内地図・連絡先を追加し、また、学則別表の改正に伴い修了要件の表を変更するとともに、在学生在向けに旧修了要件表も掲載することとした（3月4日）。
- シラバス記入のスケジュール（3月10日～27日）を決め（3月4日）、教員に inputs を周知し（3月11日）、シラバスを編集した。

- 特待生授業料免除について審議し、2年休学後に履修を開始した者については申請を認めないこととした（3月4日）。
- 2019年度の修了式・学位授与式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。
- 教育や研究環境に関する調査を今年度の修了生に google フォームを使って実施し(3月19日)、次年度最初の委員会で集計結果をもとに審議することとした。
- 2020年度の入学式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、新入生と学内関係者のみで講義室で実施することとした。

#### 10-3-10 看護学実習委員会

委員長 赤星琴美

副委員長 影山隆之

委員 伊東朋子、梅野貴恵、小野美喜、桑野紀子、近藤亜矢、高野政子、藤内美保、林猪都子、  
福田広美

本年度の会議は、毎月（8月除く）の定例委員会 11 回及び臨時委員会 1 回の計 12 回を開催した。

全段階の学部実習に関することでは、1 段階～6 段階の看護学実習について各実習の目標の達成状況や本学の DP とどの内容が繋がっているか検討した。また、看護過程の展開、理論、アセスメントツール NANDA 看護診断の使用等 4 段階実習にかかる演習科目について討議を行った。また、令和 4 年度から改正カリキュラムにむけて、平成 30 年度委員会で抽出された課題を中心に、実習目的・目標、単位数を検討した。令和 2 年度の総合看護学実習の実習施設を 2 施設追加した。担当教員・専任教員型の実習から全教員担当教員型の実習へ移行した。ルーブリック評価の導入することが決定した。

教員配置の方針および臨時助手の実習配置の方針を見直し専任教員、担当教員の役割について、全実習の現状と課題について検討した。また、県立病院で実施している実習指導者短期教育プログラムを 4 回シリーズで開催し、指導案作成を含む講義を行った（参加者：本学教員 4 名、大分県立病院 19 名）。実習指導者・大学教員交流会を 8 月に開催した。実習施設 3 ケ所の実習施設の看護責任者、臨床指導者と教員で交流した。参加者は実習施設 3 ケ所から 37 名、大学教員 20 名の計 57 名で、アンケート調査の結果、参加の満足度が高かった。

次年度は、実習指導体制については、さらに担当教員の意見が反映できるよう透明化を図る。また、令和 4 年度の改正カリキュラム施行に向けて、実習の学修の在り方を検討し推進を図る。

## 10-3-11 学生生活支援委員会

委員長 林猪都子

副委員長 宮内信治

委員 関根剛、岩崎香子、堀裕子、田中佳子、後藤成人、坂本晴生、今村知子

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

1) 学生関連イベントの企画・運営：全学生オリエンテーション（4月9日）、新入生オリエンテーション（4月10日、4月11日）、コンタクトグループ（4月9日）、キャンパスクリーンデー（5月15日）、DV講演会（6月3日）を企画し実施した。新入生オリエンテーション日程は、来年度に向けて2日間に短縮し内容を検討した。全学スポーツ交流会は、学生アンケートの結果と学生自治会の決定により実施しなかった。

2) 学生相談：各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの、成績不振者に面接、1年次の入学直後に既習科目・状況調査、前期前半終了時に学習状況調査を実施、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。1年次生に対する学習相談は、学生のポータルサイトに面談カードを掲載し、面談カードを使用した相談・支援を実施した。

3) 学生の自主活動への支援：サークル活動支援、若葉祭における学生支援、自治会活動支援などを行った。特に自治会が自立してできるように予算案の作成や予算配分などの指導を行った。経済支援は、奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。HPに奨学金情報を整理して掲載した。

4) 健康支援：学生の健康管理支援（集団健康診断、一部の3年生対象の風疹抗体検査、個別相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室看護師を中心に行った。保健室の学生相談件数は824件で、そのうちメンタルヘルスによる学生相談件数は74件であった。メンタルヘルス事例に対応した学生支援として、コンサルテーションをカウンセラーからは年25件（今年度新規12件）実施した。保健室の機能強化として、保健室看護師を臨時職員とし、年度末に交流棟の清掃とサークル室の移動を実施することで、保健室周辺を整備した。

5) 交痛安全の推進：交通安全指導の実施（自動車講習会4月18日）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交痛事故対応、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）などを行った。

6) 学生生活に関する調査：学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）を12月に実施した。学生生活実態調査の自由コメントについては各部署、担当委員会ごとに整理し、それぞれに対応を検討することを依頼した。また、調査結果について検討し、犯罪被害やアカハラ・セクハラ被害に遭遇した時の相談窓口を学生に周知することとした。

7) その他：新人教員オリエンテーション（4月2日）を講義担当、九州地区公立学生部長会議（9月13日）に参加した。

## 今後の課題

従来の諸行事や活動について見直しを図り、必要に応じて縮小（オリエンテーション、スポーツ交流会等）および拡大（保健室機能・環境強化）させた。

また、3月3日に大分市に新型コロナウイルス感染が発症し、それ以降大分県内に感染者の増加が見られる。新型コロナウイルス感染の状況に応じて、大学生に向けた生活対策を検討する。また感染状況は長期化することも踏まえて、学生への精神的な対策も検討していくことが課題である。

### 10-3-12 就職・進路支援委員会

委員長 福田広美

副委員長 杉本圭以子

委員 足立綾、小野治子、樋口幸、小川三代子、神崎正太、清末敬一郎

就職支援委員会は、学部生の就職・進学に関わることや就職広報及び就職後のフォローアップ、Uターン支援に関することを主たる分掌事項としている。学生の就職・進学の円滑化と県内就職率50%を目指して、就職・進学活動を支援し年間計画に沿って1)～5)の活動を行った。昨年に引き続き、就職支援相談員1名を配置、3年次生全員に就職面接を実施、学生の就職・進学希望に関する実態を把握しながら希望者には適宜相談に応じた。

1) 学生の就職・進路状況の確認と支援：卒業生79名であり、3月31日現在、就職決定者名（看護師68名）、進学者11名（保健師6名、助産師5名）であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行い、メールや面談で情報提供した。また、就職面接試験に備えて模擬面接を4回、進学面接試験に備えた模擬面接を1回、希望する学生を対象に実施した。就職に際し推薦を実施している施設の情報を入手し、4年次生にメールで周知、希望者を募り委員会で選考した。また、推薦基準（委員会内規）については、平成27年度から導入されたS評価を考慮し、新たに基準を見直し、ガイダンス等を通じて学生にも周知した。

2) 看護職キャリアガイダンスの開催：3年次生対象に看護職キャリアガイダンスを2019年7月19日（金）、2020年2月19日（水）の2回開催した。7月のガイダンスは、第4段階の看護学実習前に、自らの進路を考える機会とするために、就職や進学の進路選択の方法や、県内に就職している卒業生6名の活動について、発表や意見交換を通して自らの進路を考える機会を設けた。アンケートの結果、9割以上の学生が、ガイダンスによって自らの進路を考え、今後の活動に対する動機づけとなった。次年度は、学生のニーズを考慮しながらガイダンスを充実させる。

2月のガイダンスは、就職や進学の際に必要な履歴書の書き方・面接について具体的な対策を行えるよう説明を行った。4年生2名を招聘し、就職活動の経験について発表を依頼し、3年次生が具体的な進め方について理解を深めた。また、本学の就職相談室の利用や各都道府県のナースセンター担当者による就職相談の紹介を行い、今後の就職活動に際し有料の転職サイトの利用をしないこと等、留意点を伝えた。

今後は、2年次生を対象に看護職キャリアガイダンスを行い、学生が自らの進路について早期から考え、活動を進められるように支援を行う。

3) 県内施設就職情報の提供：県内施設に就職情報および卒業生メッセージに関する依頼を行い、県内施設に就職している卒業生の活動の様子を写真やメッセージとともに依頼した。学生がキャンパス内で利用しやすい食堂の一角に情報コーナーを設置し、パネルに掲示を行うなど利用しやすい環境を整えた。

4) 県内施設就職者への対応：県内施設に就職している卒業生の活動状況を各施設から情報を得て把握した。卒業生の就業状況から継続して対応が必要な場合は、施設や卒業生と連絡を重ねて行いサポートを行った。また、県内施設で活躍する卒業生の情報も得られ、看護職キャリアガイダンス等で学部学生を対象に情報提供の協力をもとめた。今後も引き続き、県内施設に就職している卒業生の対応を行い、必要に応じてサポートを行う。

5) 卒業生の県内施設Uターン支援と県内施設在職状況調査：ホームカミングディの際に、「大分県内求人情報」の冊子とナースセンターより提供された施設情報の冊子を設置し、卒業生に情報提供を行った。また県内施設に就職している卒業生の状況を把握した。

#### 今後の課題

本年度は、県内就職率 50%（令和元年度 3 月 31 日現在）であった。今後も引き続き県内就職率 50%を確保するための方策として、ガイダンス等の際に積極的に県内施設に就業している卒業生の招聘を行い、在学生との交流の機会を設ける。また、県内施設に就業する卒業生の状況を確認し、フォローアップやサポートを行う。また、県内の就職情報を大分県看護協会のナースバンクからも情報を得て、学生に提供していく。

### 10-3-13 FD/SD 委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 関根剛

委員 安部眞佐子、中釜英里佳、永松いずみ、稗田朋子、秋吉良継

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育/研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的に、平成 30 年度から新設され 2 年目の委員会である。主とする分掌は、①FD/SD のための各種研修会の実施、②授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究などに関する資質向上である。平成 31 年度の本委員会の活動内容は、以下の 1)～8)である。

1) FD/SD 研修：今年度は新任教職員研修、4 科学研究費説明会・研修会、教育に関する研修会（「学習の可視化」川越明日香氏）、学生理解に関する研修会（「大学における学生指導へのヒント」田中秀征氏）、人権に関する研修会（「部落差別の現状と未来—部落史の視点から—」）。研究に関する研修会（Covid-19 の影響で中止）。その他の 7 領域の研修を実施した。

科学研究費説明会については、公立大学協会主催の「科学研究費獲得セミナー」に参加した教員 1

名、職員1名による科学研究費申請の説明、今年度採択者3名を講師とした最新の情報と具体的な工夫を中心に企画した。教育に関する研修では県内他大学にもオープンにして他大学参加者8名を得た。学生理解に関する研修会は、昨年的高等学校教育までの発達障害児の現状と対応に引き続いたテーマとして2年連続テーマとして企画した。また、その他として、平成31年度大分県自治人材育成センター県職員研修の新任課長級研修とマネジメント研修にそれぞれ教員1名ずつを派遣させるなど、県と連携したFSDS活動を拡大した。

2) 学内競争的研究費の活用促進として、4月10日にメールにて学内競争的研究費の募集を行い、奨励研究2件、先端研究2件、プロジェクト研究0件の新規応募があった。5月9日にFD/SD委員会主催の審査会(審査員7名:FSDS委員会から3名、教育研究審議会メンバーから3名、担当理事1名)で審査し、審査結果により助成額を決定した。平成30年度に採択された2年目の研究課題と合わせて、平成31年度は、奨励研究7件、先端研究7件への助成を行った。これらの研究成果(進捗状況)は、3月16日のアニュアルミーティングで報告された。

3) 科学研究費助成金申請の促進を行うために、全教職員対象に上記1)のとおり研修会を実施した。6月27日に新任教員のために、申請にあたり情報提供を行った。申請書のピアレビューは、申請33件のうち9件であった。

4) 国内/海外派遣研修の促進のために、参加期間の要件等を緩和した上で、4月25日から計5回の募集を行ったが、参加希望がなかった。

5) 授業評価は、紙媒体とWeb(後期科目一部)による方法で、1年次生32科目、2年次生37科目、3年次生23科目、4年次生7科目の全99科目(のべ112回)であった。後期9科目についてwebアンケートを実施したところ回収率に大きな差はみられなかった。回収後は、担当教員に結果の通知を実施し、科目ごとの回答数と平均値一覧をWebにアップした。Webアンケート向けに質問項目の内容検討を行った。

6) アニュアルミーティングは、令和2年3月16日に新型コロナウイルス感染拡大対策として2グループ制を4グループで開催するなど、参加者が密接にならないように工夫をした上で開催し、教職員51名が参加した。学内競争的研究費の応募者による発表14題、一般演題9題が、ポスターを用いて示説で発表された。発表の要旨集は、冊子体にして図書館に保管した。

7) 平成30年から開始された大分県内大学等FD・SD合同フォーラム担当者会議が2回開催され委員長が参加した。2月7日に別府大学において開催された第2回大分合同FD・SDフォーラムに学長と教員8名(うち委員4名)が参加した。大学等による「おおいた創生」推進協議会主催の宿泊型新任教員研修(11月9、10日)の参加募集を行ったが、希望はなかった。

8) 学内全教員へ他機関からのFDに関する情報提供を17回行った。

#### 今後の課題

今年度は、授業評価は従来の紙媒体の配布回収を行っていたが、配布・集計のコストが大きく、webアンケート実施について検討・検証を行なった。そこで、次年度の授業評価は、前期科目からwebアンケートの実施に向けて活動することとした。そのため、来年度は、実習科目のweb実施の内容や方法、大学院科目の評価の実施について検討・実施する予定である。

国内/海外派遣研修は希望者が少ないことから、派遣期間などを緩やかに見直して募集したが、変

化は見られなかった。次年度は、募集条件の変更をさらに周知して反応を見ることとした。

#### 10-3-14 研究倫理・安全委員会

委員長 市瀬孝道

副委員長 平野互

委員 岩崎香子、石田佳代子、川崎涼子、草野淳子

外部委員 二宮孝富、西英久

事務局 衛藤美樹子

令和元年度の研究倫理・安全委員会は11回開催した。令和2年1月を除いた各月ごとに教員と大学院生から申請された研究計画書の審査を行った。今年度の申請件数は103件、欠番5件、審査計画書数は103件で、そのうち87件が承認された。昨年度に比べると申請件数は12件少なかった。C判定は12件あり、今年度も大学院生の申請資料の不備が目立った。前年度に研究計画の申請に関する手引きを申請者が分かり易いようにリニューアルしたが、大学院生の申請者はこの手引きを活用していないようである。

研究倫理教育に関しては一昨年度より日本学術振興会のeラーニング(eL CoRE)を導入し、教員全員が受講しているが、昨年度同様に新任教員や大学院新生が中心に受講した。また、今年度はeラーニング修了教員と院生に対しては日本学術振興会の研究倫理教材グリーンブックの通読を実施し、研究計画書の提出の際の必須条件とした。来年度は一般財団法人公正研究推進協会のeラーニングAPRINを導入し、教員、大学院生全員と一部の事務職員が受講できるように計画している。規程類に関しては今年度見直しを行わなかったが、教員・大学院生の研究計画の中で、医療機関等における患者データを活用する研究が増えてきたため、研究計画に関わる手引きにおけるこれに関連する箇所の一部改正を行った。

#### 今後の課題

研究計画書の審査に関して、大学院生の研究計画書不備が多く、計画書も十分に練られていないため不採率が高い。このため研究の初期(研究計画)の段階から指導教員による研究指導を徹底するように委員会からも働きかける。

#### 10-3-14 1) 動物実験小委員会

委員長 市瀬孝道

委員 影山隆之、岩崎香子、小嶋光明、定金香里、衛藤美樹子

令和元年度動物小委員会は8回開催した。動物実験研究計画書13件の審査を行い、新規審査件数

9件；変更・追加件数4件)であり、13件が学長によって承認された。令和元年度では計画に沿った動物実験が12件実施(1件は不実施)され、使用動物匹数はマウスが841匹(市瀬257匹、定金83匹、吉田415匹、岩崎51匹、樋口35匹)、ラットが143匹(岩崎76匹、市瀬51匹、定金16匹)で、総使用匹数は984匹であった。前年度の総使用匹数1,436匹に比べて今年度は28%減少した。これらの使用された動物のそれぞれの実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し令和2年5月22日学長に報告した。一方、2018年度に動物実験に使用された動物の慰霊祭を2019年5月22日に実施した。動物実験教育訓練に関しては平成31年4月8日と5月13日に動物実験講習会(市瀬・定金)を実施した。また、令和元年12月13日に実験研究(恵谷)、12月20日に研究の倫理と安全の中で動物を対象とした実験(市瀬)について学部3年生を対象に実施し、令和2年3月17日に人獣共通感染症の教育訓練を外部講師(万年和明氏)によって実施した。

前年度に冬期の飼育室内の湿度を、加湿器を用いて湿度環境を整えたが、水道水を用いていたため、水道水に含まれる鉱物(Ca, Si, S, Cl)が白い粉となって発生し、エアコンや飼育室内のフィルター等に付着して、エアコン機能を低下させてしまうことが分かった。今年度は水道水から鉱物や塩素成分を除去する浄水装置を設置すると共に、3飼育室のエアコンを取り替えることができた。

今後の課題としては、梅雨期にエアコンだけでは除湿が十分でなく湿度管理が難しいことから、除湿器の設置が各飼育室内に必要と考えられる。来年度はこれらの改善と、これ迄と同様に動物実験の研究計画書を審査し、動物への配慮とよりよい動物飼育環境の推進を図る予定である。

#### 10-3-14 2) 遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長 濱中良志

委員 市瀬孝道、甲斐倫明

今年度の活動は無い。

#### 10-3-15 広報・公開講座委員会

委員長 高野 政子

副委員長 小嶋光明

委員 秦さと子、石丸智子、恵谷玲央、徳丸由布子、姫野綾、矢部美香、黒木貴子

##### 1) 若葉祭教職員企画

学生主体の若葉祭は5月18日(土)、19日(日)に開催された。若葉祭で当委員会は、教職員と学生のコラボイベントの企画募集と、パネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示など当日の運営を行った。全体の参加者は2日間を通して340名で、イベントは8企画を開催し、パネルやパン



フレット、卒業研究のポスター展示により、大学の教育内容や設備の紹介ができた。イベントへの総参加者数は 284 名であった。両日ともに大雨の天候により、例年と比較して参加者数が少なかった。教職員と学生がコラボしてイベントを行うことで、学生と教職員との距離の近さが、今後本学を受験する予定の高校生などにアピールできたとともに、地域の人々とのふれあいの場ともなった。7 月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを配布した。また、全研究室に協力してもらい卒業研究のポスター展示は研究棟や講義棟に 17 枚掲示した。一般の方々や進学希望者にも大学の内容や取り組みが伝わるように配慮した。

## 2) オープンキャンパス

オープンキャンパスは、7 月 20 日（日）午前・午後の 2 回開催した。事前に、大分合同新聞など新聞社 5 社に記事を掲載、大分県オープンキャンパスガイドや生活情報誌などで広報した。当日は 480 名（生徒 327 名、保護者 153 名、昨年比プラス 96 名）と多くの参加者があり、本学の魅力を伝えることができた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や 1 年次生の合格体験発表、3 年次生、4 年次生からの在校生メッセージの発表などが好評であった。また、模擬授業 2 講座や、体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当することにより、高校生や保護者が在学生在と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。今年度より午前・午後の 2 回開催と、HP からの事前申し込み（先着 250 名ずつ）と変更したことで、会場内の混雑緩和が図れ、参加者の増加にも繋がった。次年度も、午前と午後の 2 回開催する。参加者より大学紹介の DVD を希望する意見があったことから、大学紹介に関する DVD 作成を今後の課題とする。

## 3) 出前講義

高校からの依頼により、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。看護系の教授 2 名、准教授、助教各 1 名を派遣した。大分県立臼杵高校（6 月 14 日）、熊本県立東陵高校（9 月 26 日）、大分県立中津北高校（10 月 11 日）、長崎県立長崎南高校（10 月 29 日）の 4 件であった。その際、2020 年版大学案内を持参し広報を行った。

## 4) 大学見学・ミニオープンキャンパス

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者から大学見学等の申し込みがあった都度対応していたが、今年度よりオープンキャンパスを午前と午後の 2 回開催にしたためか、申し込みはなかった。次年度は保護者や PTA への大学見学の募集等による広報を検討する。

## 5) 大学 HP、Facebook およびマスメディアによる広報

大学 HP の運用を行った。大学のイベント案内（若葉祭、オープンキャンパス、公開講座・講義など）や、その実施報告（大学アルバム）など、25 件（1 月 8 日現在）を掲載した。大学アルバムでは、学生のボランティア活動や地域での社会貢献活動についても随時に公開した。本学公式 Facebook を利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生など一般に速やかに発信し、各研究室と事務局の持ち回りで大学の風景などについて、51 件（1 月 8 日現在）を掲載した。

教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し 11 件を掲載した。大学 HP に掲載している大学 Q&A は、年 3 回（4 月、7 月、11 月）更新した。本学進学に関心のある高校生や、入試情報を必要とする受験生などを対象とし、随時公開した。

## 6) 大学案内パンフレットの作成と活用

委員会委員4名が大学案内パンフレットWGに参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2021年度版が次年度4月中に納品されるようにWGの支援を行った。

2020年度版の大学案内パンフレット2,000部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生活の具体的な説明などに活用した。若葉祭、オープンキャンパス時には研究棟入り口など目にとまりやすい場所に設置し、自由に持ち帰れるようにした。また、県下の病院や施設などへの配布、地域活動時の参加者への配布等により広く本学が周知され、入学希望に繋がるように広報活動に活用した。大学院などの記述もあるので、次年度から学部生にも配布することを検討する。

## 7) 公開講座

公開講座は、9月14日(土)午後J:COMホルトホール大分302-303会議室で開催された。今年度のテーマは「人生100歳を住み慣れた地域で健康に暮らすためにー地域包括ケアのしくみを知ろうー」と題して、講師は、大分県東部保健所所長、大分県厚生連鶴見病院看護部長、訪問看護師テーション管理者、本学保健管理学教授の4名が、それぞれの立場からの取り組みについて講演した。参加者は88名であった。受講者は看護職が多かったものの、一般市民や高校生からの質問や意見交換が活発に行われた。終了後のアンケートでは「大変良い」と「良い」が90%と高い評価が得られた。告知のチラシは県下の病院や施設、保健所への配布や、6月の大分県看護協会総会など早期に配布し広報した。さらに市報など地域広報に加え、マスコミや行政機関・病院等にも参加を呼びかけた。

## 8) 大学オリジナルグッズの作成

本学の広報活動推進を目的に、教職員に対し活用促進の取り組みを行った。具体的には、既存の大学グッズの一覧、および利用目的に応じたグッズの種類や利用手続きなどを提示した。適時利用状況を確認したうえで、今年度はボールペン2,000本を作成した。うち、1,000本は高校生や受験生向けにチェックシートをセットした暗記セットとした。

## 9) 広報誌「風の広場」

広報誌「風の広場」は後援会と共同で年2回(7月Vol.14、12月Vol.15)作成した。掲載内容は、中小規模病院等看護管理者支援事業や修士課程における保健師の養成などの大学の取り組みの紹介や卒業生インタビュー、教員の研究紹介等を掲載した。広報誌は県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに1,700部/回を配布した。

## 今後の課題

年度は従来の活動を行うとともに、オープンキャンパスを予約・二部制にするなどの改善を行った。令和2年度の当委員会の継続課題は、1)大学の教育研究活動の状況や、その活動の成果に関する情報を随時ホームページで公開し広報する。2)イベントの開催情報や学生の諸活動等を、新聞やTVなどのメディアやホームページ、広報誌等で発信する。3)一般県民(高校生含)、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。次年度の新規事業として、大学HPの更新について1年間をかけて取り組む。

### 10-3-15 1) 大学案内パンフレットワーキンググループ

リーダー 秦さと子

メンバー 恵谷玲央、足立綾、佐藤栄治、高野友愛、黒木貴子

2021年度版大学案内パンフレットについて、昨年度までの内容を基本としつつ「未来創造」をコンセプトに作成に取り組んだ。今年度は、柔らかい雰囲気の色合いを特徴とし、学年を重ねるごとに変化する色で成長する姿をイメージした。表紙、学部生、学部卒業生、大学院修了生の写真などを入れ替えることで新味を出し、手に取りたくくなるような大学案内パンフレットの作成に努めた。今後は、撮影から時間のたった写真の入れ替えが必要である。また、継続して本学の特徴がわかりやすく伝わるような掲載の仕方について検討していく必要がある。

### 10-3-16 国際交流委員会

委員長 Gerald T. Shirley

副委員長 甲斐倫明

委員 桑野紀子、田中佳子、恵谷玲央、吉川加奈子、丸山加菜、久保絃子

#### 1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

7月15日から19日までの5日間、蔚山大学からの交流派遣である学部生6名と同行教員2名を本学に受け入れた。また、満足度調査の結果、訪問全体について全員が「とても満足」と回答していた。来年度の相互交流の受入体制が検討課題として挙がり、見直しを行った。

#### 2) 本学学生の派遣

本学からは8月19日から23日までの5日間、学部交流派遣として学部生6名を同行教員2名と共に蔚山大学に派遣する予定であったが、韓国の社会情勢を踏まえても交流を推進することの意義を確認したが、両校で協議した結果、学生の安全性を最優先に考え、今年度の派遣事業は中止とした。

#### 3) 第21回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催で第21回看護国際フォーラムを令和元年10月26日に、別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。テーマを「のぞむ最期を支えるケアーアドバンス・ケア・プランニングについて考える」とし、国内から1名、韓国から1名、米国から1名の講師を招聘した。参加者は208名と大盛況であり、参加者アンケートの結果では講演内容について94%、討論内容について97%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

#### 4) 2020年の英語パンフレットのリニューアル

英語パンフレットをリニューアルするにあたり、内容、ページ数、レイアウト、写真等を検討し確定した。今回の改定では、交流のある海外の大学のパンフレットを参考に情報量のスリム化を図り、全体の統一感を持たせたものを作成した。令和2年の3月31日に500冊を納品した。

令和 2 年度に 2020 年英語パンフレット最新情報をもとに英語 Website の更新を行う予定である。

#### 5) 海外大学との交流の推進

8 月にインドネシアの Universitas Muhammadiyah Yogyakarta と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的とした MOU を締結した。12 月に韓国の仁荷大学校と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的とした MOU を締結した。

#### 今後の課題

令和元年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容とを十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

### 10-3-16 1) 英文 Web・パンフレットワーキンググループ

リーダー Gerald T. Shirley

メンバー 桑野紀子、岩崎香子、丸山加菜、高野友愛、久保絃子

#### 実施状況

英語パンフレットをリニューアルするにあたり、内容、ページ数、レイアウト、写真等を検討し確定した。今回の改定では、交流のある海外の大学のパンフレットを参考に情報量のスリム化を図り、全体の統一感を持たせたものを作成した。令和 2 年の 3 月 31 日に 500 冊を納品した。

#### 今後の課題

令和 2 年度に 2020 年英語パンフレット最新情報をもとに英語 Website の更新を行う予定である。

### 10-3-17 図書委員会

委員長 赤星琴美

副委員長 石田佳代子

委員 Gerald T. Shirley、安部真紀、斧田智恵、工藤信二、白川裕子、矢部美香

委員会選定及び学生リクエストによって新たに 1,781 冊(令和 2 年 3 月 31 日現在)の蔵書の整備および雑誌購読タイトルの見直しを実施(令和元年 6~9 月)した。また、「図書館だより」(発行回数 2 回)の発行、図書企画展示(企画展示 4 回、特別展示 1 回、ミニ展示 3 回)の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの 一冊」の実施、卒業予定者に卒業後の図書館利用案内の配

布（令和 2 年 3 月）や図書館メールサービス（新着資料、図書館だより等図書館サービスに関する案内）登録を開始（平成 31 年 4 月）し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。図書リユースデー（令和元年 7 月）開催＜展示冊数 401／リユース冊数 102＞し、約 25%がリユースされた。

令和元年 10 月より、研究・教育がより効果的に行うことができるよう、データベース「CINAHL with Full Text」ID・パスワードによる学外からの利用を開始した。また、株式会社メテオの医療情報配信サービス「メディカルオンライン」のトライアルを実施（平成 31 年 4 月、令和元年 9～10 月）し効果を検討したが、本年度の導入には至らなかった。

図書館入口東側に新聞保存棚の設置（令和元年 7 月）、書架上段に資料落下防止装置「ブックキーパーⅡ」を設置（令和元年 10 月）、書庫狭隘化対策として図書の除籍(890 冊)の実施（令和元年 11 月）、館内温度調査を実施（令和元年 12 月～）など、災害対策や利用環境改善を強化するため、教職員・学生が安心・安全、快適に図書館を活用できるよう環境整備を図った。

#### 今後の課題

卒業生・修了生の入館状況を次年度以降も継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していくことにした。

### 10-3-18 情報ネットワーク委員会

委員長 甲斐倫明

副委員長 品川佳満

委員 恵谷玲央、渡邊弘己、宿利優子、黒木貴子、原田千夏

本学のネットワーク運用支援、ユーザー支援、メール管理、サイボウズなどによる手続き支援などを定常的に行う業務を各委員が WG ごとに担当して行なった。日常的活動はサイボウズ に随時記録を残すやり方をとっている。定常以外の活動として、教務システムのアンケート機能の活用、年報作成システムの構築、および災害時連絡体制の調査と整備を行った。また、情報処理教室のプリンタを 2 台更新した。このプリンタの運用において、プリント枚数の上限を設定し、消耗品の無駄を省くことで学生にコスト意識を育てるプリンタ利用法を整備し運用を開始した。セキュリティ対策のための研修会を、学生を対象にした講習会と教職員を対象にした研修会を実施した。その他、学生用ファイルサーバ atom を reo に更新した。また、これまで懸案であった厚生学院の学籍簿 DB を CampusSquare に移行する計画を変更した。さらに、パソコンソフト「アクセス」で従来通り学籍簿 DB の管理を継続することとした。

#### 今後の課題

次年度の活動計画では、1) 財務システムのリモートメンテナンスの導入、2) CampusSquare の機能の学生用掲示板への活用、3) 仮想サーバのクラウド化、4) 新型コロナウイルス対応のためのオンライン授業の導入、5) 大学内で無線 LAN 接続の良くない環境の Wifi 整備を進めることとした。

#### 10-3-19 ハラスメント防止・対策委員会

委員長 清末敬一郎

委員 石丸智子、稲垣敦、田中保之（外部委員、弁護士）、林猪都子、矢部美香、吉村匠平、  
関根剛（オブザーバー）、秋吉良継（事務局）

令和元年度のハラスメント防止・対策委員会の 1)～3)の活動を行った。

##### 1) 独立した委員会の設置

自己点検・評価委員会から独立した委員会として設置し、学内の教職員、学部生、院生等の立場を代表した委員や外部の専門家（弁護士）による委員を構成員とした

##### 2) 教職員向けハラスメント研修会の開催

本委員会の委員である田中保之弁護士を講師として、ハラスメント研修会の開催し、52名の参加があった。

##### 3) 規程の改定及び外部相談窓口の拡充

教職員が相談員、調停委員会及び調査委員会の委員になった際に、運営が滞りなく進むよう規程の改定を行った。また外部相談窓口を1カ所から8カ所に増やした。

#### 今後の課題

今年度は、自己点検・評価委員会から独立した委員会となったところで、実体的な活動を行うことが中心であった。来年度は上記活動を実施するとともに、新体制にともなう従来の活動の見直し・充実に努めたい。

## 10-3-20 看護系全体会議

学長 村嶋幸代

学部長 藤内美保

事務局長 清末敬一郎

構成員 赤星琴美、足立綾、安部真紀、石田佳代子、石丸智子、伊東朋子、今村知子、内倉佑介、梅野貴恵、大嶋佐智子、小野治子、小野美喜、甲斐博美、影山隆之、川崎涼子、川野美佐子、草野淳子、桑野紀子、後藤成人、佐藤愛、佐藤栄治、篠原彩、宿利優子、秦さと子、杉本圭以子、高野政子、田中佳子、徳丸由布子、中釜英里佳、永松いずみ、林猪都子、稗田朋子、樋口幸、平野亙、姫野綾、福田広美、堀裕子、丸山加菜、三ヶ田暢美、森加苗愛、矢幡明子、山田貴子、吉川加奈子

2019年7月23日に第1回、2020年1月29日に第2回、計年2回の定例会議を開催した。昨年度より、議題に関する討議時間を十分に確保するため、実習報告は紙面報告としており、今年度も紙面による報告とした。

今年度は、第1回目は主にカリキュラム2022の構築に向けた検討課題や実習のあり方について討議を行った。第2回目は2020年度から総合看護学実習の指導体制の変更に関する説明と意見交換がなされた。また、カリキュラム2022構築に向けた確認等が行われた。

県立大学である本学の役割の確認と共にカリキュラム2022の構築に向け、発展的な講義・演習や実習指導体制のあり方について議論を行ってきたが、来年度も引き続き課題を明らかにし、本会議を看護系教員の意見の発信の場としていく。

## 10-3-21 衛生委員会

1号委員 清末敬一郎

2号委員 角匡幸

3号委員 赤星琴美

4号委員 佐伯圭一郎、秋吉良継

オブザーバー 今村知子

事務局 衛藤美樹子

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計9回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

### 1 職員の健康管理

(1) 定期健康診断を4月17日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。

- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを5月16日から29日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（59名受検、受検率80.8%、前年度比5.9%減）。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11月8日に学内接種を行った（希望者27名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を5月8日と11月12日に実施し、その評価の報告を行った。
- (5) 夏季休暇の取得促進のため広報を行い、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

## 2 健康増進活動支援事業

昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員36名が参加した。

## 3 職場巡視

12月19日と1月29日に学内を巡視した。その結果、敷地内の車道の一部陥没、実習・研究棟前の側溝にタバコの吸い殻を発見した。敷地内の全面禁煙の周知徹底を行い、また車道の修理は次年度の予算の状況を見ながら対応することとした。

## 10-3-22 評価委員会

委員長 稲垣敦

委員 梅野貴恵、清末敬一郎、藤内美保

本委員会は、学内申し合わせルールに従って理事長・理事以外の常勤教員の年間活動に関する評価を行い、理事長に報告する。また、評価方法の改善も当委員会の分掌事項となっている。本年度は、教員からの意見に基づいて評価方法に関して4点を改定した：①学会発表の筆頭著者以外にも得点を与える、②本学のFD研修会、短期国内・海外派遣、スキルアップのための自主的な研修会等への参加に得点を与える、③自由記述のページを加え、そこに学生支援や教育における工夫や努力等について記載してもらい加点する、④今年度の振り返り（反省等）と次年度の目標の記入欄を設ける。この改定を反映させた自己評価書等の資料の提出を12月18日に教員に依頼した後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、理事長に評価結果を報告した後、理事長名で教員に評価結果を示した（3月2日）。この評価結果に対し、評価基準が不明であるという意見が寄せられた（3月4日）。一方で、昨年に引き続き、今年も教員評価に関して教員から意見を集めた（3月12日～27日）。ここで集まった意見に関しては、4月以降に検討し、次年度の教員評価に活かしてゆくこととなった。

今年度は一部教員の自己評価書の提出が遅れたため、評価の開始が遅れてしまい、評価結果の返却が遅れたが、次年度は予定通り2月25日には返却できるように、教員に提出が遅れないように周知してゆく。



## 10-4 FD・SD 活動

### 1. FD 研修

- 1) 新任教職員研修：4月2日 9:00～16:45。対象者8名。大学組織概要、カリキュラム概要など、9領域に関する研修を実施した。
- 2) 科研費説明会・研修会・ピアレビュー：8月2日 14:40～16:00。参加者は34名。公立大学協会主催「科学研究費獲得セミナー」参加教員による研修、科研費申請の説明、今年度採択者3名の講義を実施した。また、先立って6月27日に新採用教員向けに、科研費申請のポイントに関する資料やインターネットサイト等の資料提供をメールにて実施した。科研費申請に先立つベテラン教員による助言（ピアレビュー）は9件行われた。
- 3) 教育に関する研修：12月10日 13:00～14:30。参加者学内32名、学外8名。テーマは「学習の可視化」で、授業設計や教育評価を中心とした内容であった。講師は、熊本大学大学教育統括管理運営機構教育プログラム管理室准教授 川越明日香氏。
- 4) 学生理解に関する研修：12月18日 13:00～14:30。参加者31名。テーマは「大学における学生指導へのヒント」で、昨年の高等学校教育までの発達障害児の現状と対応に引き続いたものとして企画され、大学および就労を中心とした内容であった。講師は、大分県発達障害者支援センター ECOAL 副センター長 田中秀征氏。実習中で参加できない教員のために講師の承諾を得てビデオ撮影した。
- 5) 人権に関する研修：2月14日 13:00～14:30。参加者50名。テーマは「部落差別の現状と未来—部落史の視点から—」で、講師は、大分県人権教育・啓発推進協議会人権問題研修講師 一法師英昭氏。
- 6) 研究に関する研修：3月16日に先端技術関連の研修会を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の為、今年度の開催は中止した。
- 7) その他の研修：平成31年度大分県自治人材育成センター県職員研修の新任課長級研修とマネジメント研修にそれぞれ教員1名ずつが参加・終了後に報告書を提出した。7月2日に公立大学協会主催の科学研究費獲得セミナーに教員1名、事務職員1名が参加した。

### 2. 学内競争的研究費

4月10日に募集を行い、奨励研究2件、先端研究2件の新規応募があった。5月9日に審査会が開催され、4件すべての採択およびそれぞれの助成額が決定された。その結果、平成30年度採択分とあわせ、奨励研究7件、先端研究7件への研究助成が行われた。なお、それぞれの成果については、3月16日のアニュアルミーティングにおいて報告された。

### 3. 国内／海外派遣研修

今年度の参加はなかった。

### 4. 授業評価

1年次32科目、2年37科目、3年23科目、4年7科目、合計99科目について実施した。結果は

担当教員に通知され、科目ごとの平均値一覧結果はウェブに掲載された。

#### 5. アニュアルミーティング

3月16日に発表研究費取得演題14題、一般演題9題がポスター発表形式で実施された。

### 10-5 研修派遣

#### 国内／海外派遣研修研修派遣

今年度の派遣はなかった。

#### 定金香里

派遣先：株式会社ケー・エー・シー

研究支援旅費を受け、株式会社ケー・エー・シーにて動物実験の技術講習を受講した。マン・ツーン・マンの指導により、静脈採血法や心穿刺採血法を習得した。

6月27日

派遣先：福岡大学医学部

公私立大学実験動物施設協議会主催の「実験動物管理者の教育訓練2019」を受講し、実験動物の飼養保管方法、健康管理などについて学んだ。訓練終了後、受講修了証が交付された。

6月15日

## 11 附属組織

### 11-1 図書館

- ・ 2019 年度利用者数
  - 図書館入館者数（延べ人数） 23,966 人
  - 学外からの利用者数（実人数） 911 人
  
- ・ 2019 年度受入図書冊数 1,781 冊
  - うち購入数 1,755 冊
  
- ・ 2019 年度受入雑誌タイトル数 229 点
  - うち購入数 145 点
  
- ・ 図書等資料蔵書数（2020 年 3 月 31 日現在）
  - 蔵書冊数 80,358 冊
  - 所蔵雑誌タイトル数 643 点
  - 電子ジャーナル購読タイトル数 627 点
  - 電子ブック購読タイトル数 15 点
  - 視聴覚資料 2,220 点

### 11-2 看護研究交流センター

#### 11-2-1 看護研究交流センター推進会議

センター長 稲垣敦

副センター長 影山隆之

メンバー 平野互、伊東朋子、濱中良志、小野美喜、篠原彩、神崎純子、清末敬一朗

オブザーバー 村嶋幸代

- ・ 昨年の課題であった看護研究交流センター推進会議を開催した（6 月 18 日）。
- ・ 推進会議では、看護研究交流センターは大学が戦略的に活動していくために重要な役割を担っているため、今後、機能を見直し、よりよい活動の場とするために今年度は大きな転換期にある。特に、各チームの役割を見直し、地域貢献をベースにした活動を展開させていくため、チーム内の連携を強化すると共に、各チームの活動を情報共有し、連携を深める場であることを確認した。

- 6つのチームが担っている役割をまとめ、どのような連携を図ることができるのかを検討し、さらに、大分県の看護保健医療にどのように寄与できるかを明確にした。これを図式化してHPに掲載するとともに、HPをリニューアルした。
- 看護研究交流センターの年報を別個に作成するのではなく、2019年度の年報では、看護研究交流センターを独立させて位置づけるよう自己評価・点検委員会に提案し、これが実現した。
- 教育研究審議会では、今まで通り各チームが報告することとした。
- 今後、学生との協働を推進することとした。
- 今後、複数のチームの協力関係の可能性を検討して行くこととなった。

## 11-2-2 地域交流チーム

リーダー 影山隆之

メンバー 内倉佑介、川崎涼子、神崎純子、清末敬一郎、篠原彩、藤内美保、稗田朋子、福田広美

予防的家庭訪問実習の主たる運営を担い、さらに野津原地区の多世代間交流事業に4回、富士見が丘わかば老人クラブに1回、延べ43名の学生がボランティアとして参加した。野津原地域ネットワーク連絡会にも地域施設の一つとして参加した。近隣の社会福祉施設にインターンシップで来日した韓国学生の見学を受け入れた。以上のためにチーム会議を年4回開催した。予防的家庭訪問実習に関しては、地域ステークホルダーとの調整と会議の開催、実習協力者への依頼、実習要項の作成と学生・教員へのオリエンテーション、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）、協力者を訪問しての面談等を行った。特に今年度は運営会議の仕組みを簡略化して年2回開催とし、準備のための幹事会は年3回開催としたが、運営に支障はなかった。前年度の一部学生で見られた訪問スケジュールのアンバランスは、指導によりかなり解消された。学生から他チームの活動も知りたいとの声があったことをふまえ、チーム毎の活動等を紹介する学生向けメルマガを5回発信した。本実習を活用した高齢者の地域見守りネットワークの運用も開始したが、幸いにして活用が必要な事例は発生しなかった。研究的には、実習を通じて学生が学んだことについてインタビュー調査を行い、成果を第78回日本公衆衛生学会及び2019年度おおいの創生シンポジウムで発表した。次年度の運営の参考とするために、学生の年度末レポートの分析を行った。以上のように、予防的家庭訪問実習は全体としてスムーズに進行した。この他、本実習の2022年新カリキュラムにおける位置づけについても検討を行い、さらに年度末にはCOVID-19の問題が顕在化してきたので、本実習の方法修正について検討を始めた。

予防的家庭訪問実習の予算に充ててきたCOC+事業が最終年度となったので、次年度から大学の独自予算で運営する必要がある。年度末に顕在化したCOVID-19感染が収束しなければ、2020年度には種々の軌道修正を迫られることになるので、これは大きな課題である。学生が他チームの活動を知るための方法についても、引き続き工夫を検討する。

### 11-2-3 継続教育推進チーム

リーダー 伊東朋子

メンバー 樋口幸、佐藤愛、後藤成人、篠原彩、神崎純子

令和元年度の継続教育推進チームには、看護研究交流センター職員 2 名がメンバーとして新規に加わり、6 名の体制となって、主となる以下の 1)~5)の活動計画を行った。

- 1) 6月19日(水)開学記念日にあわせ、第7回ホームカミングデイを13時30分~16時、23講義室および食堂において実施した。平成30年度卒業(18期)生、修了生(新卒者)の32名の参加と学部生9名、教職員47名の参加を得て、別府大学の佐藤教授による講演と食堂での交流会を行った。
- 2) 大分県看護協会令和元年度研修計画への講師派遣調整を行い、教員35名を講師として派遣した。
- 3) 統計・情報処理相談5件に対応した。
- 4) 看護研究支援事業の見直しとガイドライン及び申請様式等の改変を行った。派遣講師は2名(人間系、看護系のペア)として講師以上を派遣する。施設側の看護部の教育師長等と十分検討し、どのような人材を育てたいのか等、研究支援に求めるものについて検討し、年度初めに、派遣講師とチームとの打ち合わせ会議を持ち、支援施設の情報交換や過去の報告書を確認した。令和元年度の看護研究交流会として、第7回看護研究交流会を令和2年2月19日(火)14:00~15:00、場所:33講義室で実施した。4施設より各2名の参加を得た。
- 5) ホームページ上の継続教育推進チームの更新作業として、県内各施設への研究支援の案内と看護研究支援ガイドライン入れ替えや様式等のダウンロードができるように更新した。

### 11-2-4 産学官連携推進チーム

リーダー 濱中良志

メンバー 伊東朋子、樋口幸、佐藤栄治、秋吉良継、篠原彩、神崎純子

県内で開催された以下の産学官連携関連セミナーへ参加した。

- 令和元年度7月19日(金)大分大学FD講演会「新たな産学連携の取組と課題」(濱中、樋口、佐藤栄)
- 令和元年9月17日(火)第2回医療関連産業参入促進セミナー(樋口、秋吉、篠原)
- 令和元年11月12日(火)おおいた産学官交流合同シンポジウム(秋吉、篠原)
- 令和2年2月12日(水)東九州メディカルバレー構想推進大会への参加(佐藤栄、秋吉)

来年度は、大分県内等の主催する産学官連携関連セミナーに積極的に参加し、企業・他大学の先進的な事例を学内にフィードバックし、産業科学技術センターや弁理士等の連携体制を構築することを目標に掲げて活動する。

## 11-2-5 NP 事業推進チーム

リーダー 小野美喜

メンバー 大嶋佐智子、甲斐博美、神崎純子、草野淳子、藤内美保、高野政子、中釜英里佳、  
濱中良志、堀裕子、宮内信治、村嶋幸代、森加苗愛、吉川加奈子

令和元年度の NP 事業推進チームの主となる以下の 1)～5)の活動計画にそって活動を行った。

### 1) 大学院 NP コース学生を育成し、修了生を県内外に配置する

大学院カリキュラムの展開と質担保のための段階的な試験を行った。1 年次生には 12 月 16 日に口頭試問、2 月 26 日に進級試験を実施した。8 名が受験し 8 名が進級となった。2 年次生には実習前試験を実施（6 月 11 日 OSCE 試験）し、7 名が受験し 7 名が合格した。また令和 2 年 2 月 6 日の修了試験では修了予定者 5 名が受験し全員合格した。この 5 名は日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格試験（令和 2 年 3 月 1 日）に全員合格し NP 資格認定を受けた。年度当初 2 年次生は 7 名であったが、諸事情で 2 年次生が実習中に退学 1 名、休学 1 名となり、令和元年度 NP コース修了者は 5 名で県内 1 名、県外 4 名の就職となった。例年同様に学生の到達目標等をチーム内で協議し、学業等のサポートを行った。しかし休学者や長期履修者の増加により、修了者数が減少したことが課題である。働きながら学業をすすめられ、特に県内の学生配置数を増やすことが課題であり、オンラインシステム等を活用した学習方法を検討する。

### 2) NP 修了生の継続教育の実施

継続教育のため、メーリングリストを活用して適宜、学習支援につながる情報発信（学会情報、研修案内など）を行った。令和元年 2 月 8 日は修了生に対し、NP 資格認定の更新制度について説明会を開催した。参加者は 14 名であった。その際に、特定行為研修に関する修了者の意見を収集するためアンケートを行った。多数の修了生が、大学院修士課程で 21 区分 38 行為を履修することを望ましいと意見であった。今後の NP コースカリキュラム検討に向けて重要な意見を収集することができた。

### 3) 実習施設連携・特定行為研修

実習前後の実習施設合同会議（6 月、2 月）を開催し、実習施設の実習指導者と大学教員との連携体制が強化できた。また、「特定行為に係る看護師の研修制度」を組み込んだカリキュラムを展開したことから、研修を査定するため外部委員 4 名を含めた特定行為管理委員会を開催した。外部委員には、新規委員として新大分県看護協会長が着任した。第 1 回（7 月 9 日）は研修計画の妥当性を評価し、第 2 回（3 月 11 日）は、研修の修了判定を行い、老年 NP コース 5 名の特定行為研修（21 区分 38 行為）の修了を認定した。

### 4) NP に関する研究活動を行い、NP 大学院教育の特徴を社会に向けて発信する。

おおいた創生リカレント事業（COC+事業）に申請し、「おおいたの地域医療の課題とナースプラクティショナーの可能性」をテーマに、12 月 13 日（金）Jcom ホルトホール大分にて、村嶋学長と NP 一期修了生（光根美保氏）による講演活動を行った。大分県内の看護師ら 61 名が参加し、参加定員を開催ができ、大分県での看護の活動について貴重な意見交換ができた。

### 5) 日本 NP 教育大学院協議会、日本 NP 学会事務局運営

日本 NP 教育大学院協議会の事務局として、全国 11 大学院の NP 教育機関の連携と組織強化を図った。次年度の課題は、大学院で NP 教育を行う大学機関との連携をさらに強化し加盟校を増加させることである。

#### 11-2-6 学術ジャーナルチーム

リーダー 平野 互

メンバー G. T. Shirley、定金香里、安部真紀、徳丸由布子、山田貴子、秋本慶子、高野友愛、白川裕子

看護科学研究編集委員会ならびに査読委員の事務を行ったほか、「看護科学研究」17 巻 2 号（2019 年 7 月）の審査・編集・発刊に関する実務を行った。

17 巻 1 号は前年度末の 2019 年 3 月に発刊され、第 3 号の発刊も予定していたが査読に時間を要して年内の発刊ができなかったため、年度内の刊行は 1 号に留まり、目標である年間 3 号の発刊も 2 号までとなった。

編集事務に関しては、編集委員会の議論に基づいて、投稿規定や査読関連文書の整備を行った。

近年は一定数の投稿論文があるが、再三の査読を必要とする論文が多く、刊行までに時間を要する傾向が続いており、今年度はそれが顕著であった。今後も投稿論文を増やすための努力の継続は必要であるが、査読のさらなる迅速化、効率化のための改善を、編集委員会と事務局が一体となって進めていく。

#### 11-2-7 健康増進プロジェクトチーム

リーダー 稲垣敦

メンバー 赤星琴美、石丸智子、甲斐博美、木嶋彩乃、桑野紀子、佐藤愛、篠原彩、秦さと子、田中佳子、濱中良志、掘裕子、稗田朋子、樋口幸、丸山加菜、森加苗愛、渡邊一代

##### 【事業協力】

- Smart Life Project（厚生労働省）
- 大分県介護予防運動機能向上専門部会（大分県）
- おおいた創生協議会地域活性化事業（大分県、大分大学）
- スポーツ救護ナース及び救護員の養成、フォローアップ、派遣事業（大分県スポーツ学会、大分県スポーツナース協議会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院、西別府病院ほか）
- 第 8 回スポーツ救護スキルアップ研修会（大分県スポーツ学会、大分県スポーツナース協議会 6/8 アイネス）

- 第9回大分県スポーツ学会フォーラム（大分県スポーツ学会 6/8 アイネス）
- 第10期スポーツ救護講習会（大分県スポーツ学会 6/22-23 本学講堂）
- 世代間交流健康づくり事業（大分市社会福祉協議会①7/6、②9/7、③12/7、④2/1 多世代交流センター）
- 富士見が丘団地夏祭り（富士見が丘連合自治会 7/20-21 ふじみん公園）台風のため中止
- 姫島村健康づくり事業（姫島村健康推進課 8/2 姫島村離島センター）
- 九州中学校体育大会（九州中学校体育連盟、大分県中学校体育連盟 8/5-8 各競技会場）
- 大分市校区・地区対抗軟式野球大会（大分市 8/19 西部スポーツ交流広場）
- 大分県中学校新人大会（大分県中学校体育連盟 10/12-20 各競技会場）
- 大分県スポーツナース協議会設立（大分県スポーツナース協議会 8/15 ホルトホール大分）
- 2019 ラグビーワールドカップ大分大会（大分県、大分県ラグビー協会 10/2-20 昭和電工ドーム）
- あすぴあフェスタ 2019（大分県身体障害者福祉センター10/27 大分県総合社会福祉会館）
- 第35回ななせの里まつり（大分市、野津原地区商工会 11/3 みどりの王国）
- 姫島村健康づくりの集い（姫島村健康推進課 11/12 姫島村離島センター）
- 総合型地域スポーツクラブ交流会 2019（大分県教育委員会、SC おおいたネットワーク、NPO 法人ヘルス・フィットネス・フォーラム 11/23 昭和電工武道スポーツセンター）
- 大分県スポーツ学会第11回学術大会（大分県スポーツ学会 12/1 J:COM ホルトホール大分）
- 別府大分毎日マラソン大会（九州陸上競技協会、大分県、大分県教育委員会、大分市、大分市教育委員会、別府市、別府市教育委員会、毎日新聞社、RKB 毎日放送、OBS 大分放送 2/2 大分市陸上競技場）
- オレンジフェスタ（トヨタ大分 2/8-9 トヨタ大分本店）
- スポーツ医科学活用事業（大分県教育委員会、NPO法人ヘルス・フィットネス・フォーラム、総合型クラブおおいたネットワーク 2/16 竹町ドーム広場）
- 2020 森林セラピートレイルランニング in 野津原・のつはるウォーキング大会（大分市、野津原商工会 3/22 大分市立のつはる青少年自然の家）新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止
- 第8回森林探検ウォーキング（富士見が丘連合自治会 3/28 ふじみん公園）新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止
- 2020 横浜スポーツ学術会議（日本体育学会、日本スポーツ体育健康科学学術連合、日本体育測定評価学会、ICSSPE、日本学術会議等 2020/9/8-22 パシフィコ横浜ノース）新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催に変更

#### 【人材育成、啓蒙・啓発】

- 第8回スポーツ救護スキルアップ研修会（6/8 アイネス 70名）
- 第9回大分県スポーツ学会フォーラム「ダイバーシティ社会におけるスポーツ、スポーツによるダイバーシティ社会」（6/8 アイネス 70名）
- 第10期スポーツ救護講習会（6/22-23 本学講堂 103名）



- 姫島村健康づくり事業研修会「知っ得2！脂肪がつきにくい身体をつくろう！～おいしい炭水化物との付き合い方～」、「必見！脂肪よさらば！の運動スペシャル！」（第1回 8/2 姫島村離島センター20名）
- 姫島村健康づくりの集い「長い健康寿命をさらに生き活きと！ぴかぴかの血管になる食習慣のこつ」（11/12 姫島村離島センター159名）
- 第11回大分県スポーツ学会学術大会「競技スポーツと健康スポーツ：特にオリンピック・パラリンピック」（12/1 J:COM ホルトホール大分）

#### 【県民の健康・体力チェック】

- 本学若葉祭（5/17-18 本学 207名）
- 世代間交流健康づくり事業（多世代交流センター7/6 大分市社会福祉協議会 122名）
- 大分トリニータホームゲーム（昭和電工ドーム 7/13 大分フットボールクラブ 706名）
- 世代間交流健康づくり事業（多世代交流センター9/7 大分市社会福祉協議会 119名）
- 富士見が丘体育祭（横瀬小学校 10/20 富士見が丘連合自治会 272名）
- 若葉会サロン（富士見が丘公民館 9/22 わかば老人クラブ 30名）
- 第35回ななせの里まつり（みどりの王国 11/3 野津原商工会 1019名）
- 総合型地域スポーツクラブ交流会 2019（昭和電工武道スポーツセンター11/23 大分県教育委員会、SC おおいたネットワーク、NPO 法人ヘルス・フィットネス・フォーラム 355名）
- 世代間交流健康づくり事業（多世代交流センター12/7 大分市社会福祉協議会 204名）
- 世代間交流健康づくり事業（多世代交流センター2/1 大分市社会福祉協議会 127名）
- オレンジフェスタ（2/8-9 トヨタ大分本店 757名）
- スポーツ医科学活用事業（竹町ドーム広場 2/16 大分県教育委員会、SC おおいたネットワーク、NPO 法人ヘルス・フィットネス・フォーラム 345名）

#### 【スポーツ大会の救護員】

- 九州九州中学校軟式野球競技大会 8/5 昭和電工スタジアム大分
- 九州中学校相撲競技大会 8/8 宇佐市総合運動相撲場
- 大分市校区・地区対抗軟式野球大会 8/19 西部スポーツ交流広場 B
- 大分県中学校新人サッカー大会 10/12 中津市小祝グラウンド海
- 大分県中学校新人サッカー大会 10/12 西部スポーツ交流広場 B
- 大分県中学校新人サッカー大会 10/13 明野中学校グラウンド
- 大分県中学校新人サッカー大会 10/19 西部スポーツ交流広場 A
- 大分県中学校新人サッカー大会 10/19 西部スポーツ交流広場 B
- 大分県中学校新人バスケットボール大会 10/12 大在中学校体育館
- 大分県中学校新人バスケットボール大会 10/13 滝尾中学校体育館
- 大分県中学校新人バスケットボール大会 10/13 原川中学校体育館
- 大分県中学校新人バスケットボール大会 10/19 王子中学校体育館
- 大分県中学校新人バスケットボール大会 10/19 植田中学校体育館

- 大分県中学校新人バスケットボール大会 10/19 植田西中学校体育館
- 大分県中学校新人ソフトボール大会 10/12 日岡球場
- 大分県中学校新人ソフトボール大会 10/12 舞鶴球場
- 大分県中学校新人バレーボール大会 10/19 大分西中学校体育館
- 大分県中学校新人バレーボール大会 10/19 城南中学校体育館
- 大分県中学校新人柔道大会 10/19 宇佐市総合運動武道場
- 大分県中学校新人柔道大会 10/20 宇佐市総合運動武道場
- 大分県中学校新人ハンドボール大会 10/27 王子中学校体育館
- 大分県中学校新人相撲大会 11/2 宇佐市総合運動相撲場

#### 【研究】

- 森林浴が車椅子利用者の自律神経活動に及ぼす影響：車椅子専用の森林浴コースを用いて、大分県スポーツ学会第 11 回学術大会, J:COM ホルトホール大分 12/1
- 出前健康・体力チェック！おおいた創生シンポジウム, 大分大学 2/8
- 看護大生の腰痛の実態と生活習慣等との関連性, 卒業研究
- 看護大生のストレスと身体活動の関連性, 卒業研究

#### 【広報・メディア】

- NHK WORLD – JAPAN : 「Medical Frontiers Special - Search for Superfoods in Oita -」取材協力、<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/medicalfrontiers/20180916/3004521/>
- 大分合同新聞：休校中の子供の自宅での運動(3/6)
- 姫島村 CTV 「知っ得 2！脂肪がつきにくい身体をつくろう！～おいしい炭水化物との付き合い方～」、「必見！脂肪よさらば！の運動スペシャル！」
- おおいた創生シンポジウム「今、大分の大学で学べること」：「出前健康・体力チェック！」(2/8 大分大学)
- パネル展示：当チームの活動について (4/1-3/31)
- 本学 HP：①地域・社会貢献、②大学アルバム 2019「健康・体力チェック」等 10 回
- パンフレット：本学パンフレット 2020 (p.40)
- テキスト：めじろん元気アップ体操 & 同ビッグ 4 パンフレット PDF 版、<https://www.pref.oita.jp/site/790/mejironntaisou.html>
- 動画:YouTube・大分県庁 HP:めじろん元気アップ体操動画再生回数 238,793 回(2020/7/30 現在)、<https://www.pref.oita.jp/site/790/mejironntaisou.html>

#### 【その他】

- 和太鼓サークル支援 (15 名)
- 女子柔道部支援 (3 名)
- ヨガサークル支援 (20 名)

当プロジェクトの最終的な目的は、既存の資源を活用した地域住民の健康増進システムの構築である。これまで、学生とともに毎年 3,000～6,000 名の県民の健康・体力チェックを実施してきたが、今年度のおおいた創生協議会地域活性化事業で実施した調査結果から、以下の点が明らかになったのは大きな収穫であった：①県民はこのような健康・体力チェックの必要性を感じていた、②健康・体力チェックは県民の健康意識を刺激できる、③運動に取り組む目的は様々であるため、健康・体力チェックではこれらの目的に応じたチェック項目や要素を取り入れてゆくことが重要である、④健康・体力チェックは、担当した学生の地域への理解や愛着を深める。つまり、健康・体力チェックは、参加した県民の健康意識を刺激し、要望に応えるだけでなく、地域や地域住民のことを考えられる学生を育て、これが地域振興や地域住民の健康増進につながる可能性がある。したがって、今後は健康・体力チェックのサービスラーニングとしての効果を明らかにする必要がある。一方、今年度初めての活動としては、看護系教員のメンバーが県内スポーツ大会の救護員を務め、今までとは異なったフィールドで看護師としての能力を活かして社会貢献・地域貢献を行った。実際、多忙であったにも関わらず、担当者からは好評であった。また、10 年間に渡り大分県スポーツ学会に協力して養成して来たスポーツ救護ナース 650 名のうち 100 名以上が、大分県の要請でラグビーワールドカップという世界でも超一流の国際的なスポーツ大会で救護員を務めることができたのは大きな成果であった。今後も、これまで醸成してきた県や地域との関係性を重視しながら、学生とともに活動を継続してゆく予定である。

次年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のための新しい生活習慣の下で、地域での活動の仕方を考え、また、実際に活動を進めてゆくことが最重要課題である。

## 12 設備等

### (1) 校舎

所在地 大分市大字廻栖野 2 9 4 4 番地の 9

○ 校地 (単位：m<sup>2</sup>)

区分	面積
校舎敷地	57,990
運動場用地	13,140
駐車場	7,734
計	78,864

○ 校舎建物 (単位：m<sup>2</sup>)

区分	面積	構造
管理棟	2,224	鉄筋コンクリート3階建
講義棟	2,816	鉄筋コンクリート3階建
図書館・食堂棟	3,346	鉄筋コンクリート3階建
実習・研究棟	5,882	鉄筋コンクリート3階建
交流棟	930	鉄筋コンクリート3階建
体育館	1,067	鉄筋コンクリート平屋建
実験動物施設	102	鉄筋コンクリート平屋建
車庫	69	軽量鉄骨平屋建
倉庫及び機械室	49	鉄筋コンクリート平屋建
計	16,485	

### (2) 南大分キャンパス (研修・実習センター)

所在地 大分市豊饒二丁目 7 番 2 号

敷地面積 2,354 m<sup>2</sup>

延床面積 1,077 m<sup>2</sup> 鉄筋コンクリート2階建

### (3) 職員住宅

所在地 大分市大字廻栖野 3 2 0 2 番地の 1

敷地面積 2,147 m<sup>2</sup>

延床面積 754 m<sup>2</sup> 鉄筋コンクリート3階建等(2棟・12戸)

## 13 中期目標・計画

### 13-1 中期目標

#### 公立大学法人大分県立看護科学大学中期目標

##### 第1 目的

公立大学法人大分県立看護科学大学（以下「法人」という。）は、大分県における看護学の拠点として大学を設置し、及び管理することにより、看護に関する高等専門教育、学術研究及び国際交流を通じて、生命の尊厳と倫理観を基盤とし、科学的視野に富み、及び社会の要請に応えることのできる心豊かな人材を育成し、もって地域社会における保健医療及び福祉の向上並びに我が国の看護学の進展に貢献することを目的とする。

この目的を実現するため、法人の基本的な目標及び業務運営に関する目標を定める。

##### 第2 法人の基本的目標

###### 1 教育

生物学的なヒトから社会で生活する人間までを総合的に理解する能力と豊かな人間性を持ち、自律的に判断し、及び実践的に問題を解決する能力を備えた看護職者を育成する。

###### 2 研究

看護学の基礎的な知見を生み出す研究に加えて、社会に直接還元できる成果を目指した研究を推進し、国際的なレベルの研究成果を創出する。

###### 3 社会貢献

看護職者及び地域社会のニーズに応じた取組を行い、関係団体との連携・協働による開かれた大学を目指すとともに、看護学教育研究拠点として社会に貢献できる大学を目指す。

###### 4 組織運営

適切な組織・人事体制の下で、経営及び財政の適正化と効率化を図る。

また、適切な点検・評価体制の充実を図り、運営の透明性の確保に努めるとともに、公立大学法人としての説明責任を果たす。

##### 第3 業務運営に関する目標

###### 1 中期目標の期間及び教育研究上の基本組織

###### (1) 中期目標の期間

平成30年4月1日から平成36年3月31日まで

###### (2) 教育研究上の基本組織

この中期目標を達成するため、別表に掲げる学部及び研究科を置く。

###### 2 大学の教育研究等の質の向上に関する目標

###### (1) 教育

## ア 教育の内容及び到達目標

看護の対象となる生物学的なヒトから社会で生活する人間までを総合的に理解する能力と豊かな人間性を養い、専門職として自律的に判断し、課題を解決する能力を持った人材を育成する。これらの教育を通して、看護学の発展・向上に貢献するとともに地域医療に貢献する。

### (ア) 学部教育

4年間の看護師基礎教育のモデルの評価・改善

養護教諭(一種免許)養成課程の評価・改善

### (イ) 大学院教育

保健師及び助産師の基礎教育のモデルを確立

卒業後、地域においてリーダーとなる専門性の高い看護人材(看護師、保健師、助産師及びNP(ナースプラクティショナー))の養成

専門領域の教育を教授し、及び研究できる人材の育成

## イ 教育の実施体制

教育機能を強化し、より効果的で魅力ある教育を推進するために、教育効果を適切に評価し、学生の学習方法及び授業方法にフィードバックする。また、本学の教育理念と看護・看護学の魅力や将来性を社会に周知し、多くの意欲のある優秀な学生を確保していくために積極的な活動を行う。

同時に、必要な教育環境を整備する。

## ウ 学生等への支援

学生の自己学習能力を高めるための支援、生活及び健康管理の支援並びに就職支援の体制の充実を図るほか県内就職の推進や卒業生のUターンへの支援などについても取り組む。

## (2) 研究

### ア 研究の方向

看護学研究機関として、保健、医療及び福祉の分野における基礎的な研究に加えて、社会的・地域的要請の高い課題に対する多様な研究活動を推進できるプロジェクト研究を積極的に設け、質の高い研究成果を目指す。

### イ 研究の実施体制

国際的又は地域的な共同研究を推進し、研究成果を国際会議や学内外の報告会等を利用して積極的に社会に発信する体制を構築する。

## (3) 社会貢献

### ア 地域社会への貢献

大分県内の看護職者の資質向上のための教育及び研究を支援し、地域の看護学教育研究拠点としての役割を担う。卒業生及び修了生との連携や継続教育の実施を通して、地域の保健、医療及び福祉への貢献を目指す。また、高まる看護需要に応えられるよう、質の高い看護職者を県内に輩出するとともに、行政機関や各種団体と連携し、健康長寿の社会づくりの推進に寄与する。

### イ 国際交流の推進

教育・研究における国際交流及び国際協力を促進するとともに、国外からの研修生や留学生

を積極的に受け入れ、学生の国際的な視野を育成する。

#### ウ 産学官連携の充実強化

主体的及び組織的に産学官連携に取り組むことで、研究成果等の社会還元を進めるとともに、実践に根ざした独創性のある人材を育成する。

### 3 業務運営の改善及び効率化に関する目標

#### (1) 運営体制

理事長のリーダーシップの下に、弾力的かつ機動的な運営を行うことにより、法人の掲げる教育、研究及び社会貢献に関する基本的な目標を達成するとともに、学外から登用する役員や委員の意見を積極的に受け入れ、地域に開かれた大学運営を推進する。

事務処理の合理化及び簡素化を図るため、事務局の組織体制及び事務処理体制を継続的に検討し、改善を図る。

#### (2) 人事・労務管理の適正化

教育研究組織及び事務局組織の業務内容や専門性に応じて、多様な方法により幅広い分野から優秀な人材を確保するとともに、教職員の能力向上、健康の保持増進及び組織の活性化を図る。

業務に対する教職員の意識・意欲及び能力を高めるため、教職員の評価制度について継続して改善・充実を図り、活用について検討する。

### 4 財務内容の改善に関する目標

#### (1) 自己収入及び外部資金の獲得

経営の安定化を図るため、授業料等の学生納付金及び公開講座講習料等の受益者負担金については、適正な金額を定め、確実に収入する。また、教員の研究費等外部資金を獲得するための体制を充実させ、大学全体で取り組む。

#### (2) 経費の効率化

経費抑制に対する点検・見直しを行うとともに、教職員のコスト意識を高め、法人運営費の効率的な執行に努める。

#### (3) 資産の適正管理及び有効活用

法人の資産を適正に管理・運用するとともに、大学の施設・設備を有効に活用し、地域社会への貢献を図る。

大学や研究者が保有する知的財産を活用し、学術研究の発展及び社会生活の向上に貢献する。

### 5 自己点検・評価及び情報の提供に関する目標

#### (1) 自己点検及び自己評価の充実

教育、研究、社会貢献及び組織運営の状況について、毎年度自己点検及び自己評価を行い、併せて第三者評価を受ける。また、それらの結果を公表するとともに、大学の活動及び組織運営の改善のために活用する。

(2) 情報公開や情報発信の推進

公立大学法人として、県民をはじめ社会への説明責任を果たし、大学の活動に対する県民の理解や参加を求めるために、大学の教育研究活動・社会貢献の成果及び運営の状況に関する情報を積極的に公開するとともに、効果的な情報発信に努める。

6 その他業務運営に関する重要目標

(1) 施設・設備の整備と活用

法人の掲げる教育、研究及び社会貢献に関する基本的な目標を達成するため、中長期的な視点による計画的な施設・設備の整備と活用を図る。

(2) 大学の危機管理

学内における事故や犯罪及び災害の発生を未然に防止し、安全・安心な教育研究環境を実現するために、安全衛生管理体制及び防災・防犯体制の充実・強化を図る。

同時に、災害時の危機管理体制の整備に努める。

(3) 人権尊重の推進

学生及び教職員の人権意識の向上を図るとともに、人権侵害や各種ハラスメントを防止するための取組を推進する。

(4) 情報管理の徹底

大学が保有する情報を適正に管理する。

別表

学 部	看護学部
研究科	看護学研究科



## 13-2 中期計画

### 公立大学法人大分県立看護科学大学 中期計画【第3期】

#### I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

##### 1 教育

###### (1) 教育の内容及び到達目標

ア 学部教育では、4年間の看護師基礎教育で目指す看護師像と身に付ける能力を明確にして学内外で共有すると共に、地域包括ケアシステムの推進など社会の動向を踏まえて現行カリキュラムの評価を行い、看護師基礎教育モデルの更なる充実を図る。併せて、看護学の発展・地域医療に貢献できる人材の養成を行う。また、養護教諭（一種免許）養成課程の教育評価を行い、必要に応じて改善する。

イ 大学院修士課程では、保健師、助産師及びNP（ナースプラクティショナー）の教育について随時見直しを行い、地域で求められる人材を育成する。また、専門性の高い看護職者の社会的な役割と今後の課題について、修了生の業務実施状況等の追跡等により検証し、教育に反映する。更に保健師助産師看護師法で定める特定行為に係る看護師の研修等を実施するとともに、大学院における看護職者の学び直しや看護管理者養成について教育モデルを構築する。

ウ 大学院博士課程では、看護学及び健康科学の研究者及び教育者として必要な資質を養うための教育を行い、そのために必要な環境を整備する。

###### (2) 教育の実施体制

ア 優秀な学生を確保するための活動を積極的に行う。同時に県の看護水準向上に必要な教育環境のための整備を行う。更に組織的な授業評価、卒業時のコンピテンシーや看護技術到達度を測るための評価基準の作成など、教育効果を適切に評価できる仕組みを導入・強化し、教育効果の検証と改善を継続して行える体制を確立し、教育機能を強化する。

イ 本学の教育理念と看護・看護学の魅力や将来性を社会に周知するため、フォーラムや公開講座・研修会などの地域活動を学内外で広範囲に実施し、学部及び大学院における看護教育の意義と魅力を発信する。

ウ 大学院における E ラーニング環境など、学習環境の整備を一層進めるとともに、本学大学院の特色について各種の方法で発信し、地域医療の推進を図る。

エ 学部及び大学院全体について、社会情勢に応じて適宜定員の見直しを行う。

###### (3) 学生等への支援

ア 学生の自己学習能力を高めるための支援として、IT化を更に推進し、情報処理能力や看護技術能力の向上を図る。

イ 看護師の国家試験合格率100%を目指し、学生が主体的に学べる教育環境を整備する。

ウ 学年担任制やIT化による学習指導等を充実化することにより、一人ひとりの学生の生活

を支援する体制を充実させ、健康管理の支援（メンタル支援を含む）並びに健康な生活志向、勉学の意欲及び看護職への適応に向けた効果的な支援を行う。

エ 就職を希望する学生については、就職率100%、県内就職率50%以上を目指して、県内の就職先拡大の取組や就職相談等を強化する。また、同窓会と連携し卒業後のUターン支援を行う。

オ 学生の修学支援のため、基金制度の創設を検討する。

## 2 研究

### (1) 研究の方向

ア 保健・医療・福祉の分野における基礎的研究を重視し、質の高い研究成果を学術発表するとともに、地域社会に還元する。

イ 大分県の保健・医療・福祉の改善に資する研究を継続発展させるとともに、地域交流や行政等の機関との連携を通じて地域社会に成果を還元する。

### (2) 研究の実施体制

ア 大学が重点的に推進するプロジェクト研究には優先的に研究資金や研究資材を配分・配置するとともに、大学の研究費を競争的に資金配分し、研究を活性化する。

イ 国際会議や学内外の研究成果報告会を定期的に開催するとともに、学術発表することを通して研究成果を積極的に地域社会に発信・還元する。

## 3 社会貢献

### (1) 地域社会への貢献

ア 一般住民を対象とした公開講座や健康教室など、地域社会のニーズに応える活動を様々な機会で開催する。

イ 地域の看護学教育研究拠点としての役割を担うため、講師派遣や相談窓口の設置など様々な活動を通して、県内の看護職者の質向上のための教育・研究・実践を支援する。

ウ 地域の保健医療機関との緊密な連携と支援を行うため、卒業生・修了生及び看護職等に対する研修や必要とする情報の発信など継続教育を発展させる。

エ 県内の保健医療福祉行政や各種団体・住民活動等と教育や研究を通して連携し、健康長寿のための社会づくりや災害支援に向けた活動を行う。

### (2) 国際交流の推進

ア 姉妹校等との定期的な交流を積極的に進め、教員及び学生同士の国際交流を促進する。

イ 教員及び学生の国際的な視野を育成するために、看護国際フォーラムや研究交流を実施する。また、総合看護学実習では、学生の希望により国外へも門戸を広げる。

### (3) 産学官連携の充実強化

ア 地域の保健・医療・福祉の分野におけるシーズやニーズを把握し、産学官連携による研究

を推進するとともに、こうした研究を担う人材を育成する。

イ 産学官連携の充実のため、知財管理の仕組みの見直しを行う。

## II 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1 運営体制

#### (1) 運営体制の強化

ア 学長を兼ねる理事長が、法人運営及び教育研究の両面の責任者として強いリーダーシップを発揮し、効果的な意思決定ができる体制を進める。

イ 教育、研究及び社会貢献の推進のため、学内組織のあり方について適宜検討し、必要に応じた見直しを行う。

ウ 事務処理の合理化・簡素化を図るため、組織の統合や管理運営体制及び事務組織のあり方について、定期的に評価した上で必要に応じた見直しを行う。

#### (2) 開かれた大学運営

ア 教員派遣や学外委員就任などにより地域との連携を図る一方、学識経験者等幅広い意見を取り入れた大学運営を図る。

イ 学生や卒業生、看護・保健医療福祉関係者、地域住民等からの意見も反映させ、開かれた大学運営を図る。

### 2 人事・労務管理の適正化

#### (1) 人事・労務管理の適正化

ア 性別、年齢、国籍等に柔軟に対応した公募制による採用を行うとともに、業務内容・人員配置を定期的に評価し、人事配置を適正に行う。

イ 教員の評価制度を継続して発展させるとともに、大学固有事務職員の評価制度を確立させ、人事の適正化に努める。

ウ 裁量労働制の適切な運用に努める。

#### (2) 人材の育成

ア 学内外の研修制度を積極的に活用し、教職員の能力の向上を図る。

イ 大学事務に精通した専門性の高い大学固有事務職員を育成する。

#### (3) 健康の保持増進

ア 職員自身が自らの健康課題に自主的に取り組めるよう支援を行う。また、組織的な支援体制の構築や風通しのよい職場づくりの推進にも取り組む。

## III 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1 自己収入及び外部資金の獲得

#### (1) 自己収入の確保

ア 授業料、入学考査料、入学料、証明料及び公開講座講習料等の額について、受益者負担の観点から、社会情勢の変化に応じて適宜見直しを行うとともに滞納防止等に努め、収入の確保を図る。

イ 教育研究に支障のない範囲で、積極的に施設等を適正な料金で貸し付けることにより自己収入の確保を図る。

## (2) 外部資金の獲得

ア 研究費等外部資金に関する情報収集やレビュー制度等による助成申請の個別支援を強化し、外部資金の獲得を促進する。

## 2 経費の効率化

### (1) 経費の効率化

ア 教職員のコスト意識の涵養に取り組み、執務環境の改善、業務の迅速化など事務の効率化を進める。

イ 教職員及び学生の省エネルギー・省資源に関する意識の向上を図り、光熱水費等の節減に取り組む。

ウ 契約期間の複数年度化や契約方法の競争的環境の確保等により管理経費の抑制に努める。

## 3 資産の適正管理及び有効活用

### (1) 資産の適正管理

ア 資金の管理・運営については、収支計画や資金計画を勘案しながら適正かつ効率的な運用を行う。

イ 土地・建物等の資産については、計画的かつ適正な維持管理を行う。

### (2) 資産の有効活用

ア 教育・研究に支障のない範囲で施設等を開放し、地域社会に貢献する。

イ 研究成果、著作物その他大学が所有する知的財産を積極的に公開して社会に貢献する。

## IV 自己点検・評価及び情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1 自己点検及び自己評価の充実

#### (1) 自己点検及び自己評価の充実

ア 教育の目標を達成するために、教育の状況について継続的に点検・評価し、定期的に改善・向上に取り組む。

イ 自己評価・評価結果については、外部者による検証を実施し、その結果を学内及び社会に公開する。

### 2 情報公開や情報発信の推進

#### (1) 情報公開や情報発信の推進

- ア 法人運営の透明性を進め、県民に対する責任説明を果たすため、財務運営状況や中期目標・中期計画等の法人情報を常時ホームページで公開する。
- イ 大学の教育研究活動の状況や、その活動の成果に関する情報をホームページで定期的に公開する。
- ウ 本学の各種イベントの開催や学生の諸活動等の情報をメディアやホームページ、広報誌等で発信する。

## V その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置

### 1 施設・設備の整備と活用

#### (1) 施設・設備の整備と活用

- ア 実践能力向上のため、教育研究組織及び教育課程に対応した看護技術修得のための施設・設備等の学習環境を財政状況を踏まえつつ整備する。
- イ 施設・設備の整備、更新に当たっては、省エネ仕様やユニバーサルデザインに配慮する。
- ウ 本学の財産的基盤の中核をなす建物について、機能を将来にわたり安全かつ確実に発揮させるため、点検・診断を定期的に行い、適切な時期に補修・補強対策等を実施する。

### 2 大学の危機管理

#### (1) 大学の危機管理

- ア 教職員及び学生への安全・衛生管理の意識向上を図るため、安全衛生委員会、学生生活支援委員会で学内点検・事故防止の講習会等を実施する。
- イ 教職員及び学生への危機管理意識の向上及び事故・災害時の安全確保を図るため、全学で防災訓練等を実施するとともに災害時の危機管理体制を整備する。

### 3 人権尊重の推進

#### (1) 人権尊重の推進

- ア 教職員については、研修会等を通して、人権意識の高揚と各種ハラスメントの防止を図る。
- イ 学生については、講義や研修を通して、人権問題の理解と意識の向上を図る。

### 4 情報管理の徹底

#### (1) 情報管理の徹底

- ア 本学が定める情報セキュリティ基本方針に関する規程で定める物理的・人的・技術的なセキュリティ対策等が適切に機能するよう、評価と改善・改良に取り組む。

## VI 予算、収支計画及び資金計画

別紙のとおり

VII 短期借入金の限度額

1 短期借入金の限度額

1 億円

2 想定される理由

運営費交付金の受入時期と資金需要との期間差及び事故の発生等により緊急に必要となる対策費として借り入れることを想定する。

VIII 出資等に係る不要財産又は出資等に係る不要財産となることが見込まれる財産がある場合には、当該財産の処分に関する計画

なし

IX VIIIに記載する財産以外の重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画

なし

X 剰余金の使途

決算において剰余金が発生した場合は、教育研究の質の向上及び組織運営の改善に充てる。

XI 大分県が設立する地方独立行政法人の業務運営並びに財務及び会計に関する規則(平成 18 年大分県規則第 1 2 号)で定める事項

1 施設及び設備に関する計画

安全面・保全面における計画的な修繕を行うとともに、実験動物施設などの研究設備の改修について、設置者である県と協議しながら推進する。

2 人事に関する計画

「II 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置」の「2 人事・労務管理の適正化」に記載のとおり。

3 法第 40 条第 4 項の規定により業務の財源に充てることのできる積立金の処分に関する計画

(1)積立金については、次の事業の財源に充てる。

ア 教育研究の質の向上を図るための設備の充実

イ その他教育、研究に係る業務及びその付帯業務

4 その他法人の業務運営に関し必要な事項

なし

収容定員

平成30年度	看護学部	320人
	看護学研究科	76人
平成31年度	看護学部	320人
	看護学研究科	76人
平成32年度	看護学部	320人
	看護学研究科	76人
平成33年度	看護学部	320人
	看護学研究科	76人
平成34年度	看護学部	320人
	看護学研究科	76人
平成35年度	看護学部	320人
	看護学研究科	76人

(別紙)

## VI 予算、収支計画及び資金計画

### 1 予算(人件費の見積りを含む。)

平成30年度～平成35年度 予算

(単位：百万円)

区 分	金 額
収入	
運営費交付金	3,522
自己収入	1,464
授業料及び入学検定料収入	1,401
雑収入	63
受託研究等収入	284
計	5,270
支出	
業務費	4,547
教育研究経費	1,038
人件費	3,509
一般管理費	439
受託研究等経費	284
計	5,270

(人件費の見積り)

中期目標期間中、総額3,509百万円を支出する。(退職手当は除く。)

(注)人件費の見積りについては、当該年度の人件費見積額を踏まえ試算しているが、定期昇給、ベースアップ、社会保険料の改定等は含まない。

(注)退職手当については、公立大学法人が定める規程に基づいて支給することとするが、運営費交付金として措置される額については、各事業年度の予算編成過程において、職員の退職手当に関する条例を基準として算定される。

(運営費交付金の算定方法)

運営費交付金は、平成30年度予算額を基準として積み上げた額をベースとして、一定の仮定の下に試算したものであり、各事業年度の運営費交付金については、各事業年度の予算編成過程において決定される。

### 2 収支計画

平成30年度～平成35年度 収支計画

(単位：百万円)

区 分	金 額
費用の部	5,333
経常費用	5,333
業務費	4,831
教育研究経費	1,038
受託研究等経費	284
人件費	3,509
一般管理費	439
雑損	-
減価償却費	63
臨時損失	-
収益の部	5,333
経常収益	5,333
運営費交付金収益	3,522
授業料等収益	1,401
受託研究等収益	284
雑益	63
資産見返負債戻入	63
臨時収益	-
純利益	-
総利益	-

(注)受託研究費等は、受託事業費、共同研究費及び共同事業費を含む。

(注)受託研究等収益は、受託事業収益、共同研究収益及び共同事業収益を含む。



### 3 資金計画

平成 30 年度～平成 35 年度 資金計画  
(単位：百万円)

区 分	金 額
資金支出	5,270
業務活動による支出	5,264
投資活動による支出	-
財務活動による支出	-
次期中期目標期間への繰越金	6
資金収入	5,270
業務活動による収入	5,270
運営費交付金による収入	3,522
授業料及び入学検定料等による収入	1,401
受託研究等による収入	284
その他の収入	63
投資活動による収入	-
財務活動による収入	-

## 14 名簿

### 14-1 役員

理事長（学長）		村嶋幸代	
理事	学部長	藤内美保	
理事	研究科長	稲垣敦	
理事	事務局長	清末敬一郎	
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	門田淳一	
理事（非常勤）	社会福祉法人百徳会理事長	小寺隆	
理事（非常勤）	大分経済同友会恒久幹事	高橋靖周	R1.9.30 退任
理事（非常勤）	（株）大分銀行取締役会長	姫野昌治	R1.10.1 就任
監事（非常勤）	大分県看護協会参与	神品實子	R1.7.31 退任
監事（非常勤）	大分県看護協会監事	中野洋子	R1.8.1 就任
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝	

### 14-2 審議会委員

#### 経営審議会

学内委員	理事長	村嶋幸代	
学内委員	理事	藤内美保	
学内委員	理事	稲垣敦	
学内委員	理事	清末敬一郎	
学外委員	理事（非常勤）	門田淳一	
学外委員	理事（非常勤）	小寺隆	
学外委員	理事（非常勤）	高橋靖周	R1.9.30 退任
学外委員	理事（非常勤）	姫野昌治	R1.10.1 就任
学外委員	弁護士	千野博之	
学外委員	立命館アジア太平洋大学副学長	吉松秀孝	
学外委員	大分合同新聞社取締役	松尾和行	
学外委員	大分県看護協会会長	竹中愛子	R1.6.30 退任
学外委員	大分県看護協会会長	大戸朋子	R1.7.1 就任

#### 教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋幸代	
学内委員	学部長	藤内美保	
学内委員	研究科長	稲垣敦	
学内委員	事務局長	清末敬一郎	
学内委員	生体科学教授	濱中良志	

学内委員	生体反応学教授	市瀬孝道
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学教授	甲斐倫明
学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎
学内委員	言語学教授	<b>Gerald T. Shirley</b>
学内委員	基礎看護学教授	伊東朋子
学内委員	成人・老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	高野政子
学内委員	母性看護学教授	林猪都子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山隆之
学内委員	保健管理学教授	福田広美
学内委員	地域看護学教授	赤星琴美
学内委員	国際看護学准教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

## 14-3 教職員名簿

### 14-3-1 専任教員

生体科学	教授	濱中良志		
	准教授	安部眞佐子		
	学内講師	岩崎香子		
生体反応学	教授	市瀬孝道		
	准教授	吉田成一		
	学内講師	定金香里		
健康運動学	教授	稲垣敦		
	准教授	吉村匠平		
人間関係学	准教授	関根剛		
	非常勤助手	秋本慶子		
環境保健学	教授	甲斐倫明		
	准教授	小嶋光明		
	助教	恵谷玲央		
健康情報科学	教授	佐伯圭一郎		
	准教授	品川佳満		
	助教	渡邊弘己		
言語学	教授	G.T.Shirley		
	准教授	宮内信治		
	非常勤助手	高野友愛	R2.3.31	退職
基礎看護学	教授	伊東朋子	R2.3.31	退職
	准教授	秦さと子		
	助教	石丸智子		
	助教	田中佳子		
	臨時助手	川野美佐子	H31.4.1	採用
			R1.7.31	退職
		臨時助手	三ヶ田暢美	R1.9.1
看護アセスメント学	教授	藤内美保		
	准教授	石田佳代子		
	助教	山田貴子		
成人・老年看護学	助手	内倉佑介	H31.4.1	採用
	教授	小野美喜		
	准教授	森加苗愛		
	助教	堀裕子		
	助教	中釜英里佳		
	助教	宿利優子		

	助教	佐藤栄治		
	臨時助手	光根美保	R1.7.29	採用
(NP コース担当)	助教	甲斐博美		
小児看護学	非常勤助手	大嶋佐智子		
	教授	高野政子		
	准教授	草野淳子		
母性看護学	助教	足立綾		
	教授	林猪都子		
助産学	助教	永松いずみ		
	助教	徳丸由布子		
	教授	梅野貴恵		
	助教	安部真紀	R2.3.31	退職
	助教	樋口幸		
精神看護学	助教	姫野綾		
	教授	影山隆之		
	准教授	杉本圭以子		
保健管理学	助教	後藤成人		
	教授	福田広美		
	准教授	平野互		
	助教	吉川加奈子	R2.3.31	退職
地域看護学	助教	稗田朋子		
	教授	赤星琴美		
	准教授	川崎涼子	R2.3.31	退職
	助教	小野治子		
	助教	佐藤愛		
	臨時助手	矢幡明子	R1.7.31	退職
国際看護学	臨時助手	谷村優香	R1.8.1	採用
	准教授	桑野紀子		
看護研究交流センター	助教	丸山加菜		
	臨時助手	篠原彩		

#### 14-3-2 就職相談員

就職相談員 小川三代子

#### 14-3-3 非常勤講師（学部）

麻生良太 教職概論、教育方法論  
横山秀樹 教職概論  
長谷川祐介 生徒指導

飯田法子	教育相談
河野伸子	教育相談
鈴木篤	教育学概論、道徳教育と特別活動
藤田文	学校教育心理学
今井航	教育課程論、教育制度論
生田淳一	教育方法論
中島暢美	教育相談、教職概論
堀本フカエ	学校保健学、養護概論Ⅱ、教職概論
石本田鶴子	大学ナビ講座
松久美	災害看護論
佐藤弥生	災害看護論
松本昂	微生物免疫論
澤田佳孝	美術とこころ
西英久	哲学入門
松田美香	言語表現法
大杉至	社会学入門
二宮孝富	法学入門（日本国憲法）
足立恵理	文化人類学入門
小川伊作	音楽とこころ
朴貞蘭	韓国語

#### 14-3-4 非常勤講師（大学院）

廣瀬福美	NP 論
立川洋一	老年アセスメント学演習
田村委子	NP 論・老年実践演習
光根美保	NP 論
古川雅英	老年実践演習
佐藤博	老年実践演習
山本真	老年実践演習
迫秀則	老年実践演習
宮川ミカ	老年アセスメント演習
高根利依子	老年 NP 特論
藤谷悦子	老年実践演習
塩月成則	老年薬理学特論、老年疾病特論、病態生理学特論、 老年実践演習、老年薬理学演習
小野剛志	老年薬理学演習
庄山由美	老年 NP 特論
増井玲子	疾病予防学特論

玉井文洋	健康危機管理論
三浦源太	疾病予防学特論
平川英敏	薬剤マネジメント特論
藤内修二	広域看護学概論、健康危機管理論、疾病予防学特論
池邊淑子	疾病予防学特論
本山秀樹	健康危機管理論
大津孝彦	地域保健特論
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
若松正人	健康危機管理論
甲斐仁美	看護管理学特論
佐藤弥生	看護管理学特論
柿本貴之	看護管理学特論
山路野百合	看護科学研究、健康科学研究特論
竹内山水	老年実践演習
伊東弘樹	老年臨床薬理学特論
岩波栄逸	老年診察・診断学特論
阿部航	老年診察・診断学特論
工藤欣邦	老年診察・診断学特論、老年疾病特論
糸永一朗	老年診察・診断学特論、老年疾病特論
安東優	老年診察・診断学特論
永瀬公明	老年診察・診断学特論
財前博文	老年疾病特論
小寺隆元	老年疾病特論、老年薬理学演習
甲原芳範	老年疾病特論
一万田正彦	老年疾病特論
竹下泰	老年疾病特論
木村成志	老年疾病特論
卷野雄介	病態生理学
甲斐誠司	老年アセスメント学演習、老年疾病特論
中村朋子	老年診療診断学
中村雄介	老年実践演習、老年診察診断学
加隈哲也	老年診察診断学
式田由美子	小児看護学特論
山崎清男	看護教育特論
黒木雪絵	小児看護学特論、NP論
菅谷愛美	小児看護学特論、NP論
佐々木真理子	小児看護学特論、NP論

井原健二	小児診察・診断学特論
岡成和夫	小児診察・診断学特論
小林修	小児診察・診断学特論
前田知己	小児診察・診断学特論
久我修二	小児疾病特論
井上真紀	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
江口春彦	小児診察・診断学特論
別府幹庸	小児診察・診断学特論
大野拓郎	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
糸長伸能	小児疾病特論
岩松浩子	小児疾病特論
福永拙	小児疾病特論
清田晃生	小児診察・診断学特論
佐藤圭右	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
長濱明日香	小児診察・診断学特論
松本康弘	小児薬理学特論
後藤愛	小児看護学特論、NP論
小山秀夫	看護政策論
小池智子	看護政策論
立森久照	看護政策論
中西三春	看護政策論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
飯田浩一	周産期特論
豊福一輝	周産期特論
後藤清美	周産期特論
中村聡	リプロダクティブ・ヘルス特論
嶺真一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論、周産期特論
戸高佐枝子	助産マネジメント論
生野末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
上野桂子	母子成育支援特論
井上祥明	母子成育支援特論
井上貴史	リプロダクティブ・ヘルス特論
實崎美奈	ウイメンズヘルス特論
佐藤敬子	母子成育支援特論
清水久美恵	地域母子保健学特論
鈴木由美	地域保健特論、地域母子保健学特論



西田欣広	リプロダクティブ・ヘルステ論
花田克浩	リプロダクティブ・ヘルステ論
高城翔平	広域看護アセスメント学演習
平井健一	老年疾病特論
上田徹	老年診察・診断学持論
藤本紀代美	広域看護学概論
田中遼大	老年臨床薬理学持論

#### 14-3-5 事務職員

事務局長	清末敬一郎		
総務グループ			
課長補佐	高橋勝三	H31.4.25	転出
主幹	矢部美香		
主幹	黒木貴子	H31.4.26	転入
副主幹	矢野昌哉	H31.4.25	転出
副主幹	衛藤美樹子	R2.3.31	転出
副主幹	秋吉良継	H31.4.26	転入
主任	久保紘子		
事務員	宮川眞美		
事務員	羽田野玲架	H31.4.1	採用
事務員	紀真由美	H31.4.1	採用
事務員	草牧有美	R1.6.1	採用
教務学生グループ			
主幹	坂本晴生		
副主幹	染矢哲朗	H31.4.25	転出
副主幹	原田千夏	H31.4.26	転入
主査	近藤亜矢	R2.3.31	転出
主任	神崎正太		
事務員	有馬沙希	H31.4.1	採用
保健師	今村知子		
図書館管理グループ			
サブリーダー	白川裕子		
非常勤司書	工藤信二	R2.3.31	退職
非常勤司書	斧田智恵		
看護研究交流センター			
事務員	神崎純子		